

ムラクモ600

草浪

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

艦娘：適性のある人間が改造手術を施されたもの

深海棲艦：UMA

アラサーの叢雲ちゃんが頑張る話。

目次

本編

第1話

1

第2話

6

第3話

15

第4話

23

第5話

32

第6話

42

第7話

46

第8話

53

第9話

58

第10話

66

えくすとら

ムラクモ600(さんぷる)

73

本編

第12話

80

第13話

89

第14話

98

第15話

108

第16話

117

第17話

127

プリンツGTI #00

139

第19話

150

第20話

163

第21話

171

第22話

ムラクモ600

#終

## 本編

### 第1話

ほんの数年前まで、私は都会のビル群の中で生きていた。疲れ果てた顔をしたサラリーマン達に囲まれて、夜遅くまでパソコンとにらめっこしていたはずだ。

「入るわよ」

それが今は海が一望できる豪華な部屋で働いている。それも、目の前にいるのは優秀なエリートさん。毎日私の目を苦しめ続けたモニターはない。今は昔から愛用しているペンで書類を作るだけ。

「今日もよろしく頼む」

彼は読んでいた書類から目を離さず私に答える。何と無愛想なのだろうか。これでも昔は多くの男性から声をかけられたのだけど。

「今日は新しい子が来る。昼過ぎにはここに来るはずだ」

彼はそう言っ一枚の書類を渡してきた。大本営からの通達書。そこには今日付けで着任する者の名前が書いてある。重巡洋艦、鈴谷。私は本名の横に書かれた年齢を見て、驚きが隠せなかった。私よりも九つも下だ。

「子供まで巻き込まなきゃならないほど状況が悪いのかしら？」

「適性があり、本人の意志があれば艦娘になれる。叢雲も志願してここに来たのだろうか？」

「……………まあ、そうね」

きつと現場にいるエリート達は知らないだろう。私達がどうして艦娘にならなくてはいけなかったのかを。そして、艦娘になるためにこの世のものとは思えない程の苦痛を味わなければいけないことを。

「きつと彼女も自分の意志で来るのよね」

何故自分が艦娘になったのか。本当の理由はきつと知らない。彼も、これから来る彼女も。でも私は知っている。

「ならさっさと午前の分は終わらせちゃいましょう」

私はそう言い、愛用のペンを走らせた。

――

「チーッス！鈴谷だよ！」

私は若い。まだ若い。そう自分に言い聞かせるしかなかった。正直まだ頭が混乱している。私自身も初対面で彼に大概な挨拶をしたのは覚えている。だけど、それは私の方が軍歴が上だったからだ。しかし彼女は違う。今回が始めての配属だということは先程の書類が教えてくれた。

「貴艦の配属、心より歓迎する」

我らが司令官は、顔色一つ変えずにそう言う私の方を見た。

「叢雲、この案内を頼む。私は第二艦隊と哨戒任務の件で呼ばれている。何かあれば会議室を訪ねてくれ」

「わかったわ。じゃあ鈴谷さん、行きましょう」

「鈴谷でいいよ。よろしくお願いね！」

彼女はそう言う私に手を差し伸べた。握手しようということなのか。私はその手を握り返すと、彼女は満面の笑みを浮かべた。

「じゃあ行きましょうか」

私はそう言い、執務室を後にした。

――

工廠、ドック、食堂と案内し、彼女の私室まで案内すると、楽しそうにしていた鈴谷の顔が曇った。

「叢雲はすごいね。その歳でそんなにしっかりして、みんなからの信用もあって……………」

その歳で、という言葉は一体全体どういう意味なのだろうか。私が真っ先に思い浮かんだ感想はそれだったが、どうも彼女の様子がおかしい。

「それなりの努力はしてきたから」

私はそう答えた。どうして自分が艦娘になったのかを覚えていた私は、それなりに努力をしてきたつもりだ。一年目の艦娘の訓練を駆逐艦の艦娘でありながら巡洋艦を抑えて上位三人に入っている。亀の甲よりなんとやらというのは伊達じゃない。

「鈴谷も努力してきたつもりだけど、叢雲ぐらいの時は何も考えずに生きてたよ。ずっと遊んでた。やっぱり努力は昔からやらなきや駄目なんだね」

鈴谷はそう言うのと困った笑いをしていた。困っているのは私だ。どうやら鈴谷は私のことを年下に見ている。そして今、結構複雑で面倒な相談をされている。

「どうして遊んでいたのに急に努力を？」

私がそう尋ねた。昔から努力をしてきたという自覚は正直に言うとなない。私は海がない田舎で生まれて、都会という華やかで素敵な場所に憧れていた。だからそれなりに勉強して都会の大学に行った。そのままそつちで就職したわけだけど、今思えばそれが間違いだったと思える。鈴谷は壁に寄りかかると、迷った素振りを見せたが話始めた。

「昼も夜も構わずに遊び回っていんだけどさ……あの空襲で親が死んで……家も無くなって、全部が無くなって……いなくなっただけから気がついたの。親がいたから私は幸せだったんだって。もう遅いけど、どうしても親孝行がしたくて、立派なお墓を立てたかったの。でも、馬鹿な私じゃそんなお金作れないし、もう体でも売るかーって思った時に適性があることを知ったの。それでここに来た」

あの空襲とは、未確認飛行物体が都会の空に現れ、爆発する何かを大量に投下した日の事だろう。私はその日、偶然にも営業で地方にいたため、被害は免れた。だけど、戻ってみると高層ビル群は見る影もなかった。

「そう、っ、両親を亡くされて……」

この時、私はあることに気がついた。

「あなた、もしかして記憶があるの？」

私がそう言うと、鈴谷は驚いた顔をしていた。

「うん！もしかして叢雲も？」

「じゃあ、あの拷問じみた手術も覚えているのね？」

「勿論覚えてるよ。本当に痛かったよね。けれど、体は動かないし、ただ痛みだけが伝わってきて……………でも一緒に訓練を受けた子は誰も覚えてなかったのに」

驚いた。私と同じ子を見るのはここに来て初めてだ。私の時もそうだった。私だけ記憶が残っていた。

「でも、よく耐えられたね。何年目なの？」

「訓練を含めて四年よ」

「四年……………？そんな小さい時からここにいるの？」

「ここに来たのは脱サラしてからよ」

私がそう言うと、鈴谷はしばらく考え、みるみるうちに顔が青ざめていった。

「すいませんでした！今までの失礼をお許しくださいませ！」

それはそれはもう土下座でもするんじゃないかという勢いで頭をさげた。

「別に構わないわ。年下だと思われていたのですもの。許してあげるわ」

「後で虐めたりしませんよね？軍隊の女性社会ってすごく怖いのですが」

「私をなんだと……………でもその気持ちはわからなくはないけど、ここは他所みたいにそういうのはないわ。みんな仲良くしてる」

「でも、裏では悪口言い合ったりとか……………」

「ここにいる子の中には堂々と悪口をいう子もいるけど、陰口をいう子はいないわよ。心配しないで。それと別に敬語じゃなくていいわ。」

さつきまでタメ口だったのに急に敬語を使われると気持ち悪いわ」

「でも……………」

「でももない。上官命令よ。ただ、TPOはわきまえて頂戴」

「わかりまし……………わかった」

鈴谷はようやく頭をあげると、じつくりと私を見た。まるで不思議なものを見ているかの様だった。言いたいことは何となくわかっている。

「気をつけなさい。私より歳上はあと二人いるから」



「えっ、誰か教えて……………」

「じゃあ今日はゆっくり休みなさい！荷物は中に入っているはずよ！」

私は半ば強引に鈴谷を部屋に押し込むと扉を閉めた。明日から楽しくなりそうだ。

## 第2話

鈴谷がここに来て一週間が過ぎようとしている。前線から離れ、稼働率が低いこの鎮守府では基本的には訓練を積み、演習で結果を出すというのが定番になりつつある。当然鈴谷もそろそろ演習に駆り出される頃だろう。私はそう考えていた。

「叢雲、少しいいか？」

デスクワークがある程度片付き、寂しくなった机の上に肘をついた司令官は私を呼ぶ。こういう時は大体彼の中で結論は出ているが、私に意見を求める。

「何かしら？」

「鈴谷のことなのだが……」

何だか少し話しくそうだ。私は首をかしげ、話の続きを促した。「彼女の演習はしばらく先にしようと思う」

彼はそう言ってファイルを一冊私に手渡した。その中から一枚を取りだし見てみると、鈴谷の訓練における成績であった。それを見た私は言葉を失った。他の書類も取り出して見てみる。やはりどれも似たようなものだ。

「本当に適性があるというの……？」

「艦装を装備出来るのだからあるのだろう」

鈴谷の成績は酷いものだった。細かい数字は公表出来ないが、簡単に言えば、走れない、避けれない、当たらないの三拍子が揃っている。しかし、それだけならまだよかった。鈴谷の口調に対する苦情も出始めている。司令官にあの調子じゃ、緒先輩方にはもつと碎けたものを使っているだろう。私は頭を抱えた。

「頼まれてくれるか？」

何をと聞かなくてもわかる。つまり、私に専任で教官をやれということだ。

「わかったわ………しばらくここを空けるからよろしく」

私は重たく、上げたくない腰をあげ、鈴谷をさがしに出た。

探し人はなかなか見つからなかった。ドックを探していると丁度遠征から帰ってきた艦隊と出会った。旗艦を勤めた曙が全員から被害を聞いている。駆逐艦で重巡洋艦をまとめているのはすごいと思う。そういうえば、うちの重巡の多くはこの遠征に参加してたわね。「あら、叢雲じゃないの」

話を聞き終わり、司令官への報告に向かう曙が私に気づいた。私は帰還した艦隊に「おつかれさま」と声をかけ、曙に歩み寄った。

「ねえ、ここで緑の長髪でブレザー着た子を見なかった？」

「服装まではわからなかったけど、緑の長髪の子なら工廠で見たわよ」「そう、わかったわ。ありがとう」

「どういたしました。アイツは執務室にいる？」

「多分いるはず。サボってたらお灸を据えてあげて」「わかったわ」

曙と別れ、私は工廠へと向かった。

――

「お疲れ様。今日は開発も建造も聞いてないけど……」

「今日は探し物よ。鈴谷来てないかしら？」

「ああ、鈴谷さんね……」

代理でこの工廠を任されている夕張は明らかに不満そうな顔をした。夕張が人に……それも年下にさんをつけるなんて珍しい。

「鈴谷がどうかした？」

「あの人、艦装を時間までに返さないし、訓練時間外もどっかに持ち出してるんで困ってるのよ。この前なんて、夜中にコンビニの袋持って帰ってきたし」

あの馬鹿。基本的外出には申請がある。ここは他所に比べたら外出申請は通りやすい。というより、事後報告でも通るぐらいの緩さ

だ。もし有事があればどうするのかと司令官に問い詰めた時、その時はその時だと言うぐらいだ。

「後でキツク言っておくわ……………」

私は頭痛がしてきた。鈴谷は予想以上の問題児らしい。

「今も鈴谷さんの艀装がないから、多分どつか遊びに行ってるんじゃない？」

「私の艀装は動かせるかしら？首根っこ捕まえ引きずり戻してくる」

「動かせるけど……………叢雲さんがやらなくても、他の子に任せれば？」

「いえ、私がやるわ。用意して」

「了解」

夕張に急遽艀装を用意してもらい、私は比較的自由に穏やかな海に出た。

—————

しばらく海を航行していると、大きな音が聞こえ、遠くに大きな波しぶきがあがった。

「見つけた……………あの馬鹿、あんなところで何してるのかしら？」

艀装の出力を下げ、私は鈴谷の背後からゆっくりと近づいた。鈴谷の姿がはつきりと見えるところまで近付いた。鈴谷はペットボトルの飲み物を一気に飲み干すと、その容器を投げた。放物線を描き、海に着水したそれを確認した鈴谷はそれに目掛けて砲撃をした。弾はペットボトルの遥か後ろに着弾した。その時の爆風でペットボトルはどこかへ流れて行ってしまった。鈴谷は持っていた袋からまた飲料を取り出すと再び飲み干した。

「あなた、よくそんな飲めるわね」

私が後ろから声をかけると、鈴谷は口に含んだ飲み物を盛大に吹き出した。驚いた様子で振り返った鈴谷は耳まで赤くなっていた。

「叢雲さん……どうしてここに？」

鈴谷はとてもぎこちない様子だった。

「外出許可も艀装使用許可も出してない家出少女を探すため」

私はそう言い、鈴谷の持っていた袋の中からお茶を取り出した。探し人が見つかり気が抜けたのか、私の喉は水分を欲していた。

「ほら、見ててあげるから続けなさいよ」

私がそう言い、鈴谷は緊張でガチガチになった。持っている砲が目に見えるほど揺れている。誰が見ても当たらないことは明白だ。鈴谷は片目を閉じ、狙いを定めた。砲の揺れが僅かに収まる。

(もしかしてこの子………)

鈴谷の放った砲弾は、今度はペットボトルの付近に着弾した。命中弾と言ってもいいだろう。鈴谷は物凄く嬉しそうな顔で私に振り返った。

「まあまあね」

私がそう言っていると、どうだと言わんとばかりの鈴谷の顔がしかめっ面に変わった。

「なんでよ、当たったじゃん」

「両目で照準しなさい。そう習わなかった？」

「どうやって撃ったって当たればいいじゃん」

どうにも、こうにも現代っ子らしい。そういえばOLの時にもこういう新入社員の教育をしたことがあった。その時はどうしていたかしらね。

「あなた、もし私たち駆逐艦と撃ち合いになったら確実に沈むわよ」

「鈴谷は重巡洋艦だもん。叢雲みたいな貧相な武装じゃ沈まないもん」

あら？この子、今私の背中のギソウじゃなくて、顔の下を見えていなかったかしら？貧相な武装とはどういう意味かしら？

「……………なら私に当ててみなさい」

「えっ？」

鈴谷の間の抜けた声が聞こえた。

「私は撃たないから。ちゃんと狙いなさい。一発でも当てられたら何でも言うこと聞いてあげる。けど、当てられずに私に触られたら私の言うこと聞いてもらうから」

「ちよ、ちよっとー」

鈴谷の声を無視し、重巡洋艦の砲の射程ギリギリまで離れた。

『いいわよ。撃つてきなさい』

無線をとばすと、僅かに時間が空いたが砲撃の音が聞こえた。

「何を躊躇しているのかしらね……」

私はそう呟くと、足の艀装の出力を一杯にした。立ち上がりこそこかったるく感じるが、ある程度回ってくれば気にならない。その間も弾が雨霰の如く飛んでくるかと思えば飛んでこない。私がちよっと前までいたところの近くに着弾。

「脳に行くはずの栄養が違うところに行ったのかしら?」

私は薙刀型の艀装を持ち直すと、鈴谷の方に真っ直ぐ走った。鈴谷の焦った顔が見えてくる。

「ほら、もう狙いもつけられない」

鈴谷が砲を放つと同時に私は左に進路を変え、そのまま此の字運動をしながら鈴谷との距離を詰めた。私が薙刀を振りかざすと、鈴谷は両目を瞑って出鱈目に砲を撃った。

「終わりよ」

もう鈴谷に装填するだけの時間は残されていない。私は一気に距離を詰め、空いている方の手で鈴谷の胸を掴んだ。大きくて柔らかい。私の手は私の意志に反して動き続ける。先程まで焦った顔をしていた鈴谷の顔が真っ赤に茹であがる。突如、大きな音がした途端に激痛が走った。私の意識はそこで途絶えた。

――

「叢雲さんー」

私はその声で目が覚めた。目を開けると視界一杯にいろんな顔が

こちらを見ている。身体を起こそうとすると、一番近くにいた夕張が慌てた顔でそれを止める。

「大丈夫ですか?」

寝起きの私を夕張は遠慮なく揺らす。もし大丈夫じゃない容態の身体だったらこんな雑に扱わないで欲しいものだ。

「大丈夫よ……」

私は揺れる視界の中で、長門の前で正座している鈴谷を見た。夕張の腕を掴み、揺れを止めてそちらを見ると、私のまわりにいた全員が鈴谷を見た。その視線に気がついた鈴谷は今にも泣きそうだ。

「……………彼女に非はないわ。私が悪いの」

私はそう言い、身体を起こして伸びをした。肩と首がなる。そのまま立ち上がると足の筋肉が強張っているのがわかる。どうやら足にも来ているようだ。

「しかし、鈴谷が……………」

「私が悪いの」

私がそう言い、鈴谷に近付くと長門は困った顔で鈴谷から離れた。

「大丈夫? 怪我してない?」

私が正座する鈴谷と目線の高さをあわせると、鈴谷は泣きそうな目で私を見た。

「鈴谷は大丈夫……………本当にごめんなさい。動揺してしまつて……………」

「いいの。私が悪いんだから……………」

「まさか叢雲さんがそつちだとは思わなくて……………私、どうしていいか……………」

私の思考が一瞬止まった。鈴谷の言葉を理解した時、私の額の血管に血液が流れるのを感じた。

「この思春期真っ盛りが……………そんなこと、考えられなくしてあげるわ」

私はそう言い、その場にいた神通を呼んだ。彼女は私の一個下だ。

「この子に海軍とは何か……………艦娘とは何かを教えて。二度と海にゴミ捨てられない体にしてあげて」

私がそう言うと、普段は大人しい顔をしている神通は悪い顔で嗤った。

「いいんですか？新人の重巡洋艦なら妙高さんに任せられた方が……」

口では謙遜しているが、顔がやらせてくれと言っている。神通が艦娘になる前は自衛隊の教官をしていたらしい。詳しくは知らないけど、教え子に神通基準で出来るトレーニングをさせ、出来なかった分を自分の分にプラスして教え子たちの前で平然とやりのけていたらしい。要は自分がしたいトレーニングを教え子にもやらせて、出来るようにする、といったゆとり教育はどこに行っただと思うほどに自己中心的な指導だ。そしてどうやら彼女も鈴谷の態度が気に召さないようだ。

「基本的なことはあなたに任せるわ。重巡洋艦としての教育は妙高、お願いできるかしら？」

「わかりました……鈴谷さん、御愁傷様」

それまで鈴谷を非難の目で見ていた全員が気の毒そうな目をしていた。鈴谷は何が起きているのかわかっていない様子だった。そんな鈴谷の肩に神通の手がおかれた。もう彼女は逃げられない。

「じゃあ鈴谷さん。明日の明朝六時に訓練場でお待ちしております」

神通はそれだけ言い残し、軽い足取りで外に出た。それを目で追っていた私に長門は小声で話しかけてきた。

「叢雲さん……鈴谷もまだ来て日が浅い。さっき私がきっちり叱っておいたからこれで許して貰えませんか？」

普段は私に敬語を使わない長門が丁寧に鈴谷を擁護したが、私は首を横に降った。

「もし、鈴谷が泣きをいれたらそこでやめにするわ。けど、彼女が嫌だと言うまで私は何もしないわ」

長門にそう言い、私は摩耶に目で合図を送った。急に白羽の矢がだった摩耶は凄く嫌そうな顔をしたが、私の後に着いてきた。



「それで、自分に何をしろと言うのですかか？」

私が灰皿の置かれたベンチに腰かけると、摩耶は立ったまま私に尋ねた。彼女はここに来て二年目、鈴谷の一個上になる。

「そんなに肩肘張らないで。煙草でも吸ったらどう？」

私は摩耶に灰皿に近い方に座るように促した。摩耶は頭を掻くため息をつき、諦めたように座るとポケットから煙草を取り出した。私もポケットから電子煙草を取り出す。

「よくそれで禁煙したって言いますよね」

「火のない所に煙はたたない。だからこれは煙じゃない。故に私は禁煙したのよ」

「よくそれで満足できますよね。それで、用件は？」

偶然、摩耶と蒸気を吐き出すタイミングが被った。

「鈴谷のこと、どう思っている？」

私がそう言うと、摩耶はやっぱりという顔をして煙草の煙をゆつくりと吸い込んだ。長く、細く煙を吐き出すと、摩耶は話し始めた。

「鈴谷が艀装を持ち出して自主練していたのは知っています。それが許されることだとは……」

「あなた個人としてどう思っているかを聞いているの」

摩耶は暫く私を見ると、全てを諦めたようだ。

「今の実力とあの話し方は苦手、というより嫌いですね。けれど、人知れずに努力する性格は好きです」

「あなたならそう言うと思っていたわ」

「なんですか？自分の口も悪いから同属として見てるんですか？そうだとしたら心外なんですけど」

吸い込んだ蒸気を吐き出しながら、私は首を横に振った。

「あなたとあの子が全然違うことぐらいわかってるわよ。けど一年目で神通の訓練を受けることになったという点は同じ。あの子の面倒見てあげて」

「叢雲さんの方が仲良さそうじゃないですか。自分の時みたいに叢雲さんが見た方がいいんじゃないですか？」

「人に教えることは教わるよりも得られるものが大きいわ。自分の成

長の為だと思っただけやってみなさい。非行少女の面倒がどれだけ大変か、あなたも知りなさい」

「自分と鈴谷じや別の種類の非行少女ですけどね。まあ、叢雲さんが言うならやるだけやりますけど」

摩耶はそう言うのと短くなつた煙草を灰皿に放り込んだ。中に入っている水がジュツという音をたてた。

「よろしく頼んだわよ」

「わかりましたよ。それじゃあ自分はこれで」

摩耶はそう言い残し、その場を後にした。私は蒸気をゆつくり吐きながら空を見上げた。春らしい蒼天がひろがっている。

「これから暑くなりそうね……」

### 第3話

神通、妙高による鈴谷の特訓（しごき）が始まってから一ヶ月が経とうとしている。同室にした摩耶から聞いた話では、毎朝寝癖のまま部屋を出て、夜にはボロボロになって帰ってくるようだ。もうそろそろ音をあげる頃合いだろうと思っていたが、案の定だった。

「叢雲、これ」

訓練明けのボロボロの鈴谷が執務室に持ってきたのは外出申請書。

「何処に行くのかしら？」

書類を受け取り、よく目を走らせる。これが他の子ならここまで注意深く見ない。

「まだ決めてない」

鈴谷は私から目を逸らした。ちなみに摩耶は二週間で外出先届けを出し脱走を企てた。が、その目論みを神通は見破っており、仲良く二人で出掛けていった。

「ふうくん……まあ、いいわ」

どうせまた神通にバレるだろう。私はそう思い、承認の判を捺した。

「じゃあ、その日空けといてね」

「はあ？」

私は目の前で満面の笑みを浮かべる鈴谷を見た。

「だって私足無いもん。摩耶が叢雲は外車乗り回してるって言ったよ」

「それなら摩耶に言いなさいよ。あの子だって足あるじゃない」

「摩耶のはやだ。叢雲の無茶振りに一ヶ月近く耐えたんだから可愛い後輩を労ってあげてもいいじゃん！」

「上官の命令を無茶振りって……あなたねえ……」

私は呆れて言葉が出なかった。鈴谷は言うだけ言って満足したのか、そのまま出て行った。しばらくして、神通が執務室に入ってきた。「鈴谷さんですか。じゃあ私もお願いしてもいいですか？」

神通は私の机の上に置かれた申請書を眺めると、持っていた書類に

日付を書き足した。そう言えば、神通との付き合いは長いが、プライベートの付き合いはしたことがない。

「そうね……たまには羽を伸ばしましょうか」

神通の書類を受け取り判を捺す。神通は私は不思議そうな顔をしていたが、私は話を続けた。

「あなた、車持ってたわよね？」

「はい。叢雲さんの二台隣に停めてますけど？」

「そう、わかったわ」

神通はよく理解をしていないようだったが、それ以上は何も言わず部屋を出ていった。

――

外出の日がやって来た。いつぶりかわからない自分の私服姿に違和感しか感じない。鈴谷との待ち合わせ時間にはまだ余裕がある。一服しようと喫煙所に向かうと、先客がいた。

「おはようございます、叢雲さん」

摩耶が眠たそうに煙草を吹かしていた。

「あなた……こんな時間に寝間着なんて着てて間に合うの？」

「……………これ、外行き用の服なんすけど……………」

上下ジャージの摩耶が困っている顔で私を見た。

「あら？あなたも外出だったの？」

「じんつーさんが、鈴谷と出掛けるから付いてこいって」

摩耶は大きな欠伸をすると、鳴らした。摩耶本人は今日の外出は不本意らしい。とても気だるそうだ。

「叢雲さんこそ、どうしたんすか？そんなめかし込んで」

カッターシャツにチノパンという格好でめかし込んでいると言われると何となく申し訳ない。

「そこまで気合いは入ってないわ。そんな事より、あなたその格好で神通に会ったら何言われるかわからないわよ。神通には適当に誤魔化してあげるから着替えてきなさい」

「ええ……わかりました、行ってきます」

「着替え終わったら駐車場に來なさいよー!」

足早に寮へと戻っていく摩耶に聞こえる様に言うと、摩耶は手を振って答えた。仕方ない。先に神通に会いに行くか。私はゆっくり蒸気を吐き出し、駐車場の方へと向かった。

――

表玄関に着くと、Tシャツにカーゴパンツというラフな格好をした神通が立っていた。顔も整っていつて体も締まっているのだから、もっと可愛らしい洋服を着ればいいのと思う。

「随分と早いわね?」

私が後ろから声をかけると神通は驚いた様子で振り返った。

「叢雲さん?! どうしてここに?」

「神通に二つほど伝えないといけないことがあってね。一つは摩耶なんだけど、私が摩耶の服に珈琲かけちゃって着替えるから遅れるってこと。もう一つは鈴谷とは駐車場で待ち合わせよ」

「あら、そうだったんですか。わかりました。わざわざありがとうございます」

「どういたしました。じゃあ行きましょうか」

「はい………はい?」

未だによくわかっていない神通と共に私達は駐車場へと向かった。

――

「待たせたわね」

私達が駐車場に到着すると、鈴谷と摩耶は既に來ていた。鈴谷は今の時の若い子らしい格好をしている。摩耶はきつとあるものを着てきたのだろう。ジーンズにTシャツ、その上にライダーズを羽織っている。

「そんな待つてないから大丈夫……………です」

私の後ろにいたいた神通を見るなり、鈴谷の顔が青ざめた。

「神通さんもお休みなんですね……………」

「ええ、御一緒させて貰うわ」

神通の一言に、鈴谷は言葉を失った。摩耶は神通に対して普通に話していたが、鈴谷の方は駄目なようだ。

「じゃあ行きましょうか……………神通、車頼むわね」

「叢雲さんも御一緒するんですか?!」

どうやらやつと事態を飲み込んだようだ。私は頷くと、神通はどうしたものかと悩みはじめた。

「なに？私がいたら不都合なの？」

後輩に露骨に邪険にされると傷付く。正直泣きそうだ。

「いえ……………そうじゃないんです。その、実は車検に出してまして……………代車を頼んでないんです」

神通はそう言い、何もない駐車スペースを指差した。

「そんな……………」

私も言葉を失った。

「後輩を便りにするからいけないんだよ……………ですよ」

鈴谷、無理に敬語を使わなくていいわ。こうなったら仕方ない。

「狭いけど我慢しなさいよ」

万が一の時の為に車の鍵をもっていて良かった。私はアバルトの鍵を開けた。

「差し支えなければ、私が運転します」

神通なりの配慮だろう。私は首を横に振った。

「いいわ。気にしないで」

私はそう言い、扉を開けると助手席を前に倒して鈴谷と摩耶に後ろに乗るように促した。

「これ、叢雲さんのだったんすか……………これ四人乗れたんですね」

摩耶が乗り込み、鈴谷が乗ろうとすると、神通が鈴谷の肩に手を置いた。

「あなたが前に乗りなさい。本来なら叢雲さんと二人だったんだか

ら」

「でも……」

「いいの？狭いわよ？」

でもの後に言葉が続きそうにない鈴谷に代わりに訊ねると神通は頷いた。

「ええ、私と摩耶は監視ですから」

「そんな他人行儀な……」

神通はするりと後ろに乗り込むと助手席を元の位置に戻した。

「じゃあ……お邪魔しまーす」

鈴谷は嬉しそうに助手席に座る。私も運転席に乗り込むと、エンジンをかけた。1・4Lターボの心臓が動き出す。

「単車みてえ……」

「あなたのバイクよりちよつと排気量が多いだけよ」

クラッチを踏み、ギアをいれる。

「すごいー！かっこいいー！」

隣にいる鈴谷が子供の様にはしゃぐ。

「お願いだからシートベルトはして頂戴」

私はクラッチを繋ぎ、アクセルを踏み込んだ。

――

鈴谷が行きたいと言った北関東の厄除け大師に行くことが決まり、鈴谷が寄りたいたと言ったコンビニに寄り、私達はやっと北関東を走る三本のうち真ん中の高速道路までたどり着いた。コンビニぐらい寄ればいいじゃないか。そう言う人もいるだろうが、お菓子をかうために青いコンビニ、緑のコンビニ、茶色いコンビニと全部寄ることになった。それも、わざわざ探してだ。

「でも、美味しいでしょ？……美味しいですよね？」

摩耶はよく喋るが、神通は監視役に徹底している。先程から必要最低限しか話さない。私はバックミラーを見やると神通と目があつた。何か言いたそうな顔をしている。

「後で文句ならいくらでも言っていていいから、今は楽しみなさい」

私がそう言うと、神通は渋々頷いた。鈴谷が買ったお菓子を一口食べ、ようやく話始めた。

「私的にはサラダの方が好きなのだけど」

「何言ってるんすか、チーズが最強ですよ」

「鈴谷はこれが一番ですし！……叢雲……さんはどれが一番ですか？」

「今は叢雲でいいし、敬語も使わなくていいわ。明太チーズバターが一番よ」

「それは無しで」

若手二人が否定する。神通も不満そうな顔をしている。

「それなら、私、北海道のやつが一番好きだわ」

「それも反則じゃないですか」

「叢雲って限定って言葉に弱そうだよね」

「この車も限定だから選んだんですか？」

あら、神通。よく知ってるわね。でもその言い方には刺があるわね。

「……………否定はしないわ」

「やつぱり……………」

「そんな珍しい車なんすか？」

「イタ車の英車なんてなかなかお目にかかることが出来ませんから」

「痛車？」

鈴谷のイントネーションのニュアンスが違ったように思えたけど、まあ気にしないでおきましょう。

「でも、叢雲がこんな小さい車乗ってるのは意外だね」

「どういう意味？」

「ドイツの高そうな大きい車に乗ってるのかと思ってた」

「そんな車を国からお給料貰ってる私達が乗っていたら国民から大顰蹙を買うわよ」

神通の言う通りである。私のこの車はOLの時に自分へのご褒美で買ってそのまま持ってきたものだが、それでも問題になったぐらい



だ。

「まあ、そうね……私も懂れるわ。けど、そういう車は女は助手席、男は後部座席って言われてるからね」

「流石は叢雲さん。出来る女は言うことが違いますわ」

摩耶が茶化す。それに便乗した鈴谷が調子にのる。

「なに？そんな男の人とお付き合ってたの？ナニしたの？」

鈴谷、それは言い過ぎ。あなたからは見えないけど神通が恐い顔して、隣の摩耶が青ざめてるわよ。

「もしそうだったら、こんな車買ってないわよ」

「そういうものなんだ」

「そういうもんよ」

会話を強引に終わらせる。神通の機嫌がよろしくない。

「ええと……そういえば、那珂ちゃんて神通さんの妹的な存在ですよね？」

神通の表情が一転、真顔になる。かくいう私も、背筋に冷たいものを感じている。

「ええ、そうだけど？那珂ちゃんが何かしましたか？」

「いえ、普段どういう会話してるのかと思って……二人とも全然性格が違うじゃないですか」

「普通に会話してますよ。普通にね……」

神通が景色を眺める。私もあまりこの会話には参加したくない。

「那珂ちゃんてあのお団子ヘアーの明るい人？」

鈴谷が私に問いかける。

「ええ、そうよ。神通の制服と同じの着てるわ」

バックミラー越しに神通を見やると、彼女はこちらをチラツと見ると直ぐに窓の外に目をやった。

「自称、艦隊のアイドルなんだよ。時々テンションが高くてうざった………ついていけない時があつて……」

「滅多な事を言うんじゃない（のよ）」

私と神通がハモる。私達の様子に二人に気まずい雰囲気の流れた。私はため息をつく、仕方なく話始めた。

「那珂ちゃんは……私が艦娘になる前から艦娘をやっていたの。神通が強くなったのも、那珂ちゃんのおかげよ」

「そ、そういう言い方はよしてください！那珂ちゃんに怒られますー！」  
神通が慌てて反論する。私達より上の存在だとわかった鈴谷は何かに気がついた様だ。

「えっ……じゃあ叢雲より歳上……それで艦隊のアイドル？」

「鈴谷さん。それ、絶対に那珂ちゃんの前で言わないでくださいね？  
那珂さんは那珂ちゃんであって、あれでもすごい人なんです」

神通、その言い方も大概よ。

「そうだったんすか……高雄は自分より歳上なんで、姉妹艦というのは年齢順なのかと思っていたら、姉が年下の場合もあるんですね」

「別に珍しくはないわ。私も吹雪型の中では一番上だし、川内型なんて下からだし」

「本当に大変なんですよ……」

神通は盛大なため息をついた。

「ほら、そろそろ高速降りるわよ」

楽しい会話だったかどうかはわからない。けれど単調な景色の高速を飽きることなく運転できた。

## 第4話

高速を降りると、ラジオから正午の時報が流れた。

「お昼どうしましうか」

高速を降り、大きな交差点の信号待ちに引っ掛かっている間にナビで近くの飲食店を探す。

「私、ラーメン食べたい！」

「確かにこの辺りは有名といえば有名ですね」

神通が言う通り、この辺りはラーメンが有名で、ご当地キャラがラーメンのお椀をかぶっているぐらいだ。

「コンビニが近くにあるところだと嬉しいんですけど」

それまで大人しく座っていた摩耶が身を乗り出してきた。

「またコンビニ？」

「飲みたいものがあるんすよ」

「牛乳ですね」

神通、やけに詳しいわね。

「今更牛乳飲んだって大きくなるのはお腹回りだけじゃない？」

「鈴谷！てめえ！」

「お願いだから暴れないでね？」

私がそう言うのと不満げな顔をしながら摩耶は引っ込んだ。替わりに神通が身を乗り出してきた。

「そうしたら、ここから大師に行く途中の交差点を曲がったところにあります」

「案内お願いできるかしら？それにしてもやけに詳しいじゃない」

「新人の時に那珂ちゃんに何度も連れて来てもらいましたから」

「なるほど……あの人らしいわ」

那珂ちゃんは妙なところで真面目な人だ。きつと自分の由来となった場所に行かなくちゃ気が済まなかったのだろう。

「そのうちご当地アイドルとかやりそうね」

「艦隊のアイドルとどつちがメジャーなんででしょうか……」

「今度本人に聞いてみてよ」

「お断りします」

――

好きな人には申し訳ないのだけど、普通のラーメンだった。バクバクお菓子を食べていた鈴谷と摩耶は美味しい美味しいと食べていたが、何度も食べた神通も初めて食べた私も同じ普通という感想以外出てこなかった。そして摩耶の探し物はコンビニには無く、帰りに高速入口近くの大型スーパーに寄ることにした。私はその先のアウトレットモールにも寄りたかったが、三人ともあまり興味が無さそうだったので何も言わなかった。

「ハイハイ」

運良く厄除大師のすぐ近くの駐車場に車を止め、境内に入った鈴谷が漏らした素直な感想だ。

「テレビで見るより小さいわね」

私もそれに続く。平日ということもあって、人も疎らだ。それが更に物足りなさを感じさせる。

「年末年始はここに長蛇の列が出来るんですよ」

神通が指で手前の駐車場をなぞり、その指は外の道路まで伸びていった。

「へえ………それで、普通の神社と何が違うんですか？」

「神社は神さま。大師はお坊さんよ」

「叢雲詳しいね。年の功？」

「鈴谷さん。明日からのメニュー、覚悟しておいてくださいね？」

私の言いたいことを神通が静かな笑みを浮かべながら言ってくれた。

「厄除けの意味無いじゃん！」

「厄除けじゃ業は祓えないわよ」

「それにまだ何もしてねえし」

「お祀りしにいきましょう」

先に歩きだした神通に私は続き、その後ろに二人がついてくる。お祀りを済ませると、神通の眉間にシワがよった。

「どうしたのよ？」

「いえ……川内姉さんが今年厄年で……」

「歳下なのに姉さん」

摩耶が思ったことを口にする。私もそれは思った。

「ええ、きつと歳上の妹がこれを知ったら三人でまたここに来ることになるな……と思ひまして」

「厄だけじゃなくて、魔除けもすればいいのに……」

「ただの神通になれってことですか、鈴谷さん？今でも充分優しいと思いますけど？」

鈴谷、あなたはいい加減学びなさい。

「さて……お祀りも済んだし、帰りましょうか」

私もそろそろニコチンが切れる。摩耶なんて途中の喫煙所をお預けをされた犬みたいに眺めていた。

「みんな先に行つてていいよ。私、お手洗い行つてくる」

「私も行つてきます。お二人は……」

摩耶を見ると、目を輝かせて私を見ていた。

「お土産屋さんの前にいるわ。摩耶行きましょう」

「はいー」

摩耶はこういう時だけ返事がいい。

――

合流した私達は、摩耶のお目当てである牛乳を買いに大型スーパーまで来ていた。摩耶はかご一杯に牛乳をいれる。

「そんな買ってどうするのよ……どんだけ好きなの」

「前に高雄に買ってきて貰ったんだけど、すごく美味しかったんですよ。それでみんなにも買って行ってやろうと思って」

「そんなに美味しいの？」

小さい紙パックの方を手を取ってみる。

「大きい方がいいんじゃない？」

「どこを見ているの？顔を見て言いなさいよ」

「……………そういう意味じゃないし！大きい方がお得ってことだし！」

鈴谷が慌てて弁明する。どうやら私の被害妄想だったようだ。

「それは果汁が入っているわけじゃないので、単体ずつで食べて飲んだ方がカルシウムの吸収効率はいいですよ？」

あら、神通。その豆知識はいま披露する必要があったかしら？

「とりあえず買ってきますわ」

かご一杯に牛乳とそれのクッキーを積めた摩耶は逃げるようにレジに行く。まあ、特にどうしようとは思ってないけど。

――

摩耶の買い物物を済ませた私達は、向かいにある喫茶店でひと休みすることにした。

「まだ時間はあるわね」

壁にかけてある時計を眺めながら私がそう呟くと、三人は驚いた様な顔をしていた。

「どうしたのよ？」

「いえ、ここで少しゆっくりして帰れば時間的にちょうどいいと思っていたので……………」

神通がそう答えると、他の二人も頷いた。そうか。話すのをすっかり忘れていた。私と鈴谷、そして神通の外出届をだした時、司令官が私と神通の外出届を珍しいが、日付が変わる前に帰ってくればいいと言われたのを伝えるのを忘れていた。

「……………あっ?！」

私は慌てて携帯を取りだし、外に出た。摩耶の分は私が関与してない。執務室の電話にかけると、秘書艦代理の電が出た。

『叢雲さん。お疲れさまなのです。摩耶さんのことですよね?』

「ええ。そうなの。いま司令はいるかしら?」

『席を外しているのですが、司令官から聞いているのです。摩耶さんも一緒に帰ってくればいいから楽しんでこい、と伝えてくれと言われているのです』

「そう……助かったわ。ありがとうね」

『お土産期待しているのです!』

電話を切る。とりあえずひと安心だ。一人だけ罰を受けるのは申し訳ない。席に戻り、事の経緯を説明すると、三人はソワソワしだした。

「じゃ……じゃあ!せっかくだし!アウトレットでも見に……」

鈴谷は最後まで言い切れなかった。私は先程の車内の会話を思い出した。

『国からお給料貰ってる私達が』

神通もそれを言ってしまった手前、行きたいとは言いにくいのだろう。

「私は行きたいのだけど……電にお土産屋期待してるって言われてしまったし」

「それじゃあ仕方ないですね。チョコレートでも買っていきましようか」

神通が我先にと立った。正直、神通がここまで行きたがるとは思っていないかった。

「行こう!早く行こう!」

鈴谷も席を立つ。摩耶もそれに続く。

「仕方ないわね……」

カップに残った珈琲を飲み干し、全員足早に車に戻った。

—————

散財した。神通と摩耶はそう言うが、彼女達が買ったのは軍用規格

と同じサングラス。私と鈴谷は好きなブロードのお店にあちこち入り、色々見て回っていた。私と鈴谷の買い物の間、神通と摩耶は洋服を珍しい物を見るような目で見ていた。

「神通さんも摩耶も、少しオシャレしてみたら？」

きっかけは鈴谷のその一言だった。鈴谷の「あともう一押しで買いそう!」という思わせ振りの態度のせいで、店員さんがその気になり、二人は鈴谷と店員さんの着せ替え人形になった。しかし、二人のセンスは若すぎて少し派手すぎる。途中から私が神通の服を選びはじめってしまった。

「やっぱり、あなた、おしとやかな洋服が似合うわね……」

「あの……もう恥ずかしいのですが……」

気がつけば、店内にいたアベックや女子学生が試着している神通と摩耶を見て感嘆の声をあげている。

「出ましようか……」

このまま続けなければきっと買わなくちやいけなくなるが今なら引き下される。鈴谷の自信に満ちた顔きを見せた。こういう時は若い力に任せるしかない。二人が着替えている間に、目星をつけていた髪止めを八つ買った。

「そんなに使うの？」

店を出て、着せ替え人形から解放された二人を休ませるためにフードコートに入ると、鈴谷は不思議そうに私に訊ねてきた。

「自分の分とあなた達の分、それと第六駆逐隊の分よ」

私は自分のを取ると、鈴谷に袋を渡した。

「えっ? いいの?」

鈴谷がすつとんきような声をあげる。

「一人ひとつよ」

「「ありがとう! (ぎ)ごいます(」」」

流星に疲れている様子の二人には申し訳なかった。鈴谷は髪止めをハンカチに包んで鞆のいれると、中から小さな紙袋を二つ取り出した。

「じゃあ、これ。神通さんからみんなにとって」



私と摩耶に一つずつ手渡される。中を見ると、先程の大師の厄除けのお守りだ。

「選んだのは鈴谷さんですから」

「買ってくれたのは神通さんだよ」

「どうやら、いつの間にか仲良くなっていたようだ。」

「なんだよく。このタイミングかよく」

摩耶が悔しそうに項垂れる。

「そんな悔しがるほどのことじゃないでしょう……」

「いや、なんか悔しい……煙草吸いたい」

「そうね。渋滞もあるでしょうから帰りましようか」

――

忘れかけていた高いチョコレートを買ひ、摩耶はそれを発泡スチロールの箱に入れると、ついでにピンク色の小さな紙パックを取り出した。

「偶然四つしか残ってなかったから買った」といいた

「それで悔しがってたのね……」

「偶然度でいったら私が一番じゃないですか？」

「ここで飲んでいつちやう？」

「というよりここで飲んでくれ。流石に別のやつ交じっていると喧嘩になりかねないから」

「そんな子供はいないとおもいますけど？」

しばし外で談笑し、助手席を前に倒すと、摩耶に続き、鈴谷が後ろに座った。

「ほら、助手席で寝るわけにはいかないでしょ？」

鈴谷は神通に何かしらのアイコンタクトを送ると、助手席をもとの位置に戻した。仕方なく神通は横に座り、私は運転席に座った。

――

鈴谷と摩耶は高速に乗る前に寝た。二人とも健やかな寝息をたてている。

「摩耶はともかく……鈴谷は元気だったでしょうに……」

バックミラーで二人を見やると、神通はうしろを覗きこんだ。

「きつと私がいたから気を使っていたんでしよう。少し打ち解けられてよかったです」

「そんなにギクシヤクしてたの？」

私がそう訊ねると、神通は苦笑いをもらした。

「鈴谷さんと訓練するようになって、根は真面目なのはわかりました。けれど、他人と距離を置くような……あの話し方も深く関わりと持とうとはしたくない故のものかもしれません」

神通の推測は半分正解で半分間違っていると思う。半分正解、これは鈴谷の艦娘になる前の話で、今の鈴谷はみんなと仲良くしたい。けれどその方法がわからないだろう。

「私のせいでもあると思います。私が厳しい鍛練を鈴谷にさせているせいで、周りから同情の目で見られてしまう。それで仲良く出来ればいいんですけど、距離を置く子もいるでしょう。それに叢雲さんを怒らせたって本人はすごく悩んでいたそうです」

「そういうことか……」

私は全てが繋がった様な気がした。鈴谷が申請してきた日の無茶ぶりも、今日の私に対する軽口も、全て私の反応を探っていたのだろう。

「摩耶がいて逆によかったということね」

「そうなるでしょうか……それに私個人としても叢雲さんには感謝しています」

「私、なにかしたかしら？」

神通は意地の悪い笑みを浮かべた。

「私にも休みを頂いて……それにこんな私にも目をかけて頂いて……」

神通は人をよく見てる。気恥ずかしくて言われたくないことまでお見通しの様だ。

「そこまで解っているのなら、後輩への指導も程々にしなさいよ」

「それとこれとは別問題です。それに自分の為でもありますから」

「随分とエゴイストね」

「何とでも」

神通はそう言うのと欠伸を噛み殺した。

「寝ててもいいわよ」

「そうですね。気がついたら寝てるかもしれませんが」

結局、鎮守府まで後ろの二人は起きず、神通はずっと起きていた。

## 第5話

『かくすれば、かくなるものと、知りながら、やむにやまれぬ、大和魂』  
やっつてはいけないとはわかっていてもやるしかない。そんな意味だった気がする。

「夜戦だねえー!」

旗艦の川内がニタニタと笑いながら私達を見ている。那珂ちゃんさんも笑ってはいるが目が笑っていない。今すぐにも逃げ出したい。一発の砲撃も当てられなかった吹雪なんて今にも泣きそうだ。こうなったのも全て司令官が悪い。この発端は朝まで遡る。

――

「川内を旗艦とし、那珂、叢雲、吹雪、綾波、敷波で迎撃に向かってもらう」

「川内はまだしも……那珂さんまで……?」

「なんだ? 不満か?」

不満しかない。仮にも私、秘書艦なんですけど。なんてそんな理由ではない。川内と那珂さんを組ませることが不満、というより不安なのだ。

「私、なにか悪いことしたかしら?」

「なんのことだ?」

司令官はよくわからないという顔をしている。これは仕方ない。鎮守府内で接する川内はいつも眠たそうだし、那珂さんは那珂ちゃんだから。

「なんでもないわ……用意してくる」

私は重い足取りで執務室を後にした。川内型の礎を那珂さんが築いたと言っても過言じゃない。那珂さんの厳しさは神通、川内にそれぞれ別の方向で受け継がれている。神通が訓練馬鹿だと言うのなら、川内は実戦馬鹿、そして夜戦馬鹿と言える。だが、これは単純な理由で夜戦が好きなのじゃない。

「きつとみんな嫌な顔するんでしょうね……」

――  
執務室に全員が召集された。川内はあい変わらず眠そうだし、那珂さんはあい変わらずテンションが高い。他の三人は露骨に残念そうな顔をしている。

(どうしてこの組合せなの?)

吹雪型一番艦、そしてこの鎮守府内でいい子一番艦の呼び声もあがる吹雪が訴える様な目で私を見ている。思わず目をそらすと、今度は敷波と目が合う。

(川内さんはわかるけど、どうして那珂さんまで……)

(私が言い出したわけじゃないもの)

そういう意味を込めて首を横に降る。

「叢雲ちゃん。どうしたの?何か不安なことがあるなら那珂ちゃんに話してごらん?」

「な、なんでもないわよ!」

「そお?ならいいけど……大丈夫、きつとうまくいくって!」

私は知っている。あまり関わりのない子はわからないけど、那珂ちゃんのこの言い方は「頑張ろう!」という意味ではなく、「やれ」という意味である。綾波を見やると、綾波の目に光がない。心中穏やかではありそうだが、それは絶望にも似た諦めの境地だろう。

「では作戦内容を説明する。敵の重巡洋艦を中心とした艦隊を発見したと哨戒部隊より連絡が入った。川内らには、哨戒部隊の援護、及び敵艦隊の殲滅をお願いしたい。現在出撃可能な水雷戦隊が貴艦らしかおらず、急増のチームになるが上手くやってほしい」

「大丈夫!那珂ちゃんに任せて!」

もううざったいなんて感情はわからない。やるしかない。そうか、綾波の気持ちがあった気がするわ。不満なんて持たずに最初から諦めていれば、これ以上落ちることはないじゃない!

「叢雲さんさ、久しぶりに海に出るみたいだけど大丈夫?」

川内が眠たそうな目をしながら私を見ている。正直、昼間の……というより、陸の上での川内はいつも眠たそうで何を考えているのかわからない。

「大丈夫。問題ないわ」

不安はある。けどもうそんな事は言ってられない。重巡洋艦を中心とした艦隊程度であれば、七駆で構成された哨戒部隊で充分追い返せる。だが今日という日がいけなかった。別の鎮守府から海上ルートで新しい子がやってくる。彼女達と鉢合わせるわけにはいかない。

「ならいいけど……叢雲さんも神通と一緒に訓練したらどう？私も付き合おうよ」

「遠慮しておくわ」

即答した。冗談じゃない。神通のトレーニングに参加していたら、私の身体もメンタルも持たない。

「ええ……でもたまには顔だしてよ。神通から聞いたよ。威力では勝っても結果で叢雲さんに勝てないって。その秘訣、教えてよ」

「あれは偶然よ……」

「神通はそうは思っていないみたいだよ？たまには叢雲ちゃんが神通の面倒みてあげてよ」

いらぬ誤解を招くような発言はやめてほしい。見なさい、吹雪の私を見る目を。まるであなた達を見ている時のような目をしてるじゃない。あら？敷波？その「ムラークモ、お前もか?!」みたいなリアクションは何かしら？

「世間話は後にしてくれないか？急いで出撃用意をしてもらいたい。今は時間が惜しい」

「了解。十分で支度して出るよ」

「了解」

「――」

「あら？来たの？」

私達が当海域に着く頃には、曙を旗艦とした哨戒部隊の七駆は既に交戦状態だった。曙と朧は私達と交信するだけの余裕があるが、漣と潮は避けるのに精一杯だ。だけど、曙は運が悪かった。

「交戦中に交信出来るなんて、曙ちゃんすごいね！」

「な、那珂さん！」

曙の焦った声が聞こえる。

「もお！那珂さんじゃなくて、那珂ちゃんだよ！」

「これは夜戦にはなりそうにないねえ……残念」

それはとてもとても楽しそうな川内と那珂ちゃんに恐怖心すら覚える。昔足しげく通ったラーメン屋さんに、人間離れた筋肉の男の人がお父さんと殴り合いながら家族愛を語る漫画が置いてあったけど、彼女達もそうなるのかしら？

「敵艦隊を撃滅するよ」

川内の指示が聞こえる。最初から手加減無し。崩して押し込む。

「あつ、叢雲ちゃん、突っ込む？だったら那珂ちゃんもいくよ！」

「綾波もお供します」

「みんな、聞こえたね？三人の突撃を援護するよ」

「了解！」

川内の号令に対して、数名は緊張感たっぷりの返事をした。実戦経験の少ない、吹雪と敷波、向こうの漣と潮に不安が残る。私や那珂ちゃん、綾波に当てることはないと思うが、進路を砲撃で塞がれるのは困る。

「じゃあ応援、よろしくねー！」

那珂ちゃんが突っ込む。それに私と綾波も続く。こういう時、自分の前を走ってくれる那珂ちゃんは心強い。薙刀型の艦装を両手に持ち、背中の砲を展開する。私が叢雲でよかったと思えるのはこの瞬間である。吹雪と違い、砲を手に持たない叢雲にはこの薙刀がある。艦船では出来ない。この戦闘方法にこそ、艦娘としての最大の武器だろう。と、私は考えているし、那珂ちゃんにもそう教わった。

「いっくよー！」

那珂ちゃんは掛け声と共に私と那珂ちゃんは砲撃を始めた。艦隊のアイドルとは自称だけで、愛されている、というよりは一部から恐れられ、一部からは煙たがれている。だけど、アイドルと言うのは強ち間違いではないかもしれない。敵の砲撃に合わせて弾を避ける動きは、音に合わせてステップを踏んでいる用にも見えるし、何より……

「顔はやめてえ！」

「ちよつ、ちよつと!!」

那珂ちゃんが腕を振るうと同時に、私の目の前に敵の砲弾が飛んでくる。持っていた薙刀でそれを払い落とす。本当に叢雲でよかつたと思う。

「ごめえん！」

「気を付けなさいよ！」

ああやって、敵の砲弾を手で弾くことが出来る。ステップしながら手で払い除けていく様はアイドルっぽく見えないこともない。化け物じみているとしか言いようがない。

「高速で飛んできた弾を切り落とすのも大概だと思いますけど？」

綾波が私の心の中を読んだような事を言う。

「あなたには言われたくないかも……」

「似た者同士、仲良くしましょうよ」

綾波の言う似た者同士とは、こうやって至近距離で戦う事を好むという意味だろうが、那珂ちゃんと私が既に砲撃を始めているのに、綾波はまだ一発の砲弾も魚雷も撃っていない。

「綾波ちゃんと叢雲ちゃんじゃ全然違うよ！それと、もう敵艦隊に突入するよ！」

「は、はい！」

私が薙刀を握り直すのと同じ様に、綾波も持っている砲を握り直す。ここからが綾波の戦いとなる。

「那珂ちゃんがセンターで、二人はバックをお願いね！」

意味合いとしてはうち漏らした敵を頼むと言うことだ。那珂ちゃんを避けた敵が私か綾波の脇をすれ違うことになる。

「私の前を遮る愚か者め……」

街中を歩いて、自分の進路上に立ち塞がれたイラツとするでしょ？だから私は仕方なくこの薙刀を振るうの。まあ、街中じゃやらないけど……

「よおく狙って……」

砲撃が命中するとどうなるか。砲弾が当たって爆発する。イ



メージがしにくければ、よくマンガで車と車がぶつかって爆発する。あんなイメージでいいと思う。けど、綾波のそれは少し違う。命中して爆発するまでの間に、砲弾が敵の体内にめり込んでいく。よく零距离射撃は仰角が零という意味で砲口からの距離じゃないというけど、彼女の場合はそっちが正しい。

「狙う必要ないじゃない……」

「これでもちゃんと狙ってるんです！」

「もお！センターより目立ちっちゃ駄目なんだからね！」

那珂ちゃんが私達を睨む。いけない……最近私も綾波もこの人と出撃してないから口が軽くなっている。その時、私達に向けて走る雷跡を見つけてしまった。

「那珂ちゃん！右舷から雷撃！」

「右舷から?!」

那珂ちゃんは慌てて進路を変え、それを避けた。右舷には敵がない。いるのは曙達の七駆だ。横目でそちらを見ると、潮の顔が青ざめている。

「また私が怒られるのね……理不尽だなあ……」

その横にいる曙が遠い目をしている。曙、聞こえてるわよ。

「那珂ちゃん、絶対路線変更しないって決めてたのに」

雷撃を避けたことで、私達の突入は中途半端な結果に終わった。中途半端というが、結果は悪くない。敵の重巡洋艦、駆逐艦二隻、うち一隻は大破。他は撃沈している。

「那珂ちゃん的にはアンコールは嬉しいんだけど……アンチはちよつとなあ……」

明らかに那珂ちゃんの機嫌が悪い。追撃の為、私達は一度合流することになった。曙達の七駆は残弾数がすくないということと、戦意喪失の為に撤退させられた。

「夜戦だねえ！」

話は冒頭に戻る。川内が夜戦が好きな理由。単純に夜型であることに加え、艦装を背負うと性格が変わる。そして、何より、一度の攻撃で終わらせる事が出来なかった事への苛つきである。川内は一

航戦の青い方より鎧袖一触という言葉を那珂ちゃんに叩き込まれている。

「そうだねえ……危険覚悟で再突入かけようか」

那珂ちゃんが笑いながら答える。川内型の三人に共通しているのがイライラしだすと気分が高揚するのか、笑みを浮かべ始める。那珂ちゃんはいつも笑っているが、こういう時は本当にいい笑顔をすると思う。

「危ないけどやろうか……今度は全員で。近付けば当たるでしょ?」

川内が吹雪と敷波を睨む。睨まれた二人は顔を上げれなくなつた。なんの説明もしないと川内がただの性格が悪いやつに思われるかもしれないから補足しておく。那珂ちゃんの教えは簡単で一撃必殺である。初太刀を外せば、相手に反撃の準備をさせるだけの時間を与えることになる。だから相手より早く一撃を与え無力化してしまおう!という言うのはとても簡単な那珂ちゃんドクトリンである。

そして質が悪いのは、神通も川内も「那珂ちゃんに言われたことはやれて当然」と思い込んでいるところにある。

「ちよつと、そんなに責めないであげて」

「そうだよ。大丈夫。今度こそうまくいくから」

「……グスッ」

「こんなところで泣いちや駄目だよ。ほら、スマイルスマイル!」

那珂ちゃん、今のあなたが言っても煽っている様にしか思えないのだけど……

「ほら、吹雪。今から挽回すればいいじゃない。私が守ってあげるから」

「敷波も。ほら、行きましょう?」

「うん……」

——

それはもう悲惨な夜戦だった。吹雪は泣きながら戦うし、敷波は何も喋らないし、私と綾波は二人のフォローで大変だし、川内と那珂ちゃんはストレスを全部敵に吐き出していた。探照灯つて暗闇の中で敵を探しだす物だと思っていたけど、那珂ちゃんは至近距離で相

手の顔に当てて視界を奪う使い方していた。ああいう使い方もあるのね。

「前に神通さんの夜戦訓練を受けたことがあるんですよ」

鎮守府への帰り道、綾波が話し始めた。

「艦装が用意されていて、何も考えずにそれを装備して神通さんの集合場所に向かったんですよ。もしたら、探照灯も電探も外されていて……真つ暗闇の海の上を燃料が尽きるギリギリまで走らされたんですよ。しかも、途中から潜水艦の夜間雷撃訓練が始まって……常に足の下で潜水艦達が綾波の事を狙って泳いでいたんですよ。訓練なんで撃たれはしなかったですけど……」

「ちよつと、怖い話はやめてくれる？夢に出てきたらどうするのよ」

「あはは、神通ちゃんらしいね！」

小声で話していたはずなのに、那珂ちゃんには聞こえていたようだ。てつきり、帰投するまで気を抜くなど怒られると思ったが那珂ちゃんは気さくに笑っていた。

「それで、その後神通ちゃんにお小言言われたの？」

「いえ……何故か誉められました」

「そりゃ誉められて当然よ。そんな怖い思いしながらやり遂げたんだから」

私がそう言うと、那珂ちゃんが振り返り、私の顔をじつと見た。

「……何よ？」

「じゃあ叢雲ちゃんもやってみようか。ついでに後ろの二人も。潜水艦の夜間雷撃訓練じゃ同じでつまらないから、違うことにするね」

「「えっ？」」

私と吹雪、そして敷波は絶句した。そんな様子を那珂ちゃんは楽しそうに見ていた。

「ついでに七駆も誘おう！特にあの栄養が胸にいった子と……何事も無かったかの様に振る舞ったあのウサギ」

「私ですか?！」

ウサギっ子という懐かしい言葉に反応してしまった。那珂ちゃんはハツとした顔をして慌てて首を振った。

「叢雲ちゃんは今もうウサギじゃないでしょ?」

「そうですか……ならいいんですけど」

まだ那珂ちゃんがアイドルを自称していない、那珂さんだった頃、私は頭のギソウにちなんでウサギと呼ばれていた。その時はこの人に名前をちゃん付けで呼ばれるなんて思いもしなかったし、今みたいにタメ口で喋れるなんて夢にも思わなかった。

「叢雲ちゃん。敬語……」

「あつ……ごめんなさい。じゃない、ごめん」

「吹雪ちゃんも、敷波ちゃんもいつまでも落ち込んでないの!そんなんじゃない、川内ちゃんに訓練お呼ばれしなくなっちゃおうよ!」

二人は露骨に嫌そうな顔をした。川内はこちらを見ず、ただ前を見ている。

「那珂ちゃんは仲間を見捨てるなんて教えないわよ。川内型の訓練が厳しいのも、厳しいこと言うのも、あなた達に生き残って欲しい。そういう考えからよ。だから失敗したら怒るのよ。怒られたくないから失敗したくなくなるでしょ?」

私の言葉に言葉に綾波が続いた。

「そうですね。綾波も神通さんには何度も怒られましたし、その度に走らされたました。でもそのおかげでいまがあります。あの戦い方も神通さんが教えてくれたんです」

「あんな危なっかしい戦い方……」

「危なく無いようにいっぱい訓練させられましたから」

綾波は私の方を見た。私にはその意味がわからなかったが、那珂ちゃんは解ったようだ。

「叢雲ちゃんは違うよ? 叢雲ちゃん、超がたくさん付くほどの負けず嫌いで、那珂ちゃんに演習で勝つ為にあんな戦い方覚えただよ?」

「私が超がたくさん付くほどの負けず嫌いなら、一回それで負けただけで私より近距離戦が上手くなった那珂さんはどうなるんですか……」

「敬語」

昔の事を思い出すとついつい敬語になってしまう。

「那珂ちゃんは艦隊のアイドルなの！みんなに親しみを持って接して欲しいんだから！」

「ほら。那珂。そろそろ鎮守府だよ。あんまりはしゃぐとまた神通に迷惑かけるよ」

川内がようやく口を開いた。その声色には少し照れくさそうな嬉しそうな、そんな感じがした。もうすぐ夜が明ける。

「疲れたわね……」

でもきつとずっと憎まれ役を買っているオレンジの制服を着た三人の方がもつと疲れてるんでしょう。

## 第6話

訓練という名のしごき。昨今、教師による生徒への体罰、上司から部下へのパワハラが問題視されている中で、どうして私達のことを取り上げられないのだろうか。それは死なせないためだ。

「これ、訓練、じゃなくて、本気で、殺りに、きてるとしか、思えないのだけど！」

空から落ちてくる爆弾を避けながら曙が途切れ途切れにぼやく。

「本気でしようね。彼女達も下手な結果は残せないでしようから」

全速力で海面を走り、私に降り注ぐ砲弾を避ける。

「この編成に意味があるとしたら、弱い者いじめですよね……たぶん私の後ろを走る隴の目は死んでいる。」

「多分じゃなくて確実。長門と加賀の攻撃で私達を自分らのキルゾーンに追い込む気だわ。私たち三人を執拗に攻撃するのも、沈めた後で残りを髑り殺すためでしょう」

『怖いこと言わないでよー!』

加賀の艦載機に追いかけて回されている鈴谷から無線が入る。鈴谷、漣、潮とは演習開始早々に分断された。というより、漣が逃げた。それにつられて、残りの二人も逃げた。表情も見えない程遠くにいた川内型三人から禍々しい雰囲気を感じた。

「だったら、艦載機を、落として、さっさと、こっちに、合流しない!」曙が怒鳴る。彼女が怒るのも無理はない。加賀の攻撃は曙に集中している。三人を追いかけ回している艦載機は曙を攻撃している数の半分以下だ。三隻もいて何をやっているのか。

「このままじゃ向こうの思うつぼね」

長門の砲撃がどんどん正確になってきている。それも当然で、私達から向こうに近づいているのだ。

「下がれば艦載機に追いかけて回されて、近づけば砲弾の雨あられもつと近づけば魚雷、更に近づけば那珂さんと神通さんが突っ込んでくる。たぶん駄目ですね」

「冷静な状況解析ありがとう」

朧に礼を言い、私はどうしようか考えていた。が、それも無駄に終わった。遂に曙が被弾した。距離が詰まっている分、加賀が嬉しそうな顔をしているのに気がついた。

「あのクソ空母」

曙がキレた。それは中破判定を貰ったからじゃないのは明らかだ。

「曙！ 落ち着きなさい！」

私がそう叫ぶも遅かった。一人、出せる限りの速度で敵艦隊に突っ込んでいく。攻撃が曙に集中する。私と朧はこの隙について逃げ回っていた三人と合流することができた。

「ボーノの犠牲は無駄にしないよ」

『まだ死んでないわよ。あんた、後で覚えておきなさいよ』

漣の独り言はしつかり曙に聞こえていた。

「あんたたち。これ勝たないとこの後どんな目にあわされても知らないわよ？」

私の一言に三人の顔が蒼ざめる。

「だって！ こんなのにイジメじゃん！ どうして鈴谷まで！」

鈴谷が泣き言を喚く。そんなこと知ったことじゃない。

「そんなこと言ってらんないわよ。今は突っ込んだ曙をなんとかしな」と

「でもどうすんのさ？ 私、あれ避けられる気しないし！」

「じゃあ私が避けさせてあげるわ。これは訓練よ。体で覚えなさい」

私は鈴谷の腕を掴み、そのまま敵艦隊に突っ込んだ。朧たちも私達の後に続く。再び長門の攻撃が私達に向いた。

『クソ空母は私が殺るから、あんた達は長門を……』

「そうも言ってるんじゃないみたい。那珂さんと神通が突っ込んできたわ」

正直、これは予想していなかった。近接戦闘になる前に魚雷と砲撃を浴びせてこちらの戦力を削いでくると考えていた。あの二人が突っ込んでくるんじゃない、向こうも撃てない。

「叢雲、どうするの？」

私に腕を引っ張られている鈴谷が不安そうに言う。

「叢雲さんに二人を任せて、私達は突っ込みます」

私じゃなくて、隴が答える。私は何も言わずに鈴谷から手を離し、こちらに向かってくる二人を見た。薙刀型の艤装を握り直す。

「叢雲?!」

「あんたは避けることに集中しなさい」

何故だかわからないけど、無性に腹がたっていた。さっきまで諦めようとしていたのに。鈴谷の顔をみたら何故か那珂さんにも神通にも腹がたった。

「そうね。これは訓練なんだから。彼女達に何かを教えないといけなはずよね」

「舐められたもんですね。私達二人を相手取ろうなんて」

先行してこちらに突っ込んでくる神通が挑発的な笑みを浮かべていた。

「舐めてなんかいないわよ。ただ、一つだけ教えてあげる。私はあなたよりも一年早く那珂さんの教えを受けているのよ」

神通との距離が縮まる。この時、私は那珂さんが神通の真後ろにいるのを見てしまった。さっきは舐めていない。そう言ったが、神通を相手にしている場合じゃなくなった。すれ違う直前、神通が発砲する。それをいなし、反動を利用して薙刀を後ろの那珂さんに突き刺さうとした。

「よく気がついたねえ! でも神通ちゃんがこの距離で外すと思った?」

薙刀が那珂さんに届く直前、私の体は後ろへと吹き飛ばされた。神通がそのまま私に体当たりをしたのだ。

「このッ!」

「離しませんよ。はなから叢雲さんに勝てるとは思っていませんから」

距離を詰めた那珂さんが拳を握り込んだのが見えた。

「何が艦隊のアイドルよ……」

「顔はやめてあげる!」



何かが折れる音が聞こえた。

## 第7話

私は昔の夢を見ていた。艦娘・叢雲としてここに配属されたばかりの頃の夢だ。その日は那珂さんに私と曙で演習をして何も出来ずに負けた。不甲斐なかつた私達は指導という名のシゴキを受けていた。

「あなた達、よくそれで艦娘になろうと思ったわね」

まだお団子へアーじゃない那珂さんが仁王立ちしている。私と曙はその目前で腕立て伏せをしていた。

「このクソ軽重」

私の右にいる曙がぼやく。私でも聞き取れるか微妙な音量だったが、那珂さんにはしつかり聞こえていた。

「何か言った？」

那珂さんは躊躇なく、曙を踏んだ。足で背中を押すなんて生易しいものじゃない。虫けらを踏み潰すように曙の背中を踏んづけた。

曙が短い悲鳴をあげる。

「誰が休んでいいって言ったの？　続けて」

那珂さんは足を曙の背中からどけなかつた。それどころか、力を加えて押さえ付けているようにも見える。

「ちよつとー　やりすぎじゃないの？」

今の私の意思に反して、若い私は抗議の声をあげた。私は知っている。この後どうなるか。

「最近の若い子は生意気だね」

那珂さんは曙の背中から足をどけた。解放された曙が頭をあげた。安心していたのも束の間、那珂さんがしゃがみ、私達の顔を覗き込む様に見ていた。

「何よー」

興味深そうに私の顔を見る那珂さんに恐怖を覚えた。悪態をついていた曙も黙っている。那珂さんは笑顔になった。その次の瞬間、私の目前にあったのは硬いアスファルトの地面だった。

「ほら、二人とも休んでないで続けて。ご飯、食べられなくなっちゃよ  
よ」

頭の上から那珂さんの楽しそうな声が聞こえる。必死に頭を上げようとしても上がらない。私は揺れ動く視界の中に、曙が頭を押さえ付けられているのを見つけた。きつと私も押さえ付けられているに違いない。

「両腕に両肩、胸筋、腹筋、背筋……全部使っても私の腕一本押し返せないあなた達がどうやってこの先戦っていくの？ どうやって砲を撃つの？ ねえ、教えてよ」

悔しい。私は素直にそう思った。出来ることなら叫びたい。

「このクソがあッ！」

曙は泣きながら叫んだ。腕の筋肉が震えているのがわかる。しかし、曙の頭は少しずつ上へと持ち上がっていく。

(頑張り……！)

声には出さない。けれど曙を応援していた。けど曙の頑張りはすぐに無駄になった。

「生意気」

曙の頭が一瞬で地面に叩きつけられる。那珂さんが曙の方に力を入れた反動だろうか、引つ張られる様に私の頭が上がった。那珂さんはそんな私を見て舌打ちをした。私はこの人を憎いとさえ思い始めていた。

「曙ちゃん。よかったね。頑張りが無駄にならなかったよ」

那珂さんは精一杯の嫌味を言っていた。今の私はこの言葉の意味を知っている。

「あなたが死ねば仲間が助かる。けれど………」

那珂さんが何かを言っている。だが私はこの言葉を聞き取れなかった。なぜなら、私に目掛けてアスファルトの地面がどんどん近づいてくるからだ。

顔を地面に叩きつけられる直前、私は飛び起きた。全身には嫌な汗をかいているし、心臓の鼓動も早い。私は肩で息をしていることに気がついた。こんな経験は久しぶりだ。

私はひとつ、大きな深呼吸をして、あたりを見た。医務室のベッドの上に私はいた。

何があつたのか、全く思い出せない。誰が病衣を着せたのか。胸の包帯は誰が巻いたのか。何故、鈴谷が私のすぐ隣で寝ているのか。それも私の病衣とは違い、私物のものであろう可愛らしい寝間着を着ている。

「憎たらしいわね」

私は嘘を言った。鈴谷の顔を見てホツとした。

(無事でよかった)

軽く鈴谷の頭を撫でてやる。鈴谷は擦ったような反応を示し、寝返りをうった。

きつと演習は負けたのだろう。明日は反省会だ。軽いため息をつき、私は不貞寝した。

――

翌朝、私はいつも通りの時間に起きていた。鈴谷は一向に起きる気配がない。

今の私は病人扱いだろう。朝ご飯も誰かが持って来てくれる。ならばすることは一つ。二度寝しかない。私はまだ熱の抜けない布団を被り、あと一歩で寝れたはずだった。

「まだ起きんか……」

「起きてるわよ」

ノックもせずに入ってきた客人、司令官を睨む。その横にはお団子が三つある那珂さんもいた。昨日見た夢のせいで背筋を正してしまふ。

「ならよかった。お前に伝えることがあってな。その前に……那珂」

司令官に小突かれた那珂さんは私の前まで来ると、深々と頭を下げた。

「ごめんなさい。やりすぎました」

謝られるのは意外だった。

「頭を上げてください。那珂さんは……」

「敬語！　　那珂ちゃん！」

この人は本当に謝る気があるのだろうか。

「……頭を上げて。那珂ちゃんは悪くないから。負けた私が悪いのよ」

軽い言葉使いとは裏腹に、私の姿勢は正しい。正直胸が痛むからやめたいけど、どうしても体がそれを拒否する。

「那珂ちゃんは叢雲ちゃんに負けたもん」

「もおく……朝から騒がしいなあ」

ようやく鈴谷が起きた。眠そうな目を擦りながら、司令官と那珂ちゃんを見ている。司令官も那珂ちゃんも鈴谷に気がつかなかったのか目を丸くしている。

「おはよう、鈴谷。邪魔したかね？」

司令官がニヤつきながら私を見る。何故かわからないけど顔が熱くなった。

「鈴谷ちゃん。まだ痛むんだけど」

那珂ちゃんが三つ目のお団子をさすりながら鈴谷を見ていた。熱くなった顔から血の気が引いていく。

「鈴谷が何かしたの……？」

那珂ちゃんが鈴谷の態度が気に食わないのは知っている。それに加えて、頭に怪我を負わせたとなればただ事じゃすまない。

「叢雲が離脱後、神通に至近距離で二発、那珂には連装砲で頭部を殴打、という報告は受けている」

「本当にびっくりした。殴り飛ばした叢雲ちゃんの後ろから鈴谷ちゃんが出てきて、こう……」

那珂ちゃんはその時の鈴谷の真似をしているのだろう。何かを避けて、何かを殴って、そのまま何かを殴っているようにしか見えなかった。

「神通は至近距離で　　撃たれた」　　のよね？」

私が司令官に訊ねると、彼は帽子を深く被った。

「神通曰く、二回撃たれたそうさ。鈴谷の報告では二門同時斉射したから弾は二つでも、一回しか撃っていないと」

「撃つたら反動で腕が後ろに持っていられるわよね？」

「だから、こう！」

那珂ちゃんが二回目の動きを再現する。下から抉り込むようなボディブローをしているようにしか見えない。

「鈴谷。説明しなさい」

「私、あの時必死だったから何も覚えてないんだよねえ」

鈴谷は照れ臭そうに苦笑いを浮かべていた。

「だからここで撃つたんだって！」

那珂ちゃんが腕を伸ばしきった状態をアピールしている。私はようやく理解した。鈴谷は神通の腹部に連装砲の砲身をえぐるように突き刺した後に撃つたのだ。想像したくない。神通にしばらく会いたくなくなった。

「もういいわ……」

「よくないよ！　んで、こう！」

那珂ちゃんは突き上げた拳が反動で後ろに下がる動作をした。もうここから先はさつき見たからわかる。反動を利用して思いつきり振りかぶって、上から殴った。那珂ちゃんは私が予想していた通りのジェスチャーをした。

「鈴谷。とりあえず謝っておきなさい」

「もう謝ったし。てか私達、今謹慎中だし」

「謹慎中？」

また不可解な単語が出てきた。目眩がしている様な気がする。きつと胸が痛いからだ。そうに違いない。

「キレた曙が加賀に殴る蹴るの暴行。加賀は至近距離での戦闘は苦手だし、演習で殴りに来るとは思っていなかったのだろう。報告の時に加賀は言っていた。あんなの演習じゃなくて、ただの殴り合いだと」

司令官は遠い目をしていた。

「あれにはびっくりしたねえ。曙ちゃんを狙った川内ちゃんが臍ちゃん達に囲まれてポッコボコに撃ち込まれて大破判定だからね。臍

ちやんが、川内だからって調子乗りすぎです。たぶん、とか言ってたもん」

「もう聞きたくないのだけど……」

病人扱いの私が聞く話じゃない。どうやら目眩は本物だったようだ。

「妙高さんと長門さんがいなかったらヤバかったねえ！」

「鈴谷、別に面白くないからね。もういいわ。それで、私に伝えておきたい事っていうのは謹慎のこと？」

「いや、違う。動ける様ならヒトサンマルマルに工廠に来てくれるか？ 叢雲の改装が決まった」

「改二だよ！ 私より先に改二なんて羨ましいよ！」

司令官は少し照れくさそうに、那珂ちゃんは喜んでくれているように見えた。私自身は少し複雑だった。那珂ちゃんに……那珂さんに勝てずに改装を受けることになろうとは。出来ることなら一度でもいいから勝ちたかった。

「そういえば那珂ちゃん。私に負けたって、何に負けたのかしら？」

「後輩指導」

「はい？」

自分でも間抜けな声が出たと思う。那珂ちゃんは笑ってはいるが、どこか寂しそうだった。

「叢雲ちゃんを殴った後、鈴谷ちゃんが泣きながら私達に攻撃してきてね。羨ましいなあって。私が沈んでもあそこまで悲しむ子はいないだろうなあって思っちゃってね」

「ちよつと！ 那珂ちゃん、やめてよ！」

鈴谷が顔を真っ赤にしながら抗議の声をあげた。

「神通や川内がいるじゃない」

「あの子達に泣くことなんて教えてないもん。川内型として、水雷戦隊旗艦の意地があるからね」

珍しく那珂ちゃんが落ち込んでいる様に見えた。勘違いかもしれない。けれど、あの夢を見た意味があるとすれば、そういうことだろう。

「あなたが死ねば仲間は助かる。けれど、仲間の心は死ぬ。誰かが生き残っても意味がない。全員で生きる方法を探すのが旗艦の仕事だ。那珂さん、あの時そう言ったんですよね？」

那珂さんは目を丸くしてた。それから徐々に顔が赤くなっている。あの時に聞き取れた訳でも、那珂さんから直接聞いた訳でもない。その後、那珂さんから指導を受けた私の想像だ。

「よく覚えてたね。けどちよつと違うよ。旗艦じゃなくて、私の仕事、だよ」

「すいません。心得違いをしてみました」

那珂さんの仕事なら、今の私の仕事でもある。

鈴谷が酷い目にあわされている時、無性に腹が立った理由がようやくわかった気がする。きつと那珂さんも同じ気持ちだったのだろう。

「神通が摩耶を可愛がる理由が何となくわかったわ」

「ねえ！ 二人の世界に入らないですよ。改二って何？」

「叢雲ちゃんがますます魅力的になっちゃうってことだよ」

「魅力的？」

鈴谷の目線が私の胸に来ているのがわかる。今は包帯が巻かれているせいよ。

「鈴谷。謹慎ならちようどいいわ。私が見つちりしごいてあげる」

鈴谷は嫌そうな顔をしていた。だけど、心底嫌そうな感じではなかった。

守らなくちやいけない。この子も、那珂さんも、私自身も。



## 第8話

私が艦娘・叢雲として生まれ変わる時、この世のものとは思えない拷問を経験した。

改造手術を施されいる最中、私の体に投与されていた麻酔は意味を成さなかった。

お産の痛みは知らない。昔見た、宇宙人がお腹を食い破って出てくる痛みも知らない。けれどそれはそれ以上だったというのはいはわかる。身体の内側が滅茶苦茶にされる痛み。骨が切れ味の悪いナイフになり内臓、筋肉をズタズタにする。切られるというよりはねじ切られる痛み。修復剤と呼ばれる艦娘用の治療薬が傷ついた内臓を修復するも、またねじ切られる。そんな拷問が長時間続く。

艦娘の多くはこの事を知らない。忘れさせられている。どういう技術かは知らないが忘れている。私は人間としては死に、艦娘として生き返る。そう考えている。だから覚えている私はまだ人間だ。鈴谷も人間だ。そう考えている。

私は今、入渠施設の修復剤で満たされたお風呂に入っている。いや、浮かんでいると言った方が正しいだろう。改装は辛かったが、あの時ほどではない。止まっていた成長が一気に押し寄せた。そんな感じだ。よく成長期の子供は成長痛で節々が痛くなるというが、この歳になってそれを経験するとは思わなかった。

「叢雲〜？ いるの〜？」

間の抜けた声が鈴谷の声が聞こえる。とてもダルい。できる事ならしばらく浮かんでいたい。そんな私の思いは鈴谷には伝わらなかった。歳の割には発育の良い身体が目に入る。

「いるじゃん。いるなら返事してよ」

鈴谷はそのまま浴槽に入ってきた。体ぐらい洗いなさいと言いたいところだが、口を動かす気力もない。

「ほほう……これはこれは」

鈴谷が私の体を弄る。擦りたい。

「大きくなってる！」

鈴谷は興味津々に私の胸を弄る。やめていただきたい。

「……大きくなったというより、太った？」

ゴンツ。私の意思に反して、腕が動いた。強く握りしめた拳は的確に鈴谷の脳天を叩いた。頭を抑える鈴谷を見る。涙目になった鈴谷は私の方を恐る恐るといった様子で見っていた。

「叢雲……？」

私は再び力を抜いて浴槽に浮かんだ。

「叢雲！　　鈴谷だよ？　　覚えてるよね？」

鈴谷が心配そうに私の顔を覗き込む。しばらく私の名前を呼ぶと、今度は肩を掴んで揺らし始めた。顔に修復剤がかかる。時々鼻に水が入って息が苦しくなった。

「ねえ！　　答えてよ！　　叢雲！」

「うるさいわね……この憎たらしいのを忘れるわけないでしょ」

やっと体が言う事を聞いてくれた。私は鈴谷の頭に手を伸ばしたつもりだったが、腕にうまく力が入らなかった。顔より下。憎たらしいほど大きいそれに手がかかる。鈴谷は一瞬驚いたような顔をしたが、泣き出してしまった。そのまま抱き締められる。憎たらしいそれに私の顔がうずまる。

「よかった……よかったあああ！」

泣きじやくる鈴谷の両肩を押し、鈴谷から離れる。何をそこまで心配していたのだろうか。

「改装だって聞いて。工場から叢雲の悲鳴が聞こえて。もしかしてまたあの手術を受けてるんじゃないかって。そしたら私のこと忘れちゃうんじゃないかって」

「騒がしいと思ったら、気がついたんですね」

ドック（浴室）入り口に疲れきった顔をした明石と心配そうな顔をした那珂ちゃんがいた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃないわ。まだ全身が痛い。筋肉痛なんて比じゃないくらい」

「すいません。叢雲さんの様なパターンは始めてでして……」

明石が申し訳なさそうな表情をしている。以前の改装は艤装だけだった。

だが今回、工場に用意された謎の機械に私は入れられた。私の入ったコールドスリープ装置の様それに培養液の様なもの満たされた。溺れるんじゃないかと思つたが急に眠たくなり寝てしまった。その後が大変だった。金縛り状態とでもいうのだろうか、起きてないけど意識がある。それで全身が痛い。さつき鈴谷が悲鳴をあげていたと言っていたが覚えていない。

「無事に終わったらならいいわ。それで、これからどうするの？」

「しばらくは経過を見るように言われています。なのでお休みですね」

「そう……」

「気軽に言っちゃったけど、大変だったね」

那珂さんが私に声をかける。すると、私の体は無意識に姿勢を正した。

「もう！ 叢雲ちゃんは疲れてるんだから楽にしているのに！」

プン。プン。そんな擬音が似合いそうな表情をした那珂ちゃんが私を見る。この人がいるんじゃないや私の気は休まりそうにない。

「でも叢雲ちゃん。すつごく魅力的になったね！」

「ね！ こころもこんなに……」

落ち着いた鈴谷がまた私の胸を掴む。今度は遠慮がない。今の私に抵抗する力は無かった。

「大きいというか……綺麗だね。胸筋？ ハリがあるというか……腹筋とのバランスもいい」

那珂ちゃんが那珂さんになる。私の身体を舐め回すように見ている。

「今回の改装で叢雲さんの筋肉量は大幅に増加しました。以前、那珂さんが筋肉がつかない貧弱な子、と言っていました。今回はこれまでに蓄積されていた……筋肉値とでもいいましようか。それが身体に出たということになります」

「太ったというよりは、ガタイが良くなったってことね。言われてみ

ればさっきのゲンコツも前より痛かった気がする」

鈴谷が頭をさすった。那珂さんは相変わらず私の身体を見ると、納得したようにうなづいた。

「明石さん。叢雲ちゃんの艦装の改装はいつ終わるの？」

「しばらくかかります。特に薙刀型の艦装ですが……これまでのものでは強度不足だと思われるので、新しいものを用意します。時間はかかりますが……」

「叢雲ちゃんの復帰戦には間に合いそうにない？」

「おそろく……」

申し訳なさそうな明石に対して、那珂ちゃんは心なしか嬉しそうな表情をしていた。嫌な予感しかない。

「薙刀がないと叢雲なんもできないじゃん」

鈴谷が失礼なことを言う。別に何も出来なくはない。砲撃も雷撃も出来る。ただこれまでそんなにやらなかっただけだ。

「そうだね。叢雲ちゃん。痛みが取れたら鍛えないといけないね！」

どこかの気合が入った高速戦艦のようなポーズをとった那珂ちゃんがいる。いや、もう那珂さんだろう。

「叢雲はしばらくお休みなんだから鈴谷と遊ぶの！」

鈴谷が私を力強く抱く。那珂さんの険しい視線が鈴谷を射抜く。鈴谷から伝わる心音が大きくなり、テンポが早くなる。引く気は無いが緊張はしているようだ。しばらく睨み合いが続くと、那珂さんが大きなため息をついた。

「裸で抱き合ってる二人には敵わないね……」

那珂さんに言われて気がついた。私はいますごく恥ずかしいことをされている。

「じゃあ、叢雲ちゃん。調子が良くなって満足したら私のところにきてね。今のまま海に出るのも不安だろうから」

那珂さんはそう言ってドックから出ていった。そのあとを明石が追う。鈴谷もホツとしただろう。私を放してくれた。私も緊張していたのか、それとも恥ずかしいからなのかはわからないが、鼓動のリズムが大人しくなる。鈴谷のものだと思っていた心音はもしかし

たら自分のものだったのかもしれない。

「叢雲。それでどこ行く?」

「疲れたわ……あなたが決めておいて」

## 第9話

改二になり、いろいろと成長した私はある問題に直面していた。それは成長期を迎えた子供を持つ親なら誰しもが経験するであろう悩みだ。鏡に映った自分の姿を見る。

「……………なんて破廉恥な」

前ボタンのシャツが部分的に閉められない。開放的なVネックとでも呼べばいいのだろうか。

「嬉しいような……………昔の自分が悲しいような……………」

人並みにはあると信じていたそれが、信仰から現実のものに変わった。そんな実感がある。

制服の方はギソウとあわせ、新調される予定になっている。明石に身体測定をされたときは変わった自分の数値に驚かされた。ただ、増えなくていい数値まで増えていた。良いことばかりではないらしい。

「しかし困ったわね……………」

着る服がない。少し大きめの寝巻きで鎮守府の中をうろつくわけにはいかない。それにせっかく貰った休みを何処にも行かず、何もせずに過ごすのは勿体ない。しかし服がない。

「……………誰かから借りるしか無さそうね」

私は軽く身支度を整え、誰に服を借りるか考えた。

まず鈴谷。あの子は駄目だ。今の私でもサイズ感があわない。自分と同じぐらいの体型を考える。

「……………決めた」

私は時計を見る。ちょうど訓練が終わる時間だ。外に出ても問題なさそうな寝間着を選び私は自室を後にした。

—————

食堂は訓練明けの子や哨戒任務から帰ってきた子達で賑わっていた。その中の訓練から帰ってきたばかりの神通がいた。

「隣、いいかしら?」

「……………」

神通はしばらくポカンとしていた。私はそんな神通を不思議に思い、首を傾げる。

「……………ツ?!どうぞ!!」

「?……………」

神通は慌てて食事の乗ったトレイを自分の方によせる。別に私が座ろうとしていたところまで領地を拡げていたわけではないのに。「噂通り、別人みたいですね……………」

「どんな噂が流れてるのよ……………まあ二度と経験したくないわ」

サンドイツチを頬張りながら答える。神通はカレーを食べていた。

「あなたにお願いがあるのよ」

「私に?　　なんででしょう。訓練のお付き合いですか?」

神通が目を輝かせる。どれだけ訓練が好きなのよ。

「駄目だよ!　　叢雲ちゃん改二の初めては私が貰うんだから!」

あら、那珂ちゃん。いつの間に後ろに立っていたのかしら。気配を消して忍び寄るのやめてほしいのだけど。あと変な言い方はしないでほしいわね。

「違うわよ!　　両方の意味で違うし、私にそんな趣味ないからね!!」

私は大きな声をあげて否定をする。既に一部の子は顔を見合わせヒソヒソ話をしていた。

「あなたに服を借りたいのよ。外に出るのに、着る服がなくてね」

「ネットで買えばいいじゃん」

今度は鈴谷が現れる。隣には摩耶もいた。結局いつものメンバーが集まった。

「私は現物を見て買う主義なのよ。それに、いろいろ見てみたいじゃない」

「そうだよ。着てみたら自分のイメージと違ったなんてよくあることだし」

珍しく那珂ちゃんと意見があう。服の趣味は全然違うけど。

「なんかおばさんくさい……」

「摩耶ちゃんの言う通りだよ。あわないなら小物を使えばいいじゃん」

若人二人が失礼極まりないことを言う。神通の教育はどうなっているのかしら。

「那珂ちゃんがおばさんくさい………？ えっ、どういうこと？」

那珂ちゃんの目つきが変わる。キラキラした目から光が失われた。

「……それは服を買いに行くってことですか？ いつですか？」

私、今月は予定が埋まっているので来月にしましょう」

神通の目も本気になる。いったい何なのよ。

「できればこの休み中に行きたいの。悪いけど服を貸してちょうだい。お土産買ってくるから」

「じゃああたしも行く！」

鈴谷が自分が一番だと言わんばかりに手を上げた。それをみた神通が恨めしそうに鈴谷を睨む。

「ひゃうッ！」

突如胸が揉まれた。何事かと思い振り返る。那珂ちゃんの顔が近い。

「……神通ちゃんのほうが大きいかな。サイズあわないかも。那珂ちゃんのを貸してあげるよ」

私の胸を揉む那珂ちゃんの手を神通が左手で掴む。右手に握られたスプーンは曲がっていた。初めてタネも仕掛けもないスプーン曲げを見れた。

「痛い！　神通ちゃん！　痛いよ！　折れちゃう！　折れちゃうから!!」

「那珂ちゃん、これぐらいしなないとわからないでしょう？　それにその腕が簡単に折れるとも思えないわ」

「痛いことには変わりないから！　離して！」

「じゃあ明日ね！　私休みの申請出してくる！」

鈴谷が逃げるように席を立つ。すると、ダンッ！と大きな音がし



た。神通の右手に持っていたスプーンだった何かが机に突き刺さっている。

「あなたは明日も訓練です。私がいま決めました」

「神通さん。大人気ないぜ……」

摩耶が呆れたような声を漏らす。神通は悔しそうに摩耶を見た。

「じゃあ那珂ちゃんも行ってくるー！」

その一瞬の間隙について那珂ちゃんが逃げ出した。鈴谷と一緒に走り去る。その背中を神通は忌々しそうに見ていた。

「新しいスプーン取ってきてあげるわ……」

「……はい、お願いします」

神通はがつくりと肩を落とした。

――

翌日、那珂ちゃんから自分の趣味じゃないフリフリのついた可愛いらしい洋服を借りた。

「か〜わ〜い〜い〜」

先に駐車場にいた鈴谷が私達を見つめるなり興奮気味に私を舐め回すように見る。那珂ちゃんは自分のコーディネートにご満悦のようだ。

「……恥ずかしいわ。はやく車に乗ってちょうだい」

助手席側の扉をあけて、シートを倒す。前も言ったけど、私の車は後ろが狭い。本来なら那珂ちゃんを乗せるべきだが、鈴谷を先に乗せる。鈴谷もその意図を察したのだろう。乗り込もうとした。

「鈴谷ちゃん。後ろだと狭いでしょ？　　那珂ちゃんの方が小さいから後ろ乗るよ？」

「いいの？」

「大丈夫！　それに他人に助手席に乗って欲しくないでしょ？」

「どういう意味よ……」

那珂ちゃんは素早く後ろに乗り込むと、シートを元の位置に戻した。

「はやく行こう！　　神通ちゃんが怖い……」

那珂ちゃんは鎮守府の窓を指差した。そこには恨めしそうにこちらを見ている神通がいた。

鈴谷は私と出掛けることを楽しみにしていた様だ。行く場所も前々から決めていたらしく、那珂ちゃんが邪魔したんじゃないかと気を使う程だった。

高速で二時間ちよつとの場所にある大型の屋外ショッピングモールに来た。

車内では鈴谷と那珂ちゃんがガールズトークに華をさかせていた。最近のアイドルはどーだのと私にはわからない話だった。「戦時下の平日だっていうのに、すごく賑わってるわね……」

私達は駐車場に入るための渋滞に巻き込まれていた。前の車の中で、きつと楽しそうに話しているであろうアベックを見て溜め息を漏らす。

「あれ？　もしかして前のアベックに嫉妬してるの？」

那珂ちゃんが茶化す様に言う。

「あべつくって何？」

「男と女のつがいよ」

「カップルのこと？　　そういえば昔お母さんがそんな言葉使ってた気がする」

「お母さん……？」

私と那珂ちゃんの声がハモる。そんな古い言葉を使っている自覚はない。

「それで……そのあべつく？　　が羨ましいの？」

「私は今のあなたが羨ましいわ」

「那珂ちゃんも……」

落ち込む私と那珂ちゃんを鈴谷は不思議そうに見ていた。

――

私は自分の好きなブランドのお店を見ていた。鈴谷と那珂ちゃんは近くにある他のブランドを見ている。

「何かお探しでしょうか？」

店員さんが不思議そうに私に声をかけた。それもそうだろう。今の私の格好じやここのお店の雰囲気とは全然あわない。外人しかいないフレンチのレストランに和服で入るようなものだ。

「洋服のサイズが変わってしまつて……」

「サイズがですか？」

店員さんは更に訝しげな顔をした。そりやそうだろう。私ぐらの歳の人が急にサイズが変わるなんてありえない。激太りしたとか激ヤセしたといつても段階がある。今の私は冷やかしの客にしか見えていないだろう。

「これ、試着できるかしら？」

「はい。こちらにどうぞ」

好きなデザインのシャツブラウスとパンツを持って試着室に入る。着替え終わり、鏡の前で自分の姿を確認していると、唐突にカーテンが開けられた。

「終わった?！」

「あなたたち。私がまだ着替えていたらどうするのよ……」

鈴谷と那珂ちゃんいた。二人とも感心するように私を眺めている。

「なんか、やつと年相応つて感じだね」

鈴谷が率直な感想を述べる。私自身もそう思う。

「二ん? やつと?」

やつとの意味がわからない。私は前からこういう格好をしていたはずだ。先ほどの服をかわいいとべた褒めしていたじゃないか。

「うん。やつと洋服に叢雲が追いついたね」

「……あなた、最近の本っ当に遠慮がないわね」

「いや、ちよつと待つて。那珂ちゃん、叢雲ちゃんと同じぐらいなんだけど?」

那珂ちゃんが妙に必死だ。それと、あなたは私よりも上でしように。

「那珂ちゃんは若々しいじゃん?」

自分の失言に気がついたのであろう。焦った鈴谷がフォローする。あまり効果はなさそうだけど。

「若々しい？　そっかあ〜……そっかあ〜！」

効果は抜群だったようだ。那珂ちゃんは心底嬉しそうにしている。

「これ、頂けますか？」

「はい。かしこまりました」

私達のやりとりを不思議そうに見ていた店員さんに声をかける。よくわからなくても売り上げになるなら迷惑じゃないはず。私は強く、とても強くそう思い込んだ。

「……」

買ったものに着替えさせてもらい、私たちは少し休むことにした。

街中どこにでもある喫茶店。

「あたし、ダークモカチップクリームフラペチーノ!!」

鈴谷が呪文を唱えた。店員さんは呪文を理解したのだろう。同じ言葉を繰り返す。

「私はカフェラテ」

「那珂ちゃんもラテで」

私が財布を取り出そうとすると、那珂ちゃんがそれを制した。

「ここは那珂ちゃんが払うよ」

那珂ちゃんがレジの前に立った。

バリバリッ！　マジックテープが剥がれる音がする。私も鈴

谷も思わず見てしまった。

チエーン店とはいえ、それなりにお洒落なところだ。そんな店中でフリフリの可愛い洋服を着た、それなりに可愛い美人がナイロンの財布からお金を出している。

「……あなた、なんて顔してるよ」

空いた口が塞がらない。鈴谷はそんな顔をしていた。

「お待たせ！」

那珂ちゃんがカップの乗ったトレイを机に置く。鈴谷は那珂

ちゃんの財布が入る可愛らしい鞆を見ていた。

「那珂ちゃん……これ飲んだらお財布買いに行こう……」

「えっ？　財布？」

「私もそれに賛成だわ」

「えっ？　どういうこと？」

私達の顔を交互に見やる那珂ちゃんをよそに、私と鈴谷は顔をあわせ頷いた。

## 第10話

持っていた財布にケチをつけられた那珂ちゃんはふて腐れながら私達の後をついて来る。

私の知っているブランドをまわり、あれこれ見てみたけど、那珂ちゃんの食指は動かないようだ。

「那珂ちゃんはこれで満足っていうか？」

「神通や摩耶でさえももう少しまともなの使ってるわよ？」

「服是那珂ちゃんの方がお洒落だもん！」

お洒落なのはわかる。さっき鈴谷が言っていたけど、フリフリのついた洋服を好んで着ているのは、女子らしくない発達した四肢を隠す為らしい。それにあわせて鞆も可愛いものを選んでる。なのに、どうして財布にその拘りが行かなかったのか。疑問である。

「那珂ちゃんはなんでその財布を使ってるの？」

鈴谷が率直に尋ねる。帰ってきた答えは意外なものだった。

「スキー行った時に邪魔にならないからだよ？」

「スキー？」

那珂ちゃんにしては意外な趣味だった。言われてみると、私も民間人だった頃に諸先輩方に誘われた思い出がある。流行っていたよな気もする。私はあまり惹かれなかったけど。

「うん。那珂ちゃん、毎年滑りに行くからね」

「じゃあその時だけ入れ替えて使えばいいじゃない……」

「……川内ちゃんや神通ちゃんと同じこと言ってる」

二人は正しい。鈴谷は当たりをキョロキョロと見渡した。

「次、あそこ行こう！」

鈴谷が指差したのは鈴谷と同じ年ぐらいの子で賑わうお店だった。

――

「いらっしやいませ。何かお探しですか？」

若い店員さんが甲高い声をあげる。鈴谷はそれを無視し、目的の財布や小物が並べてあるところに向かう。那珂ちゃんもその後続いた。私は会釈だけして鈴谷達の後を追う。

「ちよつと。失礼じゃないの?」

小さな声で鈴谷に問いかける。鈴谷はこちらをチラッと見ると小声で答えた。

「あの店員さん。叢雲が入ってきた途端にそれまでの接客をやめてこつち来たから。余計なもの買わされるかもしれないから目をあわせちゃダメだよ」

「那珂ちゃんも思った。あの店員さん、叢雲ちゃんの着てるもの見てすぐに駆け寄ってきたからね」

よく見ている。私は感心した。あまりこういう若いお店には来ない私には知らない世界だ。

珍しく那珂ちゃんが財布を手にとって見ている。歳は近いけど私の趣味とは全然違うようだ。

「可愛すぎないかしら?」

那珂ちゃんの制服の色に似たオレンジの革の財布を熱心に見ている。リボンをかたどったチャームも付いていて、若い子のお財布という印象だ。

「那珂ちゃん。これ気に入ったかも……」

「でしよ〜! 絶対ここだと思っただよ!」

鈴谷が自信満々に言う。どうやら二人の趣味は似ているようだ。

「叢雲の好きなどころもお洒落なんだけど、ちよつと落ち着きすぎてるんだよ」

鈴谷はそう言い、財布の脇にあるラックからチャームを手にとった。

「こんなのはどう?」

那珂ちゃんが着ているようなフリフリを着た小さな人形を添える。

「かわいい! けど、邪魔にならない?」

「最近チャームをつけるのが流行りなんだよ」

私が思い出したのは顔が真っ黒の女子高生が携帯にストラップをジャラジャラと付けていたあれだ。二人はあーでもない、こーでもないと話しはじめた。もうこうなっては私にはついていけない。私はチャームのラックを何となく眺めていた。

「あらっ……これ」

そのうちの一つを手取る。可愛らしくデフォルメされているが、私が乗るフィアットだ。ひっくり返して見るも裏面も同じだ。

「買おうかしら……」

値札を見て驚く。私が想像していた金額の三倍近くする。よこにある財布を手に取り、値札を見てみる。

「ほとんど一緒じゃない……」

「そういう野暮なことは言わないの」

独り言のつもりだったが鈴谷には聞こえていたようだ。那珂ちゃんは既に財布を決め、それに何をつけるかで悩んでいた。私は持っていたチャームをラックに戻し、またぼんやりと店内を眺めていた。

「3点以上買うと40%オフ？」

レジの張り紙が目にとまる。

「じゃあ叢雲ちゃんもさっきの買う？」

那珂ちゃんは財布とチャームを持っていた。結局最初に鈴谷に勧められたものにしたようだった。そんな那珂ちゃんを鈴谷は恨めしそうに見ている。

「別にそこまで欲しいわけじゃないわ。鈴谷、あなたは何かないの？」

「これといって特に……」

この流れは買うことになる。正直、40%オフなら納得出来ない金額ではない。やたら高価なストラップを買ったと思える範囲だ。

「改二祝いに那珂ちゃんが買ってあげてしんぜよう」

那珂ちゃんは私がさつき見ていたチャームの色違いを手を取った。

「だったら白がいいわ！」

「……欲しかったんだ」



自分でも少し恥ずかしいと思った。なんて浅ましい。  
鈴谷は何とも言えない悔しそうな表情をしていた。

「……………」  
那珂ちゃんの財布を買った後、鈴谷が那珂ちゃんを連れて何処かに行ってしまった。

すぐ戻ってくるから適当に時間を潰していて。そう言われても特に見るものもない。私はさつきとは別の喫茶店に入り、窓からぼんやりと道行く人を眺めていた。

「すぐ戻ると行っていた割には随分遅いわね……………」

既に一時間近く経とうとしている。寂しいと感じないわけではない。ただ、焦ったような鈴谷を見て嫌だとは言えなかった。

遠くに見覚えのある緑色の髪のお団子が二つのつた頭が見えた。その二つの頭はとても急いでいる様で窓際に座る私に気付かず目の前を通り過ぎた。

「人混みの中を走るんじゃないわよ……………」

それも女の子の走り方と速さじゃない。流石は艦娘と言ったところだろう。彼女達とすれ違った人々は皆振り返っている。

「暇ねえ……………」

それから少しして、再び二人が目の前を走り去って行った。私はそれを目で追う。焦っている様子だった。何をそんなに走り回る必要があるのだろうか。結局二人は私の目の前を三往復した。鈴谷から連絡が入ったのは最後に通り過ぎてから二十分経ってから。私は二時間近く待っていた。

「……………」  
「何をそんなに走り回っていたのよ……………」

鈴谷に言われた場所に来ると二人はベンチに座っていた。二人とも肩で息をしている。鈴谷はともかくとして、那珂ちゃんがここまで疲れているとは思わなかった。

「アハハ……………見られてたか〜」

鈴谷は苦笑いをした。けどどこか満足そうな顔をしている。

「那珂ちゃんお腹すいた……」

那珂ちゃんの方が大変そうだ。いったい鈴谷は何をしたのかしら。

「ならご飯食べに行きましょう。駐車場出るのに混みそうだから、今出て他のところ行きましょうか」

私がそう言うと、二人は立ち上がった。その目は早く行こうと訴えていた。

――

ショッピングモールを離れ、近くの海鮮で美味しいと評判のお店にきた。買い物帰りの人で混んでいるかと思っただが、店内はすいていた。

「はい、改二おめでどう！」

向かいに座る那珂ちゃんが先ほど買ってくれたチャームを袋から取り出した。私はそれを受け取り、目の前でクルクル回した。可愛い。

「何に付けようかしら……」

普段使うものにつけたら白いからすぐに汚れてしまいそうだからと言って買ってもらったのに使わないのは申し訳ない。

「鍵につけてみたら？」

横に座る鈴谷が私の車の鍵を指差した。

「あなた。時々賢いわね！」

「時々ってなにさ!!」

怒る鈴谷をよそに、私は鍵にチャームをつける。可愛らしい。私は満足していた。

先程まで元気がよかった鈴谷が急に大人しくなる。向かいの那珂ちゃんは財布を入れ替えながらもそれを楽しそうに見ていた。

「あのー。 叢雲ー！」

「どうしたの？」

ぎこちない鈴谷を不思議に思う。鈴谷は鞆の中から綺麗に包装された袋を取り出した。

「これ！ 鈴谷からの改二祝い！」

鈴谷はそれを私に押しつける様に渡した。

「あ、ありがとう……開けてもいいかしら？」

鈴谷は不安そうに頷いた。しかし、鈴谷からお祝いを貰えるとは思っていなかった。

包装を解き、中身を取り出す。先にボンボンのついたピンク色のマフラーだ。

「あらま。随分と可愛らしい……」

「叢雲には可愛すぎるかな？と思っただけ……気に入った……？」

「ええ。大事に使わせて貰うわ。これから寒くなるしね。鈴谷、ありがとう」

私はマフラーを首に巻いてみる。暖かい。

「ほら！ この色にしてよかったでしょ？」

「うん。よく似合ってる」

「もおく大変だったんだよ？ 鈴谷ちゃんがあれでもない、これでもないって」

「それであんなに走り回っていたの……」

那珂ちゃんがグテーツと伸びる。それほど大変だったということだろう。

「那珂ちゃんが先に叢雲ちゃんのお祝い買ったものだから、鈴谷ちゃんすっごい焦ってたんだから。欲しいものあげたかったの！」

「って」

「ちよつと！ 言わないでよ！」

鈴谷が顔を真っ赤にしている。そんな鈴谷を見て、マフラーに顔を埋める。暖かいわね。

「ほら。叢雲ちゃん。これからご飯食べるんだよ？ 汚したら勿体無いよ」

「もう少しだけ……」

「そんなに気に入ったの？」

「使いたいけど使いたくないわ」

このマフラーは特別な時に使おう。また鈴谷と出かける時とか

ね。

えくすとら

ムラクモ600(さんぷる)

鎮守府・執務室。

もう曆上は夏も過ぎたというのに窓から入ってくる日差しは夏のそれと変わらなかった。

叢雲の座る場所からはこの長である風間幸泰の顔は逆光になって見えない。そんな風間と向かい合って立っている妙高の顔はよく見えた。妙高は一仕事を終え、安心したような顔をしている。「しかしこんな早いとは……」

妙高の話を聞き終え、報告書に目を通した風間は感嘆している様子だった。

「私も驚きました。鈴谷さんがこれほどまでとは思ってもいませんでした」

「叢雲さんを超える子は出てこないと思ってたよ」

「別に自慢出来る記録でもないわ」

言葉の内容とは裏腹に、叢雲は不安を覚えていた。

「叢雲さんの場合は那珂さんが教育係を務めていましたから。私よりもずっと厳しい採点基準だったと思います」

妙高はそう言うのと表情を暗くした。妙高も那珂の指導を受けたことがある。その時の地獄のような訓練でも思い出しているのだから。

「じゃあ明日の作戦、鈴谷さんを投入してみようか」

風間の言葉に叢雲は驚きを隠せず立ち上がった。妙高も信じられないといったような表情をしている。

「いくらなんでも早すぎるわ！ 実戦と訓練は別物よ？」

「叢雲さんの言う通りです。実力では実戦に出しても問題ありませんが、あの性格では……」

妙高の言う鈴谷の性格。目立ちたがりで自分勝手なきらいがある。訓練演習では怪我はしないが、実戦では死ぬ可能性がある。二人

は猛烈に抗議した。

「でも神通さんの指導も受けてるのでしよう？　なら大丈夫じゃないかな？」

大丈夫じゃないからこんなに抗議しているのでしよう。叢雲はそう言いたかったが、口を噤んだ。

神通の指導は行き過ぎているからと、風間は神通を教育係から外していた。だが、叢雲はそれを押し切って鈴谷の基本的な教育を神通に頼んだ。妙高を含めた元自衛官組から恐れられた訓練の鬼でさえ、鈴谷の性格を短期間で矯正するのは難しいという。やつと変わり始めた時期に実戦投入するのではこれまでの神通の苦労が無駄になるのではないか。叢雲はそんな懸念を抱いていた。

「作戦内容は？」

叢雲は別の手段を取ることにした。実戦を訓練に変えてしまえばいい。

「哨戒任務。ということになっていくけど、近海で敵の水雷戦隊が発見されてね。遠征組の安全を確保するためにこれを叩いてほしい」

「編成は？」

「最近暇してる長門さんに出てもらおうと思ってる。近々大きな作戦もあるみたいだし、勘を取り戻して貰おうと思って」

「なら私も出るわ。あと神通もね」

「私も同行しましょう。少し偏った編成になるとは思いますが、鈴谷さんの面倒は引き受けます」

叢雲は妙高を見た。妙高は叢雲の視線に自信を持って頷いた。叢雲の意図するものが妙高に伝わったようだ。

「なら川内さんにも出てもらおうか。遠征組も長旅の疲れでまともに戦えないだろうから、万全を喫したい」

風間はそう言うのと、叢雲を見た。

「しかし叢雲さんは鈴谷さんに過保護すぎじゃないかい？」  
「見ていて危なっかしいのよ」

叢雲は歳の離れた同期である曙の姿を思い浮かべた。彼女も叢雲と同じく、民間出身の艦娘だ。一緒に那珂の厳しい訓練を受けてい

た曙はその時まだ十代だった。その姿と今の鈴谷が重なって見えるのだ。

「鈴谷さんも立派な艦娘だよ。妙高もそれを認めたからお墨付きを与えたんでしょ？」

風間の言葉に、妙高は黙って頷いた。

鎮守府・食堂

ある程度の書類をまとめ上げた叢雲は一人で食堂に来ていた。昼食を受け取り、誰も座っていない長テーブルに席を取る。叢雲が席に座ると同時に訓練を終えた曙と鈴谷が食堂に入ってきた。彼女たちは自分の昼食を受け取ると叢雲と同じテーブルに座った。

「訓練明けよね？ お疲れ様」

「秘書監殿は訓練がなくて羨ましいわ」

曙が割り箸を割りながらぼやく。

「そういうえば、あんた。今月誕生日でしょ？」

いよいよ三十路にな

る感想は？」

「えっ？ 叢雲ってまだ二十代だったの？」

鈴谷は驚いた様子だった。対照的に叢雲の眉間には深いシワが刻まれていた。

「そうね……そうねえ……」

女性は三十を過ぎると一気に来る。世間ではそう言われているが、叢雲は既にここ何年かで衰えを感じ始めていた。

「最近、足が動かなくなってきたのよね。自分の意思に反して一歩遅れるというか……」

叢雲の言葉に曙と鈴谷は大爆笑した。食堂中に響き渡る声で笑い、曙に限って言えば箸を放り投げて笑っている。さすがの叢雲もこれには気分を害した。

「あなた達だっついずれ経験するのよ」

負け惜しみを言ってみたが、二人が笑い止むことはなかった。その時、叢雲は肩を叩かれた。

「それは年齢じゃなくて運動不足。訓練不足ではありませんか？ この神通で良ければいつでもお相手いたします」

叢雲は神通に掴まれていた。神通の顔を見ると興奮しているのか赤くなっていた。

気がつけば訓練を終え、ボロボロになった艦娘達が受け取り口に並んでいる。彼女達と同じ訓練を受けたはずの曙と鈴谷が元気なのは彼女達がそれだけの実力があるということだろうか。叢雲は二人を見て感慨にふけてっていると、右肩に痛みが走った。

「遠慮するわ。訓練不足で三十路目の私があなたの相手をしたらしばらく動けなくなってしまうわ」

神通は残念そうな顔をした。神通の圧迫感で気付かなかったが、いつの間にか食堂が静まりかえっていた。先程まで笑い転げていた二人も黙々と手を動かしている。鈴谷が神通を怖がるのはわかるが、なぜ曙まで黙るのか。

「わかるよ叢雲ちゃん！　那珂ちゃんも昔みたいに動けなくなってきたえ……ステップのキレが悪いの」

神通の顔の後ろから那珂の顔が現れた。曙が黙った理由が叢雲にもわかった。叢雲も背中に嫌な汗をかき始めていた。今の那珂なら叢雲が何を言っても許してもらえるだろう。だが叢雲には昔の那珂のイメージがある。叢雲は次に言う言葉を必死に考えていた。

「それで私達の二倍以上の運動量とは恐れ入るね。砲弾弾きなんて普通できるもんじゃないでしょ？」

那珂の後ろにいた川内が助け舟を出した。叢雲が胸をなでおろすのも一瞬。今度は神通が話し始めた。

「川内ちゃん。叢雲さんも出来ますよ？　出来ることならもう一度見せて頂きたいですねえ」

神通が再び叢雲の肩を掴む。その顔にはとても妖艶な笑みを浮かべていた。

「あんだ……叢雲に勝ったことないからって目の敵にしすぎじゃない？」

曙が呆れきった様子で神通を見ていた。それとは対照的に鈴谷と川内は驚いた様子だった。鈴谷に至っては持っていたスプーンを落としてそうになっていた。そんな二人の様子を眺めていた叢雲の肩



に激痛が走った。

「目の敵ではなく、尊敬しているからこそ勝ちたいのです。元自衛官では無く、民間出身の艦娘。それも艦娘適応訓練を一年で終えた天性の才能に勝ちたい。自分と何が違うのか、それも気になるんです」

「曙も摩耶もボッコボコにされてたものね」

叢雲がそう言うのと、曙がとても嫌そうな顔をした。

「叢雲ちゃんはここに来た時から他の子よりも頭二、三個抜き出たからね。砲弾切りも叢雲ちゃんのオリジナルだし。けど、歳には勝てないよね」

那珂は叢雲の右肩に置かれた神通の手をどけた。その顔には慈悲にも似た、優しい笑みがあった。叢雲は何か言い返さないといけないと思ったが、言い返す言葉が見つけれなかった。これ以上この話題を続けるのはよろしくない。そう考えた叢雲は先程の執務室での話を鈴谷に伝えることにした。

「それはどうでもいいわ。鈴谷。あなた、明日の哨戒任務に組み込まれることになったわ。後で召集があると思うけど、心の準備はしておきなさい」

叢雲の言葉に食堂の雰囲気が変わった。曙も神通、川内、那珂でさえも驚きの表情をしていた。食堂中の視線が鈴谷に注がれる。しかし、当の鈴谷は驚いた様子もなく、不満そうな顔をしていた。

「ええ……哨戒任務かあ……もっと派手な作戦に参加したかったな」

呆れるほど呑気なことを言った鈴谷に神通が声を荒げる。

「哨戒任務だって立派な作戦です。それにあなた初めての实战の海に立つというのにその舐めきった態度は何なんですか？」

「神通ちゃんの言う通りだよ。那珂ちゃんは鈴谷ちゃんが明日の任務に参加するのは反対かな」

「明日って遠征組が帰ってくる日でしょ？　哨戒というより護衛の意味合いが強いんじゃない？　鈴谷ちゃんと意味わかってる？」

川内型の三人が厳しい指摘をするも、鈴谷は更に不満げな顔をするだけだった。

「何なの？」

鈴谷に不満でもあるの？

成績だけなら第一艦隊に

も負けないと思うけど」

「何舐めたこと言ってるのよ」

曙が鈴谷の頭を小突く。曙もきつと反対している。だけど、曙も昔同じようなことを言っていた。叢雲は曙が鈴谷に何を言うか見守っていた。風間が決めたことは自分達が勝手に覆すことは出来ない。出来ることと言えば、ここにいる川内型を引き連れて執務室に乗り込むことぐらいだ。

「いい？ 旗艦の言うことはちゃんと聞くのよ。最初は大丈夫でも、敵と対峙したら右も左もわからなくなるから……それから……何かあるかしらね」

曙は腕を組み唸り始める。自分が初めて実戦に出た時のことを思い出しているのだろう。曙の初めての实戦には叢雲も同行していた。叢雲が覚えているのは、その時の旗艦だった那珂に怒鳴られながら戦っていた曙の姿だ。

「大丈夫。哨戒でも護衛でも、鈴谷はヨユーだし」

あの時の曙とは全然違う。叢雲はそう考えていた。曙は実戦に参加したいと散々訴え続け、那珂の許しが出るまでひたすら訓練に明け暮れた。どうして叢雲ばかり、と恨み言を言われることもあった。それでも耐えて耐えて、耐え忍んでやっと実戦の海に出れた。その時、曙は自身に満ち溢れていた。だが、敵と遭遇した途端にその自信は打ち砕かれた。殺意を持って自分に砲を向ける深海棲艦だけならそんなことにもならなかった。訓練以上に厳しい那珂の指示。戦力にならない曙への叱責。曙は敵ではなく、那珂に潰された。

「そうね。一番大事なのは、仲間の為に動くことよ！ これは絶対忘れないでね！」

曙が自信満々に言い、鈴谷の肩をバンバン叩いた。この言葉はその作戦が終わり、曙の胸ぐらを掴んだ那珂が言った言葉だ。その言葉には続きがある。

「お前一人で勝てるって言うなら……」

最後まで言う前に後ろから伸びてきた手に口を塞がれた。目だけで振り返ると、顔を赤くした那珂がいた。叢雲は誰にも聞こえない

ように呟いたつもりだったが、那珂には聞こえていたようだ。那珂は首を横にブンブン振っている。叢雲は口を塞がれたまま頷いた。

「……私も明日の任務に参加します」

神通は般若面のような顔をしていた。神通が纏うただ並ならぬ雰囲気に他の席からこちらを見ていた者は一様に視線をそらした。叢雲是那珂の手をどかすと神通に声をかけた。

「心配しなくても、あなたも明日の編成には入っているわ。川内もね」

「那珂ちゃんは？」

「私の心がもたないからオフってことで……」

「ちょっと！　　どういう意味?!」

騒ぐ那珂を他所に、神通と川内は目をあわせると頷いた。叢雲は何度目かわからないため息をついた。

「ほんと、歳は取りたくないわ……」

「叢雲ちゃん！　　まだ話は終わってないよ！」

## 本編

### 第12話

バシヤンツ!!

神通が海面に叩きつけられ、体がバウンドする。

私はその光景に驚いた。

「嘘っ……ちよつと大丈夫ツ?!」

私の問いかけに神通は片手を上げて答えた。もう片方の手は打ち付けられたであろう腰に添えられている。痛みを堪えゆくり立ち上がる様は痛々しかった。

「大丈夫です……でも驚きました」

「ごめんなさい……まさかこんなに出力が出るとは思わなくて……」

「いえ、接近を許してしまった私の落ち度です……」

神通の腰に取り付けられた魚雷発射管が曲がっている。先程の衝撃のせいだろう。もしここに実弾が入っていたら……

「叢雲さん。気にしないでください」

気にしないでください。と言いながらも、痛みを堪えているのは顔を見ればわかる。

「演習なのに轟沈する可能性があるなんて……」

今回の演習の教官を務める那珂ちゃんが驚きの声を上げる。

正直に言えば、私が一番驚いている。神通の艦装からは中破判定が出ている。けれど、それは砲撃や雷撃によるものではない。新しい艦装がいまいち馴染まない私が砲雷撃戦を諦め接近し、力任せに投げただけだ。昔、那珂ちゃんが那珂さんだった時に、水面はコンクリー卜よりも硬い凶器になる。なんて言っていたけど、私はそれを始めて実感した。

「……次、鈴谷が相手したげる」

黙って見ていた鈴谷が私の前に立つ。口調はいい加減だけど、その眼差しは真剣そのものだ。

私は躊躇していた。この子を神通と同じ目にあわせたくはない。いや、神通のもわざとじゃないけど。

「大丈夫？　　叢雲ちゃん。相当強くなってるけど」

那珂ちゃんが鈴谷を諭す。だけど、その目はどこか楽しそうに見えた。

「大丈夫。鈴谷は重巡だし」

「そっか。別に止めようっていうんじゃないんだけどね……」

ニコニコと笑う那珂ちゃんがゆっくりこっちに寄ってきた。何か嫌な予感がする。私の耳元に顔を近づけた那珂ちゃんがボソツと呟く。

「軌道は逸らすだけ……それがわかれば、鈴谷ちゃんなんか一発の砲弾も魚雷もいらさないよ」

あまりの声のトーンの低さに背筋が凍りついた。ゆっくりと離れていく那珂さんはいつものニコニコした那珂ちゃんだった。

「じゃあ始めてもいいかな？」

「いつでもいいよ」

那珂ちゃんの問いかけに鈴谷は砲を持ち直した。重巡の砲を受けければ、私はひとたまりもない。

「叢雲ちゃんは？」

ニコニコして機嫌が良さそうな那珂ちゃんが私に問いかける。

「……いいわよ」

私は了承する。いえ、那珂ちゃんの命令に了解した。

「じゃあ……演習開始い〜！」

アイドルのようなポーズをとった那珂ちゃんが宣言すると同時に鈴谷が撃ってきた。狙いが前よりも正確になっている。鈴谷に砲を向けられたのは、ここに鈴谷がここに来て、空のペットボトルを不法投棄していた時以来だ。演習でもずっと同じ部隊で一緒だった。

「ほんと……成長したわね……」

いつもなら何らかの軽口が返ってくると思ったけど、鈴谷は何も言わなかった。真剣な眼差しのまま、私に砲を向けている。よく狙って撃て。確かにそう教えた。

「そんなんじや叢雲ちゃんには一生当たらないよ〜」

心底楽しそうな那珂ちゃんがニヤニヤしながら言う。だけど、那珂ちゃんの言うことは正しい。私が言うのもあれだけど。鈴谷は下唇を悔しそうに噛む。

狙いが正確すぎるから着弾地点がわかってしまう。私はこれまで、ずつと敵艦隊に斬り込む戦い方をしてきたのだ。さっきの神通との演習も鈴谷は見ていたはず。それを知らない、わからないほど鈴谷はバカじゃない。と思っていた。

早く終わらせよう。私はそう思い、背中の艤装を操作した。突如、背中に悪寒が走る。それは艤装からの異変の知らせではない。外部的な要因。

那珂ちゃんだ。こちらを睨むように見ている。

『一発の砲弾も魚雷もいらないよ』

やっぱりそうだった。あれはアドバイスなんて生易しいものじゃない。一発も撃つなという命令だった。

だったら。私は主機の出力をあげ、速度を増す。徐々に鈴谷の砲撃の精度が落ちてきた。一番速度が乗った時に、方向転換をし、一気に鈴谷との距離を詰める。

鈴谷はこちらに魚雷を放った。だが、狙いがバラバラ。私は進行方向を切り返し、それを難なく避けようとした。その時、鈴谷の目に殺気のようなものを感じた。

「……ッ?!」

迂闊だった。鈴谷が狙ったのは私が切り返そうとしたこの一瞬。それまで進むうとして方向にかかる慣性の力を別の方向に向けるようとして私の動きが鈍るこの一瞬の油断だった。

鈴谷が放った砲弾が私の顔を目掛けて飛んでくる。それまでの私なら、薙刀で切り落とせたけど、今はそれがない。だけど。顔を狙ってくれてよかったわ。

「……嘘ッ?!」

嘘じゃない。腰を落として、顔を下げる。だけど、無傷じゃない。頭の上に浮かぶ艤装の右側が吹き飛んだ。それと同時に頭に激痛が

走る。

「……初めてだわ。こんなこと」

私は後頭部を手で抑えた。別に血が出ているとか、そういうわけじゃない。だけど、とても痛い。まるで脳の片方を力任せにちぎり取られたような。そんな経験ないけど、そんな痛みだ。

「……チツ」

不機嫌そうな那珂ちゃんの舌打ちが聞こえる。機嫌がよくなったり、忙しそうね。

頭痛が痛い。そんなバカみたいな表現しかできないけれど、無性に腹がたった。

私はそのまま鈴谷との距離を詰めた。必死の形相をした鈴谷が私に砲を向ける。

それでいい。私は一定の距離を保つと、そのまま鈴谷と並走するようにして調整した。

二発、三発と鈴谷が発砲する。どうやら鈴谷は装填している間に狙いを定め、装填されたと同時に撃っているようだ。ならタイミングは掴みやすい。あと少し……

「変なこと考えてないで、鈴谷ちゃんに集中してあげなよ」

戦慄する。私の背後から不機嫌そうな那珂ちゃんの声が聞こえた。

那珂ちゃんは私の機装を掴んだ。速力が落ちる。

「ちよツ……ちよつと！　離しなさい!!」

那珂ちゃんは掴んだ手を離さない。鈴谷が躊躇なく発砲する。今度は避けられない。機装を掴まれているせいで体勢を変えられない。鈴谷はまたしても私の顔を狙っていた。

ゆっくり。ゆっくりと砲弾が私の顔を目掛け飛んでくる。嘘でしょう。この人はいったい何を考えているの?!　薙刀があれば切り落とせるのに!

「ふうん……あれがないと何も出来なんだ」

私の痛む頭の方から楽しそうな声が聞こえた。これが腹立たしい。私は怒りに身を任せていたらしい。気が付いた時には那珂ちゃ

んの肩口を持ち、私の目の前に那珂ちゃんを引っ張り込んでいた。余裕そうな那珂ちゃんの顔が目の前にある。それがまた無性に腹が立つ。

「仕方ないな。一回だけだからね？」

私は自分の目を疑った。那珂ちゃんは空いている手で背面にまわすとその場で一回転して鈴谷の放った砲弾を捌いた。だけど、正直に言うとこれは予想していた。私が驚いたのは私自身に対してだ。

「那珂ちゃんターン!!」

決めポーズまでしつかりとついている那珂ちゃんを私は呆然と見ていた。

これまで見えなかった、この那珂ちゃんターンが全て見えてしまった。体の動きから指先までの動き。全てが見えた。

「ちよつと!! 邪魔しないでよ!!」

鈴谷が怒鳴る。那珂ちゃんは鈴谷にペコペコと頭を下げると私の方を樂しそうに見た。

「……………わかった？」

「ええ……………この目に焼き付けたわ」

「そう……………ならよかった」

そう言うと那珂ちゃんは私の痛む方の頭を掴む。那珂ちゃんの握力に加え、先ほど捌いた方の手なのだろう、物凄く熱い。激痛。本当に痛いはずなのに、痛みを理解できない。那珂ちゃんが見開いた目で私の目を覗き込んでいるからだ。

「ならさっさと終わらせてくんない？ まだこの後にも予定はぎつしり詰まってるんだから」

「はっ……………はいッ!!」

「叢雲ちゃん。私に敬語はダメだよ？」

「わ、ワカツタワヨー！」

自分の意図せず、棒読みのなってしまう。那珂ちゃんがゆっくり私の頭から手を離す。

「い……………いったあああああいいいいいい!!!」

頭が割れるんじゃないか。そんな激痛が走る。私は思わず頭を



抑えてしやがみこんでしまった。

「だ……大丈夫ツ?!」

鈴谷の声が頭の上から聞こえる。

「大丈夫! 叢雲ちゃんは強い子だから! ほら、立って。早く続けよう!」

呑気な那珂ちゃんの声が聞こえる。誰のせいで私がこんな目にあってるのよ!!

痛みを堪えてゆつくり立ち上がる。頭の血管に血が流れているのがわかる。

「じゃあ……再開!!」

那珂ちゃんの合図が聞こえ、私は主機の出力をあげた。しかし、並走する鈴谷は撃つてこなかった。

「どうしたの?」

私の問いかけに鈴谷は私を睨んだ。

「どうして撃つてこないのさ!!」

自分が舐められている。鈴谷はそう感じているのでしよう。那珂ちゃんに一発も撃つなって言われたから。そんなことを言えば、鈴谷是那珂ちゃん撃つだろう。本音はそう言いたい。けれど言うわけにはいかない。

「……あなたを傷つけないから?」

適当なことをいったつもりだった。私がそう言うと、鈴谷の顔が真っ赤に染まる。突如私の足元に水柱がたった。

「かつ! からかわないでよ!!」

やればできるじゃない。油断していたのあるけど、私に当てるなんて大したものよ。今ので本来の最大出力は出せなくなった。けど、まだ充分動ける。

「そうね……じゃあ本気で行くわよ」

私はそのまま出せる限りの速力で鈴谷に向かった。今度は躊躇しない。きつちり距離を詰めてみせる。

鈴谷はさつきと同じく、魚雷を放った。今度はしつかりと私を狙っている。出力が上がらないせいでさつきよりも速度が遅いから

だろう。けど、私はそんなこと気にしない。さっきと同じように切り返す体勢を整えた。鈴谷も撃ってきた。タイミングもバツチリ。私が切り返すタイミングで着弾する。唯一違うのは、顔じゃなくて私の胴体を狙ったこと。

「少しは学習したみたいね」

私はこちらに向かってくる砲弾に向けて手を伸ばす。魚雷が私に向かってくる。安全に避けるならもう切り返していい。だけど、それじゃあ砲弾が捌けない。私の伸ばした手に砲弾が触れた。タイミングはバツチリ。

私は砲弾を掴んだ。正確には掴んだわけじゃない。ただ手の平で側面を抑えたという感じだけど、掴んだように感じる。手のひらが燃えるように熱い。痛む脳内に先程の那珂ちゃんのイメージが焼き付いている。同じように回るだけ。手のひらで砲弾を押す。回転しながら飛ぶそれは私の手の平の皮を削り取ろうとする。回転に合わせて、腕がまわり、肩が持っていかれそうになる。だけど争わない。そのまま腕から伝わる回転を身体に伝える。

『軌道は逸らすだけ』

ほんの少しだけ、砲弾を押してやる。腕の力だけで押すんじゃない。体全体の力でほんの少しだけ押してやる。それだけで砲弾は私への直撃コースから逸れた。そのまま回転を殺さずに体を回すだけ！

「叢雲ちゃんターンッ!!」

那珂ちゃんが興奮気味に叫んだ。正直、その呼び名はダサいからやめて頂きたい。けれどわかった。なんで那珂ちゃんがあんな踊るように戦うのかを。

「正直、私にはキツイわね……」

いろんな意味でキツイ。体力的にも、精神的にも。

クルツとまわり、鈴谷の方に向き直ると、鈴谷は呆然とした顔をしていた。

「何をボサツとしているのよ」

回転で得た力を殺さず、私はそのまま鈴谷との距離を詰めた。も

う手を伸ばせば鈴谷を掴める。鈴谷は咄嗟に離れようとした。それがいけなかった。鈴谷の襟首を掴もうとした手に柔らかい感触が伝わる。そんな遠くない昔の記憶が呼び起こされる。鈴谷の顔が真っ赤に茹で上がる。これはダメかもしれない。

ゴンツ!!

頭の中で鐘が鳴る。私が覚えているのはここまでだった。

――

「ううううう………ああああああ………!!」

「叢雲!! うるさい!!」

修復ドックで偶然一緒になった曙に怒られる。その声さえも頭に響く。

私は痛みに堪えきれず、ドックに潜った。頭を修復液に浸けても意味がないことはわかっている。けれど何もしないよりはマシ。でもない。

「大丈夫ですか?」

神通も私に投げられた時に負った腰痛のせいで隣にいる。心配そうに私を見る目はどこか悔しそうにも思えた。

「大丈夫じゃない! 頭が痛い! きつと割れているわ!」

「……もう後遺症がでたのかしら?」

曙が呆れたように私を見る。そうよ。後遺症。頭をなんども攻撃されて、もし後遺症でも残ったら……この痛みがずっと消えなかつたら……あの頭にのつたお団子を剥いでやる。そして食べてやる。もうこんな思考に陥っているのは後遺症かもしれない。

痛む頭の中で訳のわからない思考がグルグルと回る。回れば回るほど余計に痛い。

「ううううううう………」

「落ち着いてください」

突如神通に頭を抱きかかえられる。顔に柔らかい何かがあたる。そういう趣味はないけど、不思議と落ち着いた。神通は優しく頭を撫でてくれる。

「……あんだ。最近そつちに目覚めたの？」

曙が楽しそうにこちらを見ていた。そんな曙の胸元を見る。

「……そうね。あんだじゃ駄目だわ」

「クソ兔。今どこみて言った？」

「それぐらいにしてください」

神通が優しく私を撫でる。

そういえば、海に出て二連続で重傷を負っている気がするわ。情けないわね。

そんなことを考えているとあくびがでた。

「あら？　叢雲ちゃんはおネムですか？」

曙の茶化す声が聞こえる。

「お疲れでしょう。このまま寝ても大丈夫ですよ」

神通の優しい声が聞こえる。もうこのまま寝てしまおう。

「修復があけたら、また訓練に付き合ってもらいますから……あんなもの見せられたら興奮しちゃいますよ。本当に……鈴谷さんが羨ましくも妬ましいですね」

危ない声が頭の上から聞こえた気がするけど、もう眠い。私はそのまま意識を手放した。

## 第13話

脚が重い。そして摘まれたように痛い。

肩が痛い。二の腕も摘まれたように痛い。

一歩足を踏み出すたびに全身に鈍い電流が走る。正直動きたくない。けれど、何日も秘書の仕事を放棄するわけにもいかない。改二になってから秘書の仕事はサボりっぱなしになっている。

「叢雲さん、おはようございますー!」

後ろから摩耶の元気な声が聞こえる。私は体の痛みを堪え、ゆっくり振り返る。眠たそうな摩耶の顔が一変、急に青ざめた。

「おはよう」

「おはようございます……あの、あたし何かしましたか?」

恐る恐る、そんな様子で摩耶は私に尋ねた。どういうことだろうか。

「特に何もないけど……何かしたのかしら?」

私は普通に尋ねたつもりだった。けれど、摩耶は首と手を必死に横に振って否定した。

「……何かあったんですか?」

「何もないわよ?」

「ならどうしてそんな不機嫌そうなんですか?」

「……ああ」

私はここでようやく摩耶の様子がおかしいことに納得した。

「……なんでもないわ。ただ納得できないことがある。それだけよ」

「……そうですか……てか、叢雲さん、臙装が最適化するまではお休みなんじゃないんですか?」

「お休みのはずよ。最適化試験で那珂ちゃんの訓練に付き合わされたりしてるけれど」

「ならなんで書類なんて持つてるんですか?     あたしが持つていき

ましようか?」

「いえ、大丈夫。那珂ちゃんにお礼も言いたいしね」

私の代理を那珂ちゃんが務めている。私の前はずっと那珂ちゃんが秘書艦をしていた。まあ、那珂ちゃんじゃなくて那珂さんだったけど。私はそんな那珂ちゃんに言いたことが山ほどある。摩耶はそんな私のことを心配そうに見ていた。

――

執務室の扉をノックし中に入る。

普段は見れないであろう、那珂ちゃんの眼鏡姿がそこにはあった。

「失礼するわ。今日の書類を持ってきたわよ……那珂ちゃん。眼鏡なんかしてたかしら？」

もしかして……

「老眼鏡ではないよ」

那珂ちゃんがジトツと私を睨む。どうやら思っていたことがバレてしまったようだ。

「ルーペメガネっていうの？　字が大きく見えるやつ」

那珂ちゃんはそう言うと、眼鏡を置いて大きく伸びをした。

私は置かれた眼鏡の横に持ってきた書類を置く。正直、この少し屈む動作が一番くる。

那珂ちゃんはそんな私をニヤニヤと見ていた。

「……何よ」

「遅れて来た？」

「……なんの事かしら？　何もきてないわよ？」

とりあえず強がってみた。どうせ那珂ちゃんにはバレている。

「そうなの？……ああッ!」

那珂ちゃんは書類を取ろうとして、置いた眼鏡を私の方に落としました。いえ、訂正しましょう。書類を取るふりをして、眼鏡を私の方にわざと落としました。困ったような顔をしていても目が笑っていない。

「ごめん……叢雲ちゃん。拾ってもらえる？」

それはパワハラでしょう。この眼鏡、私も偶然を装って踏んづけやろうかしら。

ああ、ダメ。脚が言うことを聞かない。足を上げたら本当に偶

然にも踏んでしまうかもしれない。

私はすり足で近づき、ゆっくりと屈んだ。そして眼鏡を拾い上げる。

「……はい」

やりきった。私は自信満々に机の上に眼鏡をおいた。

那珂ちゃんはそんな私を苦笑いをしながら見ていた。

「ごめんね……那珂ちゃんにもわかるよ……」

「私はまだ二十代よ」

「四捨五入したら一緒」

「……………」

情けない。那珂ちゃんには文句を言おうと思っていたけど、そんな気も失せた。

「それで、何か変わったことはあったかしら？」

「特にないかなあ……神通ちゃんから鬼のような訓練申請が来てるだけかな」

「いつも通りね」

「そーだねー。あとは目の前にいる現秘書艦がすごく機嫌悪そうな顔をしているくらい？」

「摩耶にもさつき言われたわ」

「逆に摩耶ちゃんによかったね。他の子が見たら、多分声かけられないだろうし、自分がなんかやったんじゃないか疑心暗鬼に陥りそう」

「それも言われたわ。そういえば、司令官は？」

「多分まだ寝てると思う。今日締め書類を朝方まで処理していたし」

「那珂ちゃんは寝なくていいの？　眠たかったら私がやっておくれど」

「徹夜はお肌の天敵だよ？　那珂ちゃん、昨日も九時には寝たもん」

「そうですか……」

思わず呆れてしまった。上官が頑張っているのに、あなたが寝ていてどうするの。

「叢雲ちゃんも。あんま夜更かしばかりしてるとお肌のハリが無く

なっちやうよ!」

「もう徹夜なんて出来ないわよ」

「……お互い、歳は取りたくありませんなあ」

那珂ちゃんがため息を漏らす。どうやらお肌が云々ではなく、那珂ちゃんも徹夜が出来なくなっていたようだ。

私は那珂ちゃんに一礼し、執務室を後にした。

――

することがない。というのとはなかなかの苦痛だ。

自室で読みかけの本を読んでいたらいつの間にか寝てしまうほど苦痛だ。

「お腹空いたわね」

何もしなくてもお腹は空く。けれど、ここでいつもと同じ食生活をしていたら確実に太る。食べたらずく運動でもしよう。私はそう思い、重たい腰を上げた。突如、部屋の扉を乱暴にノックされる。

「叢雲! いるの?!」

曙だ。その慌てた声で何かあったのがすぐにわかる。

痛む身体に鞭を打って、慌てて部屋の扉を開ける。

「何? どうしたの?」

「鈴谷と摩耶が工場で大喧嘩してるのよ。叢雲を怒らせたのはお前だ。だって怒鳴りあいながら」

「何をやっているのよ、まったく……」

私は靴を履くためにしゃがんだ。失敗したと後で気がついた。

「……曙。立たせてくれる?」

「はあ?!」

「立てないのよ。ほらっ!」

私は曙に手を差し出す。曙はよくわからないと言った表情で私の腕を引っ張る。

「痛い! ちよっと! もう少し優しく引き上げなさいよ!」

「筋肉痛なの?! おばさん! 早く立ちなさいよ!」

「誰がおばさんよ!!」



曙に立たせてもらい、急いで工廠へ向かう。

「ちよつと！　なにタラタラしてるの!？」

「これが今の私が出せる最大戦速よ……」

「ああ……もうッ！……ほら！　乗りなさい」

曙がしゃがみこむ。背中に乗れということだろうか。

「……介護は必要ないわよ？」

「それだけ急を要しているということ……」

「なら仕方ないわね……」

私は曙の安くない善意に甘えて、背中に負ぶさった。曙はヒョイっと立ち上がると、そのまま走り出した。

「駆逐艦、曙！　鈴谷と摩耶を蹴散らさない！」

「うっさい！　クソ兔！」

――

工廠に着くと、鈴谷と摩耶が取っ組みあいの喧嘩をしていた。夕張と長門が倒れている。なるほど、曙が焦っていた理由もわかった。

「お前がなんか失礼なことしたからだろうがッ!!」

「鈴谷はなんもしてないし！　演習から会ってないし！」

「その演習でなんかしたんだろ?!」

「失礼なことされたのは鈴谷の方だし!!!」

訳のわからない論争を繰り広げながら取っ組みあう二人。私にはある種のコントにしか見えない。それかタチの悪いドッキリだ。

「ほら！　なんとかしなさいよ！」

「面倒ね……」

私はとりあえず、近くにいた夕張を起こした。工廠で喧嘩が始まったのなら、ずっとここにいる夕張に話を聞くのが手取り早いと思っただからだ。

「ほら、起きなさい」

何度か頬を叩くと、夕張はゆっくりと目をあけた。意識がはつきりしたのか、頭を抑えるとゆっくりと立ち上がる。

「叢雲さん？」

「そうよ。私は叢雲。それで、なにがあったの？」

「それが、摩耶さんが鈴谷さんに突つかかったと思っただら、喧嘩になりまして……長門さんと止めに入ろうとしたら殴られました」

「そう……わかったわ。夕張、あのバケツに水を汲んでもらえる？」

「水を？ わかりました」

夕張は私の言われるがままに空のバケツに水を汲んだ。夕張からそれを受け取ると、倒れている長門の顔にそれをかけた。長門はビクツと反応すると、慌てて立ち上がった。

「起きた？」

「叢雲さん……もう少し優しい起こし方は無かったですか？」

「こっちの方が手取り早いでしょ？ それにビッグセブンともあるう長門が重巡二人に遅れを取っていいいの？」

「面目無い」

長門は深々と頭を下げた。私は空になったバケツを夕張に渡し、また水を汲んでもらった。その間も、二人の喧嘩は続いている。私がここにいることに気がつかないほど熱中している。

私はため息をついた。二人が喧嘩になった理由は察しがついている。那珂ちゃんも摩耶でよかったと言っていたけど、どうやらそうでもないらしい。

夕張から水の入ったバケツを受け取ると、私はそのまま取っ組み合う二人に水をぶち撒けた。突如水をかけられ、ずぶ濡れになった二人は睨むように私を見た。

「どう？ 落ち着いた？」

私の顔を見るなり、二人は驚いたような顔をした。金魚みたく、口をパクパクとさせている。

「ほら。歯を食いしばりなさい……長門」

私がそう言うと、長門は二人の頭にゲンコツをした。あれは痛いだろう。私怨のこもった一撃なのだから。

――

頭にコブを作った二人は、長門と夕張の目の前で正座をさせられている。

話を聞くと、艤装を整備していた鈴谷に摩耶が突つかかったらしい。夕張はやるなら外でやれ。と叱りつけていたが、そういう問題ではない。長門の長い説教を私と曙は端にあるベンチに腰掛けて聞いていた。

「しかし運が良かったわね。もし那珂ちゃんや神通に知られたら、今頃二人とも大目玉よ」

「だから知られる前にあなたを呼びに行っただんじやない」  
「それであんなに急かしたのね」

曙が焦っていた理由がわかった。そして助かった。

もし神通に知られ、これの発端が私の筋肉痛だと知ったらどんな訓練に付き合わされるか。

「しかし、あんた。昨日は普通に歩いてたじやない？」

「……改二になると、遅れて来るのよ。あなたもそのうちわかるわ」

曙はしばらくポカンとすると、急に笑い出した。怒っている長門も、怒られている二人もこちらを見る。

「それは……摩耶が……悪いわ……」

息も途切れ途切れに、笑いを堪えられない曙が言う。それを聞いた摩耶の顔は青ざめていく。

「だから鈴谷はなんもしてないって言ったじゃん!!」

鈴谷が勝ち誇ったように言う。

「でも何でもなくて……!」

「でもなんかしたんでしょ! 摩耶、口悪いし!」

私はため息をつくくと、膝に手をあてゆっくり立ち上がった。

「よっこいしよ」

無意識にそう言っていた。曙がそれを聞いて更に笑う。足でバンバン床を叩いている。

「ちよつと! うるさいわよ!」

「ごめんごめん……でも……止まらない……」

笑い転げる曙を無視し、私は鈴谷の後ろに立つと、そのまま頭を叩いた。

「イタツ! 何すんのさ?!」

「あんたも充分口が悪い。摩耶は私とあなたを心配してたんでしよう？」

「……まあ、叢雲さんに失礼なことするの鈴谷と那珂ちゃんぐらいしか思い浮かばなくて……」

「でも何もしてないし！」

「そうね。誰が悪いとかないわ。強いていうなら……そうね、那珂ちゃんね」

二人が驚いたように私を見る。長門も驚いた様子だった。その時、工廠の扉からガンツと音が聞こえた。

「摩耶。あなたは少し神通に毒され過ぎよ。何かあったのなら、問い詰めるのじゃなくて、会話して話を聞いてあげなさい」

「……わかりました。すみませんでした」

「鈴谷にも謝ってよ！」

「鈴谷！ あんたも煽らないの！ あなたも少しは会話することを覚えなさい！」

「鈴谷は悪くないもん！」

プイツと鈴谷がそっぽを向く。本当に手のかかるめんどくさい子ね。

「仲間に手をあげた時点であなたも悪いわよ。ほら、とりあえず二人ともお互いに謝りなさい」

「鈴谷……済まなかった」

摩耶は素直に頭を下げた。一方の鈴谷は未だにそっぽを向いている。

「仕方ないわね……」

私はため息をつく。鈴谷の背中に覆いかぶさった。突然のことで対処しきれなかった鈴谷は、そのまま頭を下げる姿勢になる。

「摩耶、今はこれでいいかしら？」

「ちよつと！ 何すんのさッ！」

「はい、あたしは大丈夫です」

「そう。ならいいわ。鈴谷もちゃんと後で謝るのよ」

「退いてよ！」

鈴谷が私を跳ね除けようと暴れる。だが私は腕をしっかり鈴谷の首に回す。

「ほら、暴れないの。とりあえず食堂まで運んで頂戴。お腹空いたわ」「自分で行けばいいじゃんかッ！」

「全身が筋肉痛で辛いよ。ほら鈴谷に任せるから」「筋肉痛？」

鈴谷と摩耶の声の他に、神通の声が聞こえた。声の方を見ると、那珂ちゃんを締め上げている神通が入り口に立っていた。神通は妙に嬉しそうな顔を見ると、ゆつくりとこちらに歩み寄ってきた。

そのプレッシャーに鈴谷はスツと立ち上がった。しっかりと両手で私のお尻を支えている。私も思わず鈴谷の首に回す手に力が入った。

「……ちよつち苦しい」

「ごめんなさい……これより工廠撤退作戦を始めるわよ。摩耶、長門。敵軽巡に突撃して時間を稼いで。鈴谷はその間を縫って離脱。いいわね？」

「了解」

「私の前を遮る愚か者め……全艦突撃!!」

私の号令で三人は一斉に走り出した。

「身体が火照って来てしまいました……」

摩耶と長門の突撃を一人で受け止めた神通の脇をすり抜けた時、そんな声が聞こえた気がする。

結局、鈴谷の部屋に身を隠したがすぐに発見され、無茶な訓練予定を組まれてしまい、私の休みは全て無くなった。

## 第14話

私はこの時期が好きだった。でも別に嫌いになつたわけではない。何とも思えなくなつたのである。

「もうすぐ年末か……」

我らが司令官は窓から見えるブラウンの衣装をまとつた木々を見ながらボヤク。

「そうね。もうそんな時期ね」

秘書艦の机から見ると景色は壮観だ。執務机に積もつた未処理の書類の山。その後ろの窓から見える寒々しい景色とのコントラストは本当に美しい。

「感慨に耽つている時間があるのなら手を動かしてくれないかしら？」

私がそう言うと、司令官は申し訳なそうに椅子に座りなおし、書類を書く手を動かして始めた。

この時期は書類が溜まる。年末年始は民間企業が休みになる。その前に申請を回さないと、搬入される資材が滞る。となると、万が一敵がこちらに侵攻してきた時に資材が足りずに満足な出撃が出来なくなるのだ。相手方は、この時期は仕事をしたがらない。いつもは多少の融通がきく締め切りも、この時期は一切譲歩しない。

それに加えて、そうなることがわかっていながら、開発に多大な資材を回した阿呆がいるらしい。誰とは言わないわ。司令官。必要なことだったのでしょう？

声を大にして、この国を守っている私達が年中無休で働いているのにあなた達が休みつてどういうことよ！、と言いたるところだけど、彼らが働いて稼いだ税金で生活している私達には何も言うことができない。

「なんでこんな便利な世の中で、手書きなんですかねえ……」

司令官がボヤク。

私もそう思う。けれど、機密保持のため仕方ない。前はモニター

を何時間も見なくていいと喜んだけど、この時期だけはそうは思わない。

動かし続けた右腕を軽く揉むと、そうとう乳酸が溜まっていたのだろう。パンパンに張っている。

「最近、右腕だけ太くなつた気がするわ」

「素手で砲弾を弾くからそうなるんじゃないのかい？」

「なら早く私の艤装を間に合わせてちょうだい」

「それは明石くんに言ってくれ。そもそも、君の改二の設計書には薙刀は含まれていないのだから」

「あれが無いと、不安なのよ」

「……まあ、なんとかするよ」

困つたように頭をかく司令官に違和感を覚えた。

「どうしたの？」

「ああ、いや、なんでも無い」

そう言いながら、私に一枚の書類を手渡した。私はその書類を見ると、顔から血の気が引いていくのを感じた。

「あんた！　これ！　今日の郵便で出さないと間に合わないじゃないのー！」

「それは違う。今日の郵便回収に間に合わせないと間に合わないんだ」

「なおいわよー！」

「心配するな。まだ後二時間もある」

「二時間しかよー！」

結局、これに必要な資料を揃えるのに一時間。そこから吟味して申請するので一時間。書類を書き上げたのに三十分。間に合わなかった。

「なんですか、急に呼び出して」

「君は呼び出したのは他でもない」

訓練中の摩耶を呼び出した司令官はそれはそれとはとても偉そうな態度で座っていた。それに対して、摩耶は訓練を抜け出せたことが嬉しいのだろうか、仕方なく来てやったオーラを出しながらも顔がに

やけている。

「君にはこれがある場所に届けてもらいたい」

司令官は手書きで「極秘」と書かれた茶封筒を摩耶に渡した。

「なんか物騒つすね」

「そんな大層なものじゃないわ。今日までに出さなきゃいけない書類が間に合わなかったただけよ」

「それは違う」

司令官が腕を組み直し、私の方を見た。何が違うと言うのだろうか。何も知らない摩耶の前でカッコつけただけかしら。

「私が消印と必着を勘違いしていてな。つまり、そいつは今日までに相手先に届かないといけなかったということだ」

私は言葉を失った。速達で出せば間に合うと思っていた私は頭の中が真っ白になった。

「ようやくこの重大さに気が付いたようだね」

どうしてこの男はこんなにも呑気でいられるのだろうか。

私は時計を見た。まだ二時過ぎ。相手先には迷惑だろうけど、今から行けばギリギリ終業時間には間に合う。

「摩耶だけでは話が出来ないだろう。叢雲。君も一緒に行って先方さんと話をしてきてくれ」

「……わかったわ……私がないからってサボらないですよ。明日もこの寒空の下でおつかいしろなんて言われたら、パワハラで訴えてやるから」

「つまり、これと叢雲さんをここの住所に急いで届けるってことつすね!!」

話を理解した摩耶の目が輝いている。だから摩耶なのか。私はこの人選を理解した。

「そういうことね」

「わかりました! 叢雲さん! 私の急いで部屋に来て下さいい! 用意しとくんぞ」

摩耶は物凄く嬉しそうに執務室を出ていった。

それもそうでしょう。訓練を抜け出して、趣味のバイクを走らせ



られるのだから。

「相手先には私から言っておこう」

「当然よ。じゃあ行ってくるわ」

私は外出の身支度を整える為に自室に向かった。

――

相手先に迷惑になってはいけない。

久しぶりに袖を通したスーツは少し窮屈だった。シャツは新しいのを持っていたからすんなり着れたけど、パンツとジャケットが少しキツイ。

「新しいのを新調しないとダメかしらね」

着るか着ないかわからないスーツに出費するのは正直悩む。けれど、以前、司令と一緒に民間企業との会合に出席した時、艦娘の制服を着た私と礼服を着ていった司令官を蔑むような目で見てきたお偉方の視線は今でも忘れられない。

「こんど時間があつたら見に行こうかしらね」

私は鏡で少しタイトなスーツ着ている自分を見た。体の線が出ていて少し恥ずかしい。

まあ、いいわ。今は時間がない。足早に摩耶の部屋を目指した。

「摩耶、用意は出来たの？」

ノックをして摩耶の部屋に入ると、スーツ姿とは対照的に、どこかのレーサーだと言いたくなるような摩耶がそこにはいた。

摩耶は私の姿を見るなり、不服そうな顔をした。

「叢雲さん。その格好じゃこの時期は寒いですよっ。」

「……あんたバカなの？」

「失礼な……まあ、そんな気はしてたんで叢雲さんのも用意してあります」

摩耶はそう言うと、これまたパッチがいっぱい貼ってある派手な色合いのツナギを私に差し出した。

「私でも少しゆったりめなんで、叢雲さんならその上から着れると思います」

「……もうなんでもいいわ」

私は渡されたツナギをスーツの上から着る。それでも少しサイズには余裕があった。

「まだ少し大きいっすね。まあ、運転するわけじゃないんで大丈夫だとは思いますが……：叢雲さん、ブーツとか持ってます？」

摩耶は私が履いて着たパンプスを見ていた。そんなもの持っているわけがない。私は首を横に振った。

「……仕方無いっすね」

摩耶はビニール袋に私の履いて着たパンプスを入れると、それ私のツナギの中に突っ込んだ。どこが、とは言わないけど、その分の体積が増えた。

「これ、少し大きいかもしれないですけど履いてください」

「……ありがとう」

失礼な後輩だ。そう思ったけれど、背に腹は変えられない。

ブーツとヘルメットを受け取り、私はそれらを装着した。

「じゃあ行きましょう！」

摩耶は本当に嬉しそうに部屋を飛び出していく。私はその後ろを駆け足でついて行った。

—————

「これ！ すっごく煩いんだけど！」

『そうすか？ 私は普通だと思っただけですけど』

煩い排気音に混じり、摩耶の声がヘルメットの中で反響する。摩耶は呑気な声で受け答えをするが、アクセルを緩める気は一切ない。渋滞で並ぶ車の横を法定速度ギリギリのスピードですり抜けていく。本音を言うわ。怖い。

ようやく赤信号で止まってくれた。とりあえず、私はホッと胸を撫で下ろした。

『高速使わないと間に合いませんよね？』

この子は何を言い出すの？

十二分間に合う速さで一般道を走っているじゃない。私は摩耶

の肩口からハンドルに取り付けられた携帯を覗いた。一般道でナビをしていてその子は、確かに到着時間はギリギリだった。けど、私は知っている。その子がさつきから何度も計算しなおして、到着時間はどんどん縮んでいく。このまま行けば三十分は縮まるんじゃないかなるか。

「……大丈夫じゃないの？」

『いやいや、渋滞とかに巻き込まれたら間に合いませんって』

渋滞なんて関係ないじゃない！

そう言いたかったけど、強烈な加速で言えなかった。思わずギョツと摩耶に強く抱きつく。

『叢雲さん、可愛いっすね！　世の男はそれでコロツとこっちやいますよ！　硬いものが当たってますけどー！』

それはそれは楽しそうな摩耶の声が聞こえる。まず硬いものを入れたのはあなたよ。

『じゃあ高速使っちゃいますねー！』

『もうなんでもいいわ……はやく降ろして……』

『つれないこと言わないでくださいよ。まあ、なるべくはやく降ろしてあげますからー！』

私はそれから必死に摩耶にしがみつき目を瞑っていた。

艦娘でよかったと思っただのは、目を瞑っていても体に感じるGで体重移動を合わせることが出来たこと。目的地に着いて、摩耶は本当に楽しそうに私のことを褒めていた。そんな私は疲れ果てていた。

――

「じゃあこれをお願いします」

応接室で、担当の方と話し合いを終えた私はやっと一つ終わったと安堵した。彼が余計な一言さえ言わなければ。

「しかし……追加で鋼材の搬入とは……いよいよ大きな作戦でも控えているのですか？」

「……えっ？」

私は素っ頓狂な声を上げてしまった。追加？　私はそんなこ

と聞いていない。

「いえ……これは口が過ぎました。この分は、しっかり年内にはどちらに届くようにしておきます」

私が余計なことを言うなど言っているように思ったのだろうか、彼は慌てた様子で書類をまとめると席を立った。

「言つて貰えれば今度はこちらから出向きますので……秘密保護の観点から難しいとは思いますが、わざわざこちらまで出向いて頂くのも申し訳ありませんから」

「……わかりました。こちらこそ無理を言つて申し訳ありません」

彼が応接室の扉を開け、玄関口まで案内してくれた。その間、どういふことか何度か聞こうと思つたけれど、彼が知るわけがない。私は黙つて彼の後をついて行つた。

――

「あれ？　早かつたですね」

私のツナギやブーツを預かつた摩耶は近くの喫茶店で待っていた。

「ええ。話は司令官がしてくれていたみたい。すんなりと終わったわ」

「そうですか」

摩耶は珈琲の入つた大きなカップを口につけた。まだ湯気がたつていることから注文してそんなに時間は経っていないのだろう。時間がかかると踏んで大きなサイズを頼んだみたいだが、当てが外れたようだ。

「ゆつくり飲んでいいわよ。私も一息つきたいわ」

「………、禁煙ですよ」

摩耶の一声に私の希望が全て打ち砕かれた気がした。はやく帰れば訓練に戻らざる得ない摩耶が急いだ理由がわかつた。

「……何も頼まないのもあれだから、小さいサイズ頼んでくるわ。それ飲んでら出しましょう」

「うっす」

私は寒いのに関わらず、アイスコーヒーの一番小さいサイズを頼むとそれを流し込んだ。摩耶も残っていた珈琲を一気に飲み干す。そのまま大急ぎで外に出た。店員さんは不思議な人を見たに違いない。

「寒い」

「寒いのに冷たいもの一気に飲むからですよ」

「ニコチンが切れかかっているのよ」

「その気持ち、よくわかります」

「……」

摩耶がバイクを止めたは無人の時間貸しの駐車場だった。

バイク一台に車一台分の駐車スペースと贅沢な止め方をしていたが、私たちの他に止めている車はない。無銭駐車防止用の鉄板が跳ね上がっているけど、その前に横向きに止められたバイクに対しては何の効果も成していない。

私は自販機であっただかい珈琲を二つ買い、一本を摩耶に渡す。

「ありがとうございます……いやあく、帰りたくないっすね」

煙草を吹かす摩耶が嫌そうに言う。この時間にさっきのペースで帰れば訓練に戻ってしまうからだろう。今日は夜戦訓練もあつたはずだ。

「帰りはゆっくりでいいわ。せつかくですし寄り道でもしましょうか」

私がそう言うと、摩耶は目を輝かせた。

「マジッすか?! 叢雲さんがそう言うなら仕方無いっすね!」

「訓練抜け出して、お使いの足をして、また訓練に戻れなんて申し訳ないわ。今回はこっちの落ち度ですしね」

私は摩耶のバイクに腰掛けると、ポケットから電子煙草を取り出した。シューっという音と共にニコチンが入った蒸気が喉を通り抜ける。ゆっくり吸って、ゆっくり吐く。やっと体にニコチンが駆け巡るのを感じることができた。

「いつもより煙の量多いですね」

「今日初めての一服よ」

「朝から執務室に籠ってたんですか？」

「ええ。この一週間、ずっとそんな感じよ。おかげでいい気分転換になっただわ」

「多分一週間以上ですね。神通さんが、訓練に来ないってボヤいて二週間目ですから」

「どういう数え方してるのよ……」

私は蒸気を空に向かって吐き出す。煙草の煙とは違うそれがスーッと空に上り流れていく。摩耶もフーッと煙草の煙を吐きだす。受動喫煙が云々と言うけど、元紙巻喫煙者の私からするとその匂いも羨ましく思う時がある。煙草本来の匂い、それが恋しくなる。

「……そんな物欲しそうな目で見て……一本あげましょうか？」

「いえ、遠慮しておくわ。戻れなくなったら困るから」

「そうですか」

摩耶は一息大きく煙草を吸うと、携帯灰皿に煙草を放り込んだ。煙をゆつくりと吐きながら、バイクのエンジンに火を入れる。タンデムシートに腰掛けていた私のお尻から四気筒の心地よい振動が伝わる。

「暖気が終わったら行きましようか」

「そうね……摩耶はドライブコースとかあるの？」

「そうですね……寒いかもしれないですけど、高速を少し流しましよるか。遠回りになりますけど、今から流していけばイルミネーションの点灯の時間帯に通れますね」

「エスコートは任せるわ」

「訓練サボって、こんな事してるって神通さんや鈴谷にバレたら何言われるかわかんないっすね」

「たまにはいいじゃない。それにあなたと二人で出掛けるのは初めてだわ」

「私も後ろに人を乗せたのは叢雲さんが初めてですよ」

そう言われるとなんだか照れるわね。

「何赤くなってるんすか」

摩耶が楽しそうに言う。摩耶は空き缶を私から受け取ると、それ

を捨てに行った。

特に理由もないけど帰りたくない。そう思った私もどうかしている。

## 第15話

その日は午前中は本当に幸せだったと思う。

まず、私の薙刀が完成した。改二の出力に耐えられるように強化され、伸びた身長にあわせて長くなった。その分重たくなったけど、バランスがいいのか持ってみると重さを感じない。新しい装備を開発した夕張が試したいと騒ぐ気持ちもよくわかる。

それに加えて、川内型の三人と長門が改装を受けることになった。別に長門に迷惑をかけられた覚えはないけれど、川内型の次女と三女には振り回されることが多い。それに、私が新しい装備を手に入れたということを知れば、訓練しようとして騒ぎ立てられただろう。

「これで叢雲ちゃんターンなんて言われなくてもすむわね……………」

那珂ちゃんに勝手に命名された技名を実際に口に出してみるとキツイものがある。普段でこれだ。実戦で叫ぼうものなら、きつと曙が腹を抱えて笑う。そして、彼女は被弾する。ム力つくとか、イラツとするとか、そういうことじゃない。仲間に危険に晒されるから言わない。

「叢雲さん。いつまでそれ持ってるんですか？」

先程まで長門の装備を弄っていた夕張がいつの間にか私のことを珍しそうに見ていた。そう言われるのも無理もない。自分の装備はある程度は自分で手入れをしているが、細かい部分は夕張に任せている。それにあまり執着はしていない方だ。そんな私が朝からずっと薙刀を振り回して遊んでいる。

司令官に秘書艦業務は午後からでいいと言われた時はすぐにもどると思っていたけど、実際に手にしてみるといつまでも持っていたくなった。

「午後には手放すわよ」

「そんなに気に入ったのなら、執務室まで持っていってもいいですよ？」

夕張は笑いながらそう言う。だけど、狭い執務室でこれを振り回



すわけにはいかない。

「いえ、置いていくわ。余計なものを斬ってしまいそうだから」

「つまらぬものは斬らない主義ですか」

どこかで聞いたことのある台詞を言うと、夕張はハッと何かを思い出した顔をした。

「どうしたのよ?」

「叢雲さん! はやくここから逃げた方がいいです!」

「な、何よ? 急にどうしたの……」

その時、プシューという風船から空気が抜けるような音が二つ聞こえてきた。私は音がした方を見る。音を発した機械には見覚えがある。私に激痛を与えたら改装装置だ。

それまでその装置の脇で何かを操作していた明石がハッチの部分をあけている。

根拠はないけど、本能が訴えている。それを開けてはいけなないと。

「……中に誰がいるのかしら?」

私がそう夕張に訪ねると、ハッチの縁を掴む手が表れた。

「片方は長門さんです。もう片方は……」

「んんん………あつ! 叢雲ちゃん! どう? ますます魅力的になっちゃった?!」

身体を起こし、大きく伸びをした全裸の先輩は私を見るなり、訳のわからないことを仰った。私は理解するのに時間がかかった。言葉ではなく、今の状況をだ。

まず、私は新しい装備を持っている。そして次に、その先輩は強くなった。

「これが改二というものか………凄いな」

隣の装置からは全裸のスタイル抜群、容姿端麗な黒い長髪の美女が現れた。

「長門ちゃん! おはよう!」

「ああ、おはよう」

長門は機械から出ると、まじまじと自分の身体を眺めた。さつき

の言葉は取り消しましょう。やたら筋肉質な背の高い女性が現れた。長門は腕を曲げ、力こぶを見て感動している様子だ。

「……………脳筋が二人」

「二聞こえてるよ(ぞ)」

小さな声で呟いたつもりだが、二人にはしっかりと聞かれてしまった。

「叢雲ちゃん！ その薙刀、新しい装備？」

「いや……………その……………これは……………」

ここで新しい装備が手に入れたなんて言えば、私の優雅な午後が無くなる。夕張に助けを求めようとそちらを見ると、残念そうな顔をしていた。

「遠慮しなくても大丈夫！ これでやつと本来の力が出せるね！」

先輩は私に歩み寄ると、私の顔を覗きこむように見た。正直逃げ出したい。次に言うことはなんとなくわかつている。

「でも、新しい装備になれることも必要だよね？……………夕張ン！ 私の新しい艦装はもう動かせるの？」

「えっ！ いやっ！ まだ調整が終わってな……………」

夕張は私の為に嘘をついてくれようとした。だけど、先輩がとても嬉しそうにニコニコ笑っているのを見て顔が青ざめた。

「……………私は大丈夫よ」

夕張にそう告げる。私も夕張の為に嘘をついた。夕張は申し訳なさそうに私を見ると、黙って頷いた。

「私の艦装も行けるか？」

長門も便乗する。

「はい。お二方の艦装の調整は終わっています。ただ……………」

「細かい調整は演習してするから！ 大丈夫！ 今日中には終わるよ！」

私の優雅な午後はこの一言で無くなった。

—————

『準備いい〜?』

鈴谷の気の抜けた声が無線越しに聞こえてくる。

『ああ！　いつでもいいぞ！』

長門は楽しそうな声で返答した。

『こつちもいつでもいいよ〜』

那珂ちゃんの楽しそうな声も聞こえる。

「ハア……………いいわよ」

思わず溜め息が漏れてしまう。二人の演習に巻き込まれた私は二人を相手にしなくてはいけない。けれど、那珂ちゃんと長門は同じチームではない。一対一対一の三つ巴戦。よくこんなルールを司令官は許したと思う。まあ、彼も那珂ちゃんには逆らえないのは知っているけど。

『じゃあ……………演習開始！』

鈴谷からの無線と同時に発砲音が三つ重なる。一つは鈴谷が撃った開始の合図の空砲。だったらあと二つは…………

「フライングじゃないかしら？」

シューという空気を切り裂く音と一緒に大きい砲弾が飛んでくる。間違いない。長門が放ったものだ。

今回、私の演習の目的はこの薙刀が使えるかどうか。けど、それは臙装を背負った時にはわかっていた。利き手ではない、左手で薙刀を握り、グツと振りかぶる。大丈夫。砲弾はしっかりと目で捉えている。

「素手で弾くより、全然簡単ね」

薙刀を横一線に風ぎ払う。切れ味のいい包丁でトマトを切ったような感触が手に伝わる。以前はキャベツ一玉を真つ二つにするような感触だったけど、強度だけではなく切れ味も相当よくなっているらしい。

「夕張には感謝しないとね」

もう敵の砲は怖くない。後は那珂ちゃんの雷撃だけを気を付ければいい。そう考えていると、長門から小破の判定があがった。

『すご〜い!!……………じゃあ叢雲ちゃん！　次はそつちに行くよ〜!!』

那珂ちゃんの弾けるような声が無線から入った。嫌な予感がする。那珂ちゃんの姿は私より大分離れた場所に見える。長門の姿も見えているが、二人とも私の射程よりも外にいる。那珂ちゃんも私のことも長門のことも射程に捉えていない。なのに長門が小破した。私は何もしていないのだ。

『……………次はそうはいかんぞ』

長門から無線が入ると同時に長門の主砲が火を拭いた。私と那珂ちゃんに一発ずつ。私は時分に向かって飛んでくる砲弾を目で追いながら那珂ちゃんの動向にも視界の片隅で捉えていた。私と那珂ちゃんにほぼ同時に弾着。私は先程と同じく砲弾を斬った。

「……………えっ?!」

時間に見てみたら一秒もない。那珂ちゃんがくるつと回ったと思うと、私に向かつて一直線に何か飛んでくるのが見えた。それも空気を切り裂く音よりも早く、こちらに何か飛んでくる。

「また胸……………」

飛んできた何かを薙刀で受けたが、胸部に激痛が走る。薙刀の柄の部分で受けたそれは、そのまま薙刀を押し込み、胸部に激突した。私の艤装からは轟沈判定が出ていた。今回は意識を飛ばさずに済んだが、何が起きたのかはわからない。薙刀に食い込んだそれを見ると、それは紛れもなく戦艦が放った演習用の砲弾。

「軽巡がこんなものを撃てるようになったと言うの……………」

『それは違う』

長門から無線が入る。その声には焦りも含まれていた。

『どつかあくん!』

那珂ちゃんの楽しそうな声も聞こえる。那珂ちゃんに目をやると、手で銃の形をつくり、私に撃った。無性に腹がたつ。

『まあまあ。叢雲ちゃんは鈴谷ちゃんと一緒に見ててよ!』

不機嫌なのが顔に出てしまったのか、那珂ちゃんは諭すようにそう言った。私は大人しく、言われた通りに鈴谷の横まで航行した。

「叢雲、大丈夫?」

鈴谷が心配そうに私を見る。ここ最近、この子の前で情けない姿

しか見せていない気がする。

「ええ。大丈夫よ……あなた、那珂ちゃんが何をしたのかわかった？」

私がそう言うと、鈴谷は黙って首を横に振った。

「そう……ならここから見させて貰うわ」

「那珂ちゃんって本当はすごい人なんだね。鈴谷には何が何だか全然わからないけど……知らない世界で戦っているみたい」

「だから私も神通も頭が上がらないのよ。今はああやってふざけているけど、頭の中で、私達の想像のつかないことを考えているのよ。普段の言動もそうだけど」

『どういう意味？』

いけない。会話は全てを聞かれているのだった。私は押し黙ると、長門が多少イラついた声をあげた。

『この長門を前にして余裕ではないか』

『余裕……ではないかな。那珂ちゃんはアイドルだからファンの前では常に全力だよ！』

『そうか……ならこちらも全力でいかせてもらう』

長門はそう言うや否や、耳を塞ぎたくなるような轟音が響いた。長門の全門一斉射。放たれた全ての砲弾が那珂ちゃんめがけて飛んでいく。

『那珂ちゃんには、本当の愛しか届かないんだから！』

それを難なく避ける那珂ちゃんは、砲弾ではなく、長門を見ている。水柱が一つ、また一つと那珂ちゃんに近くに立つ。私はその数を数えていた。四つまで数えた時、再び轟音が響く。

「鈴谷の魚雷みたいなものだったのね……」

長門の狙いは正確だった。那珂ちゃんが残りの砲弾を避けるために身体を切り返す。そのタイミングを見計らって長門は正確に捉えている。避けられない。いえ、言い方を変えましょう。那珂ちゃんは避けるために切り返したわけじゃない。

『なっかちやあ〜〜〜ん……』

那珂ちゃんは空に手を伸ばす。その手が掴もうとしているのは空ではない。那珂ちゃん式に言うなら、ファンからの愛だろう。私は

目を見開き、那珂ちゃんの一挙手一投足を逃すまいとした。那珂ちゃんが長門の愛を手で受け取った。これは私も出来たやつだ。戦艦の砲弾は自信がないけど。

『タア~~~~ンツ!!』

だけど、そこから先は何も見えなかった。私の目でも追えない程の速さで一回転してみせた。だけど、那珂ちゃんが放った戦艦の砲弾の正体がわかった。私はあの時、一直線で飛んでくる砲弾を見たわけだが、少し考えて欲しい。砲弾は距離が離れている場合、放射線を描いて飛んでくる。けど、あの時、那珂ちゃんと私の間には距離があった。

「本当に……あの人が、私より年上なの？　よくあんなことが出来るわね」

『叢雲ちゃんも恥じらいを捨てなよ！　可愛いんだからこっちの世界に飛び込んでおいで！』

「遠慮するわ」

そういう意味で言ったんじゃない。那珂ちゃんターンに巻き込まれた砲弾は一直線に長門に目掛けて飛んでいく。長門の小破判定もこれによるものだろう。あの砲弾を受けて小破とはどれだけ頑丈なのよ。

『この長門に同じ手が二度通用すると思うなよ』

長門がそう言うと同時にゴンツという鈍い音が響いた。演習用の砲弾は爆発することがない。長門に砲弾が当たったということだけだ。

「あつちもこつちもマッチョよね」

長門は握り拳を真っ直ぐ伸ばしていた。その拳の先に、ひしゃげた砲弾がくっ付いている。推進力を失ったそれは、そのままポロツと海に落ちた。

「さつきから随分冷静に分析してるけどさ。鈴谷が普段やらされてる訓練とは全然別物なんだけど?!　こんなの見せられたら、今までの訓練に意味なんてあったのか疑問に思っちゃうんだけど!」

横で鈴谷が喚く。私もそう思う。けど、何度も何度も馬鹿げた光

景は見てきた。そして、私もそんな中で砲弾斬りなんて馬鹿げた芸当を覚えた。

「あんな風になりたくなかったら艦娘も元人間、女の子だってことを忘れないことね」

『那珂ちゃんは女の子の憧れの的、アイドルなんだけど』

「那珂ちゃんみたいなアイドルなんて今まで見たことないんだけど」

鈴谷が思ったことを口にする。そんなことを言われた那珂ちゃんは何か騒いでいるが、そんな状況ではない。戦艦の砲弾を拳一つで払いのけた長門に対して、那珂ちゃんが勝てるとは思わない。那珂ちゃんの砲弾返しは、多分直接搦んで投げ返してるわけじゃない。ただ軌道を逸らしているだけだろう。そこに高速回転によって砲弾を更に加速させている。今の那珂ちゃんが出せ得る、最大火力のはずだ。

それを、長門は小細工なしのパンチ一つで叩き落とした。今ので長門にダメージが入ったとは思えない。自分との戦いを蔑ろにする那珂ちゃんに腹をたてるかと思っただけ、長門は冷静に那珂ちゃんを見ていた。そして、ゆつくりと主砲を動かす。

『……意外と冷静なんだねえ』

鈴谷と漫才をやっていた那珂ちゃんが急に冷静な声を発した。

『ああ、負ける気がしないからな』

長門が挑発をする。おかえし、というわけだろう。那珂ちゃんの舌打ちが無線越しに聞こえてくる。

「どういふこと？」

「もし、長門が那珂ちゃんの言動に冷静さを欠いてがむしやりに砲撃しようものなら、那珂ちゃんはそれを返してた。けど、うまくいかなかったっていうことよ」

「でも、那珂ちゃんは長門さんの砲弾を返せるんでしょ？ だってら無敵じゃん」

「同時に命中弾が来たらわからないわ。二発までならなんとかなくても、三発、それも、四十六センチ砲弾だったら……」

さすがの那珂ちゃんでもひとたまりもない。だから長門には余

裕がある。

「……じゃあ那珂ちゃんは負ける？」

「“那珂ちゃん”は負けるでしょうね」

『叢雲ちゃん。うるさい』

いけない。またやってしまった。別に長門を応援しているわけじゃないけど、有利な情報を与えてしまったわ。長門の方を見ると砲門は全ての発射用意は出来た。本人は腕を組み、余裕の表情を浮かべているのがわかる。どうやら私の言った言葉の意味は理解していないようだった。

「鈴谷は格闘技とか好き？」

「格闘技？ そんなの興味ないけど？」

「私もないわ。けど、実際に見てみると迫力があつてハマる子が多いみたいよ」

「そうなんだ……それが何？」

「いえ、別に……ただ今年の紅白はよくわからなかったと思っただけよ」

『那珂ちゃんを呼ばない紅白なんてありえないよね！』

「それは絶対にならない（わ）」

まだ那珂ちゃんね。



## 第16話

「間に合いました?!」

鈴谷とくだらない話（今度の休みにどこに行こうか？）をしていると肩で息をする神通が現れた。那珂ちゃんと長門は睨み合って動かなくなつて久しい。鈴谷が今度、イルミネーションを見に行きたいと言ひ、彼女が一度も見たことがないという話を延々と聞かされたから随分長い間硬直していたことになる。ちなみに私は見たことがある。私がアバルトを買った年の冬、浮かれに浮かれていた私は一人で見に行った。別に周りがアベックだらけだろうと悔しくなかつた。私にはこの子（アバルト）がいる。別に悔しくなんてなかつたわよ。「あら、神通。随分と立派になつて……」

「そんなことより、那珂ちゃんです！ 皆さん無事なんですか?!」私のお世辞なんて気にする素振りもなく、神通は焦つた様子で私に問いかけた。

「叢雲が轟沈判定、長門さんは今は小破判定だ……ですよ」

鈴谷がぎこちない敬語で話す。あなたはまだ神通に慣れていないの？

神通は鈴谷の話の聞くやいなや、私の身体をジロジロと見始めた。正直気持ち悪い。

「大丈夫ですか？ どこか痛いところは有りませんか？ この神通でよければ背負つてでもドックに連れて行きますが……」

「大丈夫よ。胸は少し痛むけれど……流石夕張が時間をかけて作っただけのことはあるわ。私以上の強度がありそうよ」

私は私の身を守つてくれた薙刀を神通に見せた。流石に擦り傷はついてしまつたが、戦艦の砲撃に人外の加速力が加わつた模擬弾頭を受けてもビクともしなかつた薙刀を神通に見せた。神通はそれを受け取ると羨ましそうにそれを眺めた。

「……私のこれでも、同じことが出来るでしょうか？」

神通はそう言い、腰に下げていた日本刀に手を添えた。それを見

た鈴谷が顔を強張らせるだけでなく、背筋を伸ばした。

「ジ……ジンツァーサン……ソレハ……ナンデシヨウ？」

鈴谷が片言で話す。神通はそれを受け、気が付いたように話始めた。

「ああ……そうですね。今までは木刀でしたが……これからはこれで指導が出来そうですね……」

神通がニヒルな笑みを浮かべる。鈴谷は今にも泣きそうだ。行き過ぎた指導、そんなことに溜め息を漏らそうとした瞬間、キーンという甲高い音が聞こえた。その音は他の二人も聞こえている。神通の顔が引きつった。

「……この音は？」

「今の川内型の主機が高回転に達した音です……夜戦特化したと言えばいいのでしょうか。手記からの排気音だけでは無く、主機が発する音もほぼ無くなりました。ですが、高回転まで回ればどうしても金属と金属が高速で擦れる音は消えません……」

「つまり、この音は那珂ちゃんの主機が高回転で回っている……ということね……一つだけ聞いてもいいかしら？」

「何でしょう？」

「川内型の主機に過給器は付いているのかしら？」

「いえ、私たちは設計が古いので……」

「カキューキ？」

鈴谷の間拔けな声を無視したけど、今の私はご機嫌だ。

「なら最高じゃない!!」

「何を言ってる……」

「後は、那珂ちゃんの……いえ、那珂さんの気合次第ってことね」

私がそう言うや、否や、那珂ちゃんは静止状態からとんでもないスタートを決めた。私が想像していた通り、そんじよそこの艦娘では出来ないことを那珂ちゃんは平然とやってみせる。

少し考えて欲しい。例えば陸上選手がスタートの合図で地面を蹴るでしょう？ その力は脚力によって決まるわよね。地面は動かないもの。地面を蹴った力はそのまま推進力として伝わるわ。で

も、水の上ならどうかしら？ 私達、艦娘は足に装着された艤装の推進力で進んだりするわ。それはスクリーンから得られる推進力よ。ならゆっくり、少しずつ加速するわね？それが常識よ。

けど、那珂ちゃんは、一瞬にして速度をのせたの。これがどういう意味か、わかるかしら？ 前に私が神通を投げ飛ばした時、神通は海面をバウンドしたのよ。つまり、海面は硬くなるの。正直、細かい理由はわからないわ。けれど、そういうことでしょう。

『いっくよお〜〜〜！』

主機のスペックを上回る程の速さで飛び出した那珂ちゃんは余裕そうにそう言った。長門に対して、右回りで攻めようとしている。だけどこのままだと……

『その程度の速さで、この長門から逃れられるとお思いかッ!』

長門が発砲。ほら見なさい。こっちに目掛けて飛んできた。

「あ……危ないッ！」

神通が叫ぶ。どうやら、彼女の目は私より先に危険を察知した。というより、那珂ちゃんの航跡を予測できていた。同じ川内型だからだろうか。

「ギリギリまで膨らんで来ますッ！」

「えっ？ どういうこと？」

この状況下で、未だによくわかっていない鈴谷が素っ頓狂な声をあげる。

私は鈴谷の前に出て薙刀を握りなおした。神通も腰に差している長いのに手をかけた。長門の砲撃が正確なら、確実にこのポイントを狙っている。長門に悪意はない。ただ那珂ちゃんを狙っただけだ。むしろ悪意があるのは那珂ちゃんだと言ってもいい。

「あんた、改装あけなんでしょ？ 随分と自信があるじゃない」

「この神通、常に叢雲さんの動向には目を配っていました……」

那珂ちゃんが私達の目の前を通り過ぎた。本当にギリギリ。わざとじゃないかと思うほどだ。

でもわざとでしょうね。那珂ちゃんは神通を認めると、きつちりと海軍式敬礼をしてみせた。その顔にいつものふざけた笑みはない。

真面目そのもの。目が座っていた。

やはり来た。長門の放った砲弾が私達目掛けて飛んでくる。狙いはさほど正確ではない。だけど、長門の放った一斉射、うち三発は命中弾だ。

「……水雷戦隊旗艦を差し置き、突撃するその勇姿。この神通の目に焼き付いております。なればこそ、新たに得たこの力、最初に見て頂きたく思います」

神通が抜刀した。それは一秒以下。コンマ何秒……もしかしたら、それより速いと思う。

改二になった私でも目で追えなかった。だけど、見えた瞬間がある。それは、抜刀された刀に砲弾が当たったその瞬間。間違いなく、神通は砲弾の中心線を捉えてみせた。

「……クウツ！」

私は私と鈴谷に直撃するはずだった二つの砲弾を叩き落とした。砲弾を見据えて、中心を捉える余裕なんてない。ただ薙刀を振り回し、二つを捌いただけだ。

「お見事です！」

神通がまるで自分のことのように喜んだ。ただ、私の背中に悪寒が走った。

目の前を通り過ぎた那珂ちゃんが私のことを横目に睨んでいた。悪寒の原因はこれのせいだ。口が動くのが見える。

「な……さ……け……な……い……」

私は那珂ちゃんの口の動きを見た。

あなたに言われなくてもわかつているわ。あなたと私……いえ、那珂さん直伝の砲弾斬りが見盗られた。それも……私のなんか比にならない技のレベルだ。

「言われなくても……わかつているわよ」

悔しい。

改二になって浮かれていた。

出来ないことが改二になって出来るようになったわけじゃない。ただ、それまで出来たことの質が上がっただけ。それで満足して

いた。

「ちよつと！　叢雲！　どうしたの?!　どこか痛い?!」

鈴谷の声が聞こえる。どこも痛くない。

「大丈夫ですか?!」

大丈夫じゃない。これからが。

悔しい。

神通が妬ましいわけじゃない。

これで満足していた、自分に対してだ。

――

叢雲が唐突に泣き出した。

顔を見せまいと、手で顔を覆っていても、指の隙間から泣き声が漏れている。

「大丈夫……大丈夫よ」

叢雲はそう言うも、その声いつもの自信はない。

私は神通さんを見た。刀を手にし、心配そうに叢雲を見る神通さんを。

「……………」

わかった気がする。叢雲が何故泣いているかを。

正直、叢雲は改二になってから浮かれていた気がする。けど、もともと強かったから私はそれでいいと思っていた。でも叢雲はそうじゃなかった。プライドが高いのにおちよちよいで、何だかんだ私を……いえ、後輩のことを気にかけてくれる。だから嬉しいけど、悔しいんだと思う。もう、自分が神通さんに何もしてあげられないと思ったから。ずっと訓練に明け暮れて、強くなろうと頑張っていた……叢雲に追いつこうとしていた神通さんに申し訳なくなっただ。

私は叢雲をグツと抱き寄せた。拒まれるかと思ったけど、叢雲は私の背中に腕を回すと、顔を私の胸に押し付けた。叢雲が震えているのが伝わる。頭に手を置き、優しく撫でると、叢雲は更にグツと力強く抱きついた。

そんな私を神通は恨めしそうに見る。悪いけどここは譲れない。

どうしてこの子はそんなに信用されているの。

鈴谷さんに抱き着く叢雲さんを見て、私はそう思った。

私は叢雲さんに憧れて強くなりたいたいと思った。駆逐艦なのに、先陣をきるその姿を何度も見てきた。敵の砲弾を捌き、砲も魚雷にも頼らず、敵を切り捨てていく姿に感動した。だから私もそうなりたかった。

那珂ちゃんと私は違う。

那珂さんが那珂ちゃんになって砲弾を弾くようになったのには理由がある。

川内型だから。水雷戦隊の旗艦だから。後ろを走る子が安心して戦果をあげられる為に。いえ、彼女達を守る為に。だから那珂ちゃんの訓練は厳しかった。生き残る為に強くなれと。もし万が一、自分が動けなくなった時に生き残る為に。

私にはそんなこと出来なかった。

私は私の部隊が強くなるために訓練をさせた。見敵必殺。相手に撃たせる前に撃てと。だから雷撃には拘った。軽巡、駆逐の砲では威力が足りない。だから厳しく躡けた。敵の当たらない砲撃に当たるなど。射程に収めたら確実に仕留めろと。

でもそれも前提条件が違う。

私は叢雲さんに守られた。何度も、何度も何度も。

だから私は自分の部隊を冷静に指揮し戦果をあげることが出来た。

叢雲さんはその度に褒めてくれた。

「よくやったわ！ 神通！」

嬉しそうに、まるで自分のことのように褒めてくれた。

その度に私は言いたかった。あなたのおかげですと。いえ、何度も言ってきたわ。

けど、叢雲さんはそう言ってくれなかった。

だから、私は那珂さんではなく、叢雲さんに認められたかった。あなたがいなければ今の私はいなかったと。

「じんつう……」

叢雲さんが声を震わせながら私を呼んだ。

「はい、なんでしよう？」

どうして、その子なんですか？

そう言いたいのを抑え、私は答えた。

「今のあなたならわかるはずよ。だから……この演習、あなたが見て、わかって！」 感じたものを！ 私に報告しなさい」

叢雲さんはそう言うと、鈴谷さんから離れ、顔を拭うと赤い目を私に向けた。

「そんなこと……」

私よりもあなたの方が得られるものが多いでしょう。

言えなかった。叢雲さんが私に向ける眼差しは、叢雲さんが那珂さんに向けるそれと同じ。

嫌だ。そんな目で私を見ないで。

「はい……わかりました」

意思とは別に、私の口は肯定した。

叢雲さんは黙って頷く。

こんな形で認められたくはなかった。

私はあなたの前に行きたかったわけじゃない。横に立って、一緒に戦いたかっただけなのだから。

――

那珂ちゃん……いえ、那珂さんは大きな弧を描きながら長門さんに接近した。

一直線に迫れば、長門さんの四十六センチ砲の餌食なる。

もし那珂さんが私なら、雷撃で仕留める。強化された長門さんに軽巡の砲が通るとは思えないからだ。それに、あの砲撃の精度がある。仮に、こちらが百発の砲弾を命中させなければいけないとしたら、長門さんはその十分の一……いえ、もしかしたら一発でもいいかもしれない。圧倒的不利を打開するには魚雷の全門斉射に賭けるしかない。

『接近戦か……よかろう』

長門さんの無線が聞こえる。

私には那珂さんが何を考えているのかわからなかった。

もう那珂さんは十分、雷撃を行える距離まで詰めている。けど、魚雷管を操作する素振りは見せない。

もっと不思議なのは長門さんが撃たないことだ。あの距離なら水平射で捉えられる。長門さんの精度があれば、撃つていてもおかしくない。もし私が長門さんなら、確実に仕留めている。

『ファンとの距離感。那珂ちゃん、すっごく大事だと思うの』

那珂さんはそう言うと、その場で回った。

目で追えない。けれど、その回転の間に魚雷を放射状に放った。

これで仕留められる。私はそう思った。

『お前の愛は私には届かん』

長門さんが艀装の前部に装着された砲を海面に向けて放った。

海面に大きな水柱が立つ。だけど、想像してものよりも高さがない。それに立った水柱一本が太い。

三式弾。散弾の様に放たれたそれは、那珂さんが放った魚雷を全て撃ち抜いたのだろう。

『大丈夫！　　本当の愛を貴方に届けてみせるから！』

那珂さんはまだ回っていた。

「……なんてことを……」

私は感心を通り越して呆れていた。

右足を軸にしまわり、左足を長門さんの方へ思い切り踏み込んだ。那珂さんの身体はギリギリまで捻転している。そして大きな水柱を立てた左足を今度は軸にして、その捻転を一気に解放させる。左足首、左膝、股関節、腰、右肩、右肘、右手首、右手の指、全てが同時に加速し、最高速に達したその時、その右手に持たれていた一本の魚雷が放たれた。

放たれた魚雷は、水中ではなく、空中を滑走した。長門さんが放った砲弾が作った水柱の中に一瞬で吸い込まれると、直後に大きな音がした。



『そんなに那珂ちゃんのこと嫌い？』

那珂さんが不満げな声を漏らす。

『ああ。いい歳してアイドルを自称する軽巡相手に負けるわけにはいかんからな』

四十六センチ砲の威力はガソリン満タンの軽自動車が爆薬を満載して音速を超えて飛んでくると聞いたことがある。けど、私には那珂さんの放ったそれはそれ以上の様に思えたが、長門さんは何事も無かったかの様に答える。

『そんな……あれでも無傷だと言うの……』

『神通ちゃん。まだまだよ』

私の独り言に、那珂ちゃんが答える。

『川内型は水雷戦隊旗艦。必中の距離まで詰めたなら、相手が戦艦だろうと沈めないといけないの』

キーンと言う音が更に甲高く大きくなった。那珂ちゃんは必要以上に主機を回している。

「那珂さん！ それ以上は主機が持ちませんよ！」

『那珂ちゃんツ!! 大丈夫。さつき叢雲ちゃんも言ってたじゃない。川内型の主機は自然吸気だって』

那珂さんはそう言えるやいなや、長門さんに真正面から突っ込んでいく。

長門さんは砲を構えなかった。握り拳を作り、ファイティングポーズをとっている。

『この長門に軽巡が肉弾戦を挑もうとは……』

『さつきから、この長門、この長門ってさ。私の方が艦娘になってから長いんだけど』

長門さんの顔が恐怖に歪んだ。ここからじゃ那珂さんの顔は見えない。けれど、あの長門さんが怖気付いた。

『恋の2ー4ー1ー1ってなんだか知ってる？』

那珂さんがそう言うのと、長門さんは引いた右の拳を那珂さんの顔を目掛けて繰り出した。もう那珂さんは長門さんの拳の射程に入っていた。

『2は「引く」』

那珂さんは右足を踏み込んで急制動をかけた。それによって左足が浮き、身体が大きく後ろにそれた。それにより、長門さんの拳を寸前のところで回避する。

『んなッ！』

『4は「踏み込む」』

振りかぶった左足を長門さんの目の前に叩きつけた。先程とは比べ物にならない程の水柱が立つ。その水柱に長門さんは飲まれた。ここからでも、長門さんが水柱に打ち上げられ、宙に浮いているのがわかる。

『1ーは……「立てなくなるまで殴る!!」』

那珂さんはそのまま先程魚雷を投げた要領で、右の拳を宙に浮かす長門さんに放り込んだ。

だけど、その一発だけではない。右、左、右と何発も。

空気を切り裂く様な音が何度も聞こえた。

長門さんはそのまま殴り飛ばされた。

『みんな、ありがとおく!!』

長門さんが海面に叩きつけられた。

那珂さんは右手の拳を天高く掲げ満面の笑みで、こちらを振り返った。

私も鈴谷さんも……そして叢雲さんもそんな那珂ちゃんに対し、何も言えなかった。

## 第17話

「海外艦？……ようは外人さんが来るっていうこと？」

司令から渡された書類を読む。艦名は片仮名で表記されているから読めるけど、本名の方は読めない。英語でないことだけはわかる。

「そうだ。そして、その教育係を君に任せたい」

「……私、横文字は苦手なのだけど」

うに濁点が入った「づ」すら気に入らない私にとんでもないことを言いつけた。私は横文字にいい思い出がない。まずLとR。どちらも行じやないか。正直、英語という科目には苦しめられた思い出しかない。

そんな私に外人さんの相手をしろと彼は言う。

「そんなに嫌そうな顔をしないでくれ……彼女は向こうでは有力な貴族の家系のお嬢様なんだ」

貴族ですって？

なんなのよ。それは。おしやれなフリフリの付いたドレスを着て映画に出て来るような豪華絢爛な屋敷で社交ダンスでもするのかしら？

それなら負けないわ。お立ち台の上で派手な扇子持って踊ってあげるわよ。デイスコなんて行ったことないし、行きたくもないけど。

「それで。そのお嬢様はいつ来るのよ？」

私は頭の中で自分が扇子を持って踊っている。その横でタキシードを着た男性とお洒落なドレスを着た欧州美女が踊っている。

あつ。駄目ね。全然勝ち目がないわ。

「今日の午後には来る手筈になっている」

「そうなの。わかったわ」

私は頭を切り替え、それまでにこなししておかなくてはいけない書類を考えた。

出来ないものは押し付けられればいから、私しか出来ないものを考える。うん。なんとか終わりそうね。私は一人領くと、やるべき書類に手を伸ばした。

その時、彼が深いため息をついた。

「叢雲さん。出来れば非番の子とお嬢様の部屋を掃除してほしいんだ」「うちの鎮守府の所属の艦娘は自分のことは自分でやれ。そう那珂ちゃんに叩き込まれているわ」

空き部屋はあるはずだ。それに埃が積もるほどは汚くない。

ここに配属された子が一番最初の暇な時間にやることは部屋の掃除、それから私物の配置と決まっている。私は彼の言葉を無視し、書類を書き始めた。

「数日前、大型トラックがここに着たことは覚えているかい？」

「知らないわ。噂には聞いてるけど、私はその日休みだったから外に出掛けていたし」

「大型トラックの荷台一杯の荷物が届いたんだ」

「そうなの。けど、鎮守府宛の荷物よ。いつものことじゃない」

「それが一人分の荷物だったんだ」

なかなかはっきり言わない彼に私はシビレを切らした。

「何よ。はっきり言いなさい。それでもこの司令官なの？」

私がつきりそう言うと、彼は大きなため息をつき、執務机から立った。

そして、私が座る秘書艦用の机の前まで来ると、深々と頭を下げた。

「お願いします。非番の長門さんと神通さん、摩耶さんを使ってお嬢様の部屋をセッティングしてください」

彼が口に出した子は皆非番の子たちだ。ただ、気になったのは今日、突然非番を言い渡された子たちばかり。

「待ちなさい。あなたは非番と言ったけど、それってもしかして……待機命令の間違いじゃない？」

「おっしやる通りです」

その人選には意味がある。力自慢の子しかいない。

長門は言わずもがな。神通は無駄に訓練をしている。摩耶は大型バイクを持ち上げることが出来る。前にバイクを整備している摩耶が持ち上げていたのを見たことがある。

「……私、今日はお昼を鈴谷と一緒に食べる約束してるんだけど」

「それは後日、お二人には特別休暇を与えますのでなんとか……」

私は目を見開いて彼を見た。私はともかく、鈴谷まで休みが貰えるとは思っていなかった。

「そこまで気を使うほどの相手なのかしら？」

「上の方はものすごくピリピリしている。ここに回されたのも、あまり前線に出る艦隊がないから。だそうだ」

「つまりは……お客様。ということね」

「そうなる」

「わかったわよ」

私はため息を吐くと、渋々席を立ち上がった。

幸いにも急ぎの書類はない。私のやれる範囲での話だけ。

「じゃあ行ってくるわ」

私は自分の机に置かれていた書類を全て執務机の上に置き執務室を出た。

――

言われた通り、長門と神通、摩耶を回収して私はお客様の部屋に向かった。長門と神通は待機命令を守り、部屋で待機していたが、摩耶は部屋で爆睡していた。揺すっても起きないので、神通に起こさせた。寝るのも仕事だと言い訳していたけど、呼ばれて起きないようじゃ話にならないと説教をされていた。

その途中、偶然非番だった山城を見かけ声をかけた。

「非番の日にも仕事をさせられるなんて……不幸だわ」

「そう言わないで。私から司令には言っというてあげるわ」

「それならいいですけど……」

山城は渋々といった様子でついて来てくれた。後ろで神通の圧力を感じたけれど、あえて何も言わなかった。

私がお客様がご使用する予定の部屋に入ると、その広さに驚い

た。

「広いわね……でも何をどうしろと言うのかしら？」

部屋は広いが家具は何もない。

私がここに着任した時、自室にはベッドと机は置かれていた。だがこの部屋には何も置かれていない。大型トラック一杯の荷物はなんだったのかしら。そう思いながら部屋を眺めていると、長門が思い出したように言った。

「まさか……倉庫からあれをここに持ってこいということか……？」

「何か知っているのかしら？」

「倉庫に取り扱い注意のシールが張ってる大きな段ボールがいくつもあるの……やっぱり今日は厄日だわ」

山城がボヤク。そこに長門が補足を加えた。

どうやら、荷物が届いた日、偶然非番だった長門と山城が倉庫に運びこんだそうだ。あの長門が珍しく頭を抱えている。

「やるしかないわね……とりあえず運びましょう」

「無理ですよ……この扉からじゃどうやっても入らない」

「……へッ？」

思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。長門と山城が言うには、一個一個が余りにも大きく、とてもこの部屋の出入り口からは入らないそうだ。長門と山城、二人掛かりでやっと持てる様な大きさに重さらしい。

面倒なことになった。これはすぐ司令のところに行って作戦中止を具申……いえ、こちらから命令すべきだわ。

そんなことを考えていると、それまで黙っていた神通が窓を指差した。

「あそこから入れられませんかね？」

確かにこの部屋の窓は大きい。だけど、ここは三階だ。どうやって上まで持ち上げろというのだろうか。神通の言葉に、長門と山城は顔を真っ青にした。言葉には出さないけど、そこまでの無茶をしろと言うのかと言わんばかりだ。

私は二人の反応を見てあることを思い出した。

「神通。それはあなたにしか出来ないわ」

「いくら私でも、そこまでは出来ませんよ」

海の上は走れても空は飛べません。困った様な顔をした神通が言う。

私は窓枠を外すと下を覗き込んだ。海に面しているけど、真下には道がある。      なんとか行けそうね。

「神通。あなたは人を集めなさい。出来れば力が強くて、度胸がある子がいいわ。長門と山城は暇な戦艦を呼んで倉庫からあそこに荷物を運びなさい」

私は窓から下を指差した。

長門と山城は私が指差した場所を見るとホツとしたような顔をした。

神通は不思議そうな顔をする。

「何を考えているのですか?」

「この編成に意味があったということよ。摩耶は私と一緒に来なさい。長門。どれぐらいで運び終えるかしら?」

「三十分ください。それまでには運んでみせます」

長門の言葉に、山城は目を見開いた。

「あなた、本当に言っているの?」

「ここには高速戦艦が二隻もいる。私達より速く運ぶはずさ!」  
「……………不幸だわ」

山城が絞り出した言葉はそれだった。

私にもわかるわ。高速戦艦はそういう意味じゃない。けど私は何も言わない。

「時間との勝負よ。神通、人を集めたらこの部屋で待機していなさい」  
「了解しました」

神通はそう言う嬉しそうに飛び出していく。その後ろに長門と山城が続いた。

「叢雲さん。あたしたちは?」

「まずは工廠に向かうわ。そのまま出撃ドックね。確か鈴谷がいるはずだから」

――  
工場に必要な物を回収し作業をしていた夕張を強引に誘い、出撃ドッグで訓練に出る準備をしていた鈴谷とついでに見つけた曙を特別訓練に誘う。

曙がいたのは幸運だったかもしれない。

「あの……どうして私だけ、艀装をつけさせられているのですか？」

艀装をつけた夕張が不安そうに私に聞く。

夕張の艀装には全て牽航用の装備が取り付けてある。

「あなたは責任重大だから。多分、摩耶や鈴谷……それに曙や私よりも」

「いったい何しようっていうのさ……」

工場で見つけた頑丈そうなロープを腰に巻いた鈴谷が私に言う。もう片方は私の腰に巻き付けてある。摩耶も同じようにロープを腰に巻き、もう片方は曙の腰に巻き付けてある。

「特別訓練。そろそろ時間ね」

私は屋上から下を覗き込んだ。長門と山城、それに金剛と比叡が一生懸命荷物を運んでいるが見える。まだ全てが運ばれているわけじゃないけど、こちらの作業中には運び終わるだろう。

私は夕張の艀装の右側に取り付けられた牽引用のロープを掴むと、そのまま屋上からダイブした。

「ちよ……ちよっと！」

夕張と鈴谷の声が聞こえたけど、私の体は地面目掛け落下している。

手に持っていたロープに引っ張られる。少し遅れて腰が引っ張られた。

「何考えてるのさ!!」

鈴谷が叫ぶ。

「そのままゆっくり降ろして頂戴!!」

「先に言っつてよね!!! 心臓止まるかと思ったよ!!!」

鈴谷が怒鳴り声をあげる。私は気にせず、ゆっくりと降りていった。



「曙ッ!! 何してるのッ?! 夕張のロープを持って早く降りて来なさいッ!!」

無事に地面に着地できた私は屋上からこちらを覗いている曙に声をかけた。

「どういうことッ?! 何これッ?!」

「いいから早く来なさいッ! 時間がないのよ!」

私は手に持っていたロープを長門たちが運びこんだ荷物にくくりつけた。解けないようにしっかりと。

「ちよつと! 摩耶! 揺らさないで!」

頭の上の方から曙の怒鳴り声が聞こえる。ゆっくり、ゆっくりと降りてきた曙は私を睨むように見た。

「いったい……」

「説明は後。持ってきたロープをバランスよく括り付けて」

曙は渋々、私の言うことを聞いた。

曙が荷物にロープを括り付けたのを見ると、私は屋上の三人に声をかけた。

「いいわよ! 引っ張りあげて!」

屋上から私たちを見ていた三人は把握したようだ。

荷物に括り付けたロープがピンと張り、ゆっくりと上がっていく。少し遅れて、私と曙の体が浮く。

荷物が外壁につかないように、支えてやると、曙も同じように支えた。

「やること先に言いなさいよね!」

「言ったら来なかつたでしょう?」

「もちろんよ!」

文句を言いながらもやってくれる曙はやっぱりツンデレね。

「曙さんッ……! 重いッ……!」

摩耶の絞り出す様な声が聞こえる。

「失礼ね! 荷物が重いのだよ!」

「叢雲……少し痩せる努力しよッ!」

「荷物が重いのだよッ!」



曙が顔を真っ赤にしながら支えている。私もきつと人のこと言えないでしょね。

あともう少し。神通の不安そうな顔がはつきり見えてきた。だけど、その時だった。

ブチツと言う音が聞こえたかと思うと、私の腕にとんでもない負荷がかかる。それと同時に体が落下する。

「ちよっ!!……叢雲ッ!!」

「ちよつと!!　　しっかり持ち上げなさいよッ!!!!!!」

私のかわりに曙が叫ぶ。

一瞬、落ちるかと思っただけど落ちなかった。けど腕も限界に近い。

もうダメかもしれない。そう思っていると支えていた荷物がフツと軽くなった。

「シヨーン　オーケーツ!?!」

聞きなれない声が聞こえた。

「叢雲よッ!　　おーけーよッ!」

「グーツトウ!!」

何を言っているかわからない。けれど、助かったわ。でもシヨーンって誰よ。

色々言いたいことはあったけど、無事に荷物を搬入することが出来た。

――

私と曙はそのまま搬入すべき部屋に窓から入り、やっと地に足つけることが出来た。

既に梱包されていた荷物は荷ほどきされ、大型家具は配置されていた。

「大丈夫ですか?」

神通が声をかけてきた。

「ええ……大丈夫よ……」

私は腰に巻いたロープを解き、そのまま床に座り込んだ。

高価そうな絨毯が引かれており、ふかふかで気持ちいい。このま

ま横になって寝てしまいたい。一息つき、壁に掛けられていた時計が目に入った。

「お昼、食べそこねたわ」

「ここにいるみんなもです」

神通が苦笑いをしながら答えた。

ん？ お昼がもう終わるといふことは……

「まずいわね……終了予定時刻を超えてしまったわ……」

「ところで、これはいったい何なんですか？」

「説明は後でするわッ！ 時間は稼ぐから早めに終わらせて撤収して頂戴ッ!!」

「ちよつと！ 話してから行きなさいよ！」

後ろから曙の声が聞こえたけど、私はそれを無視して執務室に走った。

――

お客様は既に執務室にいた。

司令の前に立ち、慌てて入った私に困ったような笑みを浮かべていた。

「遅くなりました。私は……」

「知っているわ。ムラクモさん……でしょう？」

綺麗な金髪の上にドイツ海軍の帽子を被り、グレーの制服を着た彼女はそう答えた。

司令が説明したのね。私は軽く身だしなみを整え、彼女と向き合った。なるほど、確かに貴族っぽい雰囲気はする。

「はい。叢雲です。本日からあなたの……」

教育係という言葉は不適切だろう。そう思い、いろいろと考えたけど、疲れているせいで面倒に感じてきた。そもそも、私がこんなに疲れているのも彼女のせいだ。

「今日からあなたの面倒をみることになった叢雲よ。よろしく頼むわ」

そう言うと、司令は驚いた表情で私を見ていた。文句なら後で聞

くわよ。

「よろしくお願いします……それと」迷惑をおかけしました」

金髪の彼女はそう言うとお辞儀をした。

「……いや、そんなかしこまらなくていいわ。日本語上手ね」

「日本語は難しかったです。特に敬語。でもこれが話せないといけな  
いと上官に厳しく言われました」

鈴谷に聞かせてやりたい。けど私のイメージしていた貴族のイ  
メージとはかけ離れている。私は腕を組んでしばらく悩んだ。

「私には無理して敬語を使わなくていいわ。けど、後で使わなきゃい  
けない相手だけ教えてあげる。あなた、名前は？」

「はい。私は……」

「敬語」

「……グーテントーク。私はビスマルク型戦艦のネームシップ、ビス  
マルクよ。よく覚えておくのよ」

急に雰囲気が変わった。言葉はものすごく上から目線で嫌な感  
じがする。けど、不思議と雰囲気は嫌な感じがしない。失礼なのがわ  
かっているうえで言っているような。言葉にすると難しい。

「まあ、頑張りなさい」

私も少しやり返してみる。少し無言の時間が流れたけど、同じタ  
イミングで笑ってしまった。

「それで、迷惑をかけたって何のこと？」

「引越しの荷物のことです。父上には余計なことはしなくていいと  
言っただんですけど……」

「敬語」

「ごめんなさい……しばらく慣れが必要だわ……私のせいで危険に目  
にあわせてしまったわね」

「……なんで知っているの？」

「叢雲こそ。どうしてあの時私の顔も見ずに私が来たことがわかつた  
の？」

「なんの話？」

「えっ？　あなたあの時、叢雲よって自己紹介してたじゃない」

「あの時？」

少し考えてみる。私が自分の名前を言ったのは……吊るされていた時だ。

「ああ、あの時ね。しょーん、おーけー、って言われたから、しょーんじゃなくて叢雲よって意味で答えたのだけど」

私がそう言うと、ビスマルクは少し考え、笑いだした。

「あなた、面白いわね」

「よくわからないけど……あなたのおかげで助かったわ」

「当然よ。このビスマルクに任せておきなさい」

「そう……じゃあ色々任せられるようになってちょうだい」

## プリンツGTI #00

その日の司令は変人だった。

まず始業してすぐのことだった。

「叢雲は今日の夜は暇かい？」

訳がわからないことを言い出した。私がここに来て那珂ちゃんに虐められている間も、秘書艦になってからも、夜のお誘いを受けたことはない。

それが、急にだ。今だ。

「はあ？……いや、空いていないことはないわ」

馬鹿正直に答えてしまった。

噂には聞いている。他の鎮守府では夜の執務をお相手することもあるそうだ。

うちにはこれまで全くなかったけど。

だって、この人、愛妻家だもん。ここに来た当初は那珂ちゃんから聞いた話だと酷かったらしい。二言目には惚気話。夜には帰りたいと駄々をこねる。

家がこの付近になってようやく落ち着いたらしい。

「そう……じゃあそのまま空けておいてくれ」

彼はそう言うとお機嫌で執務に取り掛かる。

今までそんなことはなかった。

私はペンを走らせながら考える。そういえばあのドイツからのお客様達。あれが来てから彼はおかしくなった。それまで取らなかった休みも取っている。

私は彼が執務に集中しているを見計らい、勤務表を見た。一見バラバラに見えて、法則性を見出した。彼の休みとグラーフの休みが重なっている。これは明らかにおかしい。

「ねえ。何をする気なの？」

艦娘になった時には覚悟はしていたつもりだ。

だって上官は男性。艦娘は女性ですもの。そういうことがあつ

てもおかしくはない。

けど、いざそういう場面を迎えると緊張するもんだ。私は自分の声の上擦っているのが自分でもわかった。

「ん〜…そうだね。叢雲も興奮して満足させられる様に頑張るよ」

こいつ。昼間つからとんでもないこと言いやがった。

当然、その日の仕事が手につかなかったのは言うまでもない。

――

その日の夜。私は待ち合わせを言い渡された鎮守府の駐車場に来ていた。

ちゃんとシャワーも浴びた。一応、持つものも持った。

私の心臓の鼓動がうるさいことを除けばなんら変わらない。ただのデートだ。

「ん？ ムラクモじゃないか。出掛けるのか？」

突如後ろから声を掛けられ、思わず背筋が伸びる。この声には聞き覚えがある。

「グラーフ？ あなたこそどうしたのよ？」

振り返るとやはりグラーフがいた。ジーンにポロシャツとラフな格好をしていた。

「いや。アドミラルに誘われてな。全く、物好きには困ったものだ」

グラーフはそう言うと、首を横に振った。けど私にはわかる。その顔はまんざらでもない。

「そう…私も誘われたのよ」

この子と一緒に。なかなか変な趣味をしている。

グラーフは驚いた様に私を見ていた。そしてすぐに私の肩に手を置いた。

「なら、今すぐにでも手を引くべきだ」

カチンときた。私の方が彼とは付き合いが長い。

「いえ。付き合いわせてもらおうわ」

睨む様にグラーフを見る。私の予想では睨み返されると思った。けど、彼女はどこか私に期待している様な。そんな眼差しを向けてい



た。

「そうか……じゃあいつしよに楽しもう」

グラフは私の肩をバンバン叩くと、歩きだした。

「すまない。待たせたね」

やっと司令が現れた。私はその格好に目を丸くしていただろう。

「何よ……それ……」

彼が来ていたのは緑のツナギ……でも高価なツナギだ。

「気合い入れないと彼女に置いていかれるんだ……」

彼はそう言うのと頭を掻いた。

「大丈夫。今日は勝つから」

彼はそう言うのとキョトンとしている私の手を引いた。

――

司令に半ば強引に彼の車に乗せられた。

これが元々はデートカーだったらしい。私の知っているシートベルトは肩からゆ〜つと伸ばして、カチンとやるあれだ。けど、彼にされたシートベルトは両肩から伸びたものにお腹の上にかチン、カチンとやる見たことが無いもので、体が動かしづらい。

彼は手袋をはめると真剣な眼差しでハンドルを握った。

正直恥ずかしい。緑のスポーツカーを緑のおじさんが運転している。そして、その横に私が乗っている。

「何をやる気よ……」

ここまで来て、何もわからなほど馬鹿じゃない。この車の目の前に今度は真っ白の高級外車だったものが走っている。

おかしいわね。私の知っている車に、後ろのガラスに斜めに走るそれは見たことないわ。

「今日負けたら彼女の言うことを聞かなくちゃいけないんだ。だから気合いを入れるために連れてきたんだ」

彼はそう言った。

ああ……もう馬鹿ばっかり!!

「そういうのは私じゃなくて奥さんでしょうに!!」

「彼女が君を御所望でね」

彼女。彼はそう言い、前の車を指差した。私は頭の中で一人の艦娘が思い浮かぶ。

「グラーフ……？」

「そう。彼女らしいよね」

彼はそう言うどゆっくりと息を吐く。これまで見たことがないほど真面目な表情だ。

彼女らしい。そう言ったのには理由があるだろう。

あまり詳しくない私でも知っている。あのエンブレム。あれは航空機のプロペラをモチーフにしたものだ。

「いったいなんでこうなった……」

私は呆れに呆れ、何も言えなくなつた。

――

私が連れてこられたのはある山の山頂。

前的高级外車が止まり、彼もその後ろに車を止めた。

前的高级外車からグラーフが降りてきた。彼女は私の方のガラスを叩くとニツコリと笑つた。ドアを開けて、彼女を見る。

「良ければこっちに乗らないか？　万が一があつた時、こっちの方が安全だと思うが……」

私はそう言われ、司令を見た。彼は苦笑いを漏らしている。

「じゃあそうさせてもらおうかしら……ちよつと。外れないのだけど」

シートベルトが外れない。どうやって外すのよ、これ。

グラーフに外してもらい、ようやく外に出れた。

「アドミラル。あなたが先行して欲しい。私が付いていけなければ私の負け。だけど、私が付いていければ私の要望は飲んでもらうぞ」

「別に君に勝つたと思つた事は一度もないのだけど……」

「私のはつきりと負けを認めている。あなたはすごい人だ」

「何を言っているのよ……」

私にはなんのことかわからない。二人だけの世界に入つてしまった。

「……」

グラーフの車に乗り込み、今度は司令の車の後ろを走っている。

正直、彼もいい歳だ。それなのに、ライムグリーンの車に乗っているのはどうかと思う。

「性能だけで言えば、あのシルビアよりこのM2の方が上なんだ」

徐に彼女はそう言った。それもそうだろう。彼が乗っているあの車は随分昔の車だ。

「それがどうしたのよ?」

車の性能。そんなことを自分が運転していて気にした事はない。

音や振動が気持ちいいとか、そういう話は彼にしたことがある。

けど、彼はすつごくニコニコしながら私の話を聞いているだけだ。

「けど、付いていけないんだ。同じスピードで入っているのに、彼の方が先に抜けてしまう」

意味がわからない。グラーフが真面目な顔をして馬鹿な事を言っている。

「普段のあなたからは想像がつかないわ」

「ムラクモがどう思っているかはわからないが、私もビスマルクもプリンツも、ムラクモとアドミラルのことは信頼している……始まるぞ」

グラーフが意味のわからないことを言い出したと思うと、前のライムグリーンの車がハザードをたいていた。その直後、凄く加速していく。グラーフもアクセルを踏み込んだ。私の体がギョツとシートに押し付けられる。

「ちよ……ちよつとツ!!」

「あまり喋らない方がいい。舌を噛むぞ」

この大バカ者達はツ!!

私はシートベルトを掴んだ。

「ちよツ……ブレーキ!!!」

私の知らない世界だった。

前の車がスピンする。それに合わせてグラーフもブレーキを踏

んだらしい。だけど腰が横に滑る。もう駄目だと思った。

けど、前の車はそのまま曲がつていく。グラーフも何事も無かったかの様にハンドルを逆にきる。

景色が流れる。それは横のガラスでしか知らない。

けど、目の前のガラスでは景色が流れている。その中で当たり前の様にまっすぐ走ろうとするライムグリーンの車には違和感を覚えた。

鬱蒼とした林が消え、道路が現れる。車はその道をまっすぐ走り出した。

「ぼ……バツ……バツカじゃないのツ!!」

私はグラーフにそう叫んだ。

けどグラーフは楽しそうに笑っていた。

「どうやら、今日のアドミラルは絶好調らしい。私も気合いを入れないとな」

グラーフが笑うのは珍しい。

訓練中も普段も、あんな無邪気に笑うのは珍しい。

美人だとも思う。私みたいな日本人が敵わないとも思う。

こんな状況じゃなきや素直に見惚れてたでしようね!!

「いいから速度を落とさなさいよツ!!」

「それじゃあ付いていけないじゃないか」

また次の曲がり角が来る。グラーフは先にブレーキを踏んだのでしよう。前の緑がグツと離れた。ブレーキランプが光ったと思うと後輪を滑らせていた。その直後、また腰がグツと動く。

「すごいな……」

グラーフがぼやく。凄いののはあなたも凄いから早く終わって欲しい。

——

この地獄はいつまで続くのだろうか。

「大丈夫だ。私を信じろ」

喋らなくなった私にグラーフが声をかけた。その直後だ。

「見えないツ!!」

私とグラーフの声が重なった。

前の緑が横を向いたと思ったら、前のガラスが真っ白になった。

「見えないぞー！ 何も見えないぞッ!!」

こんな状況にもかかわらずグラーフは笑っていた。

「何が楽しいのよ……」

こんな非常識な環境に慣れてしまった私がいる。

「これはやられたなッ！」

グラーフがハンドルから手を離している。そして拍手している。

この子、真面目そうで頭のネジが緩んでいる。

視界が晴れた時には緑はいなかった。

「ううくん……これはやられたな」

「負けたの？ なら、ゆっくり行きましょう」

私はホッと胸を撫で下ろし大きく伸びをした。だけど、グラーフはそんなこと気にしていない。

「アドミラルには負けたが……ムラクモを少しでも楽しませてあげよう」

「……へッ？」

グラーフはそう言うと、ハンドルを握りなおした。

やる気満々。そう言いたげな表情をしている。

「マッ……待ちなさいッ!!」

その直後、急激な圧力が私の腰にかかった。

――

疲れた。

私が車から降りれたのは山の麓にあるコンビニの駐車場だ。

腰が痛い。それ以上に首が痛い。

這い出る様に出た私をグラーフは親切に支えてくれた。

「だから言ったじゃないか。叢雲はこつち側じゃないって……」

「すまない……嫌な思いをさせてしまったな」

ようやく普通のテンションに戻ったグラーフを見た。

どこか申し訳なさそうな顔をしている。

「それで……あなたの要望ってなんなのよ……」

私はグラーフを見た。そんなのがきっかけで私が巻き込まれている。

グラーフは私から視線を逸らすと空を眺めた。

「なんでも、君を一日貸して欲しいそうだ」

「はあ？」

「おツ……オイツ!!」

司令が代わりに答えた。

「グラーフ。何度も言っているが、私には妻がいる。叢雲とはそういう関係ではない」

「何を言っているのよツ!!」

私が叫ぶ。しかし、それ以上に不満を漏らしたのはグラーフだ。

「いや。アドミラル。気を使わなくていい」

私はグラーフの豊満な胸を叩いた。別にそこを叩くつもりはなかったけど、身長差で偶然そこを叩いただけだ。

突然、そんなところを叩かれたのでグラーフは思わず胸を抑え、私はグラーフから解放された。涙目になったグラーフが私を見る。

「うちの司令はそういうことしないわよ！　そもそも、週に五日も奥さんのいる家に帰るぐらいなのよ!」

「しかし、ムラクモは遅くまで執務をしていると……」

「これが家に帰るから残った書類仕事をしているのよ!!」

「そうだったのか……てつきり執務と言うのは夜の……」

「言わせないわよー」

私は叩いていない、もう片方の胸を叩いた。

柔らかいけど。ハリがある。いい音がした。

「む……叢雲さん……それぐらいに……」

両胸を抑えてうずくまるグラーフを見下しながら私は肩で息をしていた。

「それで、私を借りて何しようとしたのよ」

私は司令にそう尋ねた。

「なんでも、プリンツが日本観光をしたいと言ってるんだけど、グラーフはこの国ことはわからない。だからお願いしようと思ったが君と

神通が厳しく指導するせいで恐怖感を抱いているらしい。鈴谷や摩耶が訓練以外じゃ優しいと言っても聞く耳を持たないそう。そこで、グラーフから……」

「そこから先は私が話そう。そもそも、アドミラルに勝てるとは思っていない」

痛みを堪えたグラーフが立ち上がった。

そもそも、今日もグラーフが司令に競争で勝つ気はなかったらしいが、いつも手を抜かれて悔しいので私を引き合いにだしたらしい。司令もそんな気はしていたし、負けてもいいと思っただけ、負けず嫌いが出て気合いを入れる為に私を巻き込んだらしい。彼はもし自分が負けなければ私が解体されると必死に思い込んでいたらしい。嫌な気持ちもしないし、嬉しいけど、二人の趣味に自分を巻き込んでほしくないと思っただけ。

そして、グラーフ曰く、改造車を乗り回す司令の秘書艦である私がアバルトに乗っているのを知り、同じ人種だと思っただけ。グラーフ自身、私と仲良くなりたかったらしい。けど、それは見当はずれだ。私はそういうことにはあまり興味がない。摩耶の方が話があるでしょう。私がそう話すとグラーフは目を輝かせた。

少し話が逸れた。

グラーフはビスマルクとプリンツの上官として日本に来ている。ビスマルクは先に着任しているからいろいろ慣れてはいるけど、プリンツは慣れないことだらけで大変らしい。それに加えて、同じ重巡である鈴谷や摩耶はかなりの練度に達している。同じ艦種なのに出来ることが違う。それに焦りを感じている。

「オイゲンはああ見えて真面目な子だ。自分が足を引っ張っているのではないかと不安に思っている。少し張り詰め過ぎている」

グラーフの表情が曇った。

「誰でも、最初は不安に感じるわ……あの子もそうだった」

あの子。鈴谷を思い浮かべる。

そういえば聞いたことがある。ドイツの人間は規則に厳しいと。そんな子がうちの優柔不断提督……彼女らしく言うなら優柔不

断アドミラルの下で働くのは不安を覚えるのも当たり前のことだ。私は司令を見た。頭を掻き、不安そうに夜空を眺めている。

「……ねえ、グラフ」

私はグラフを見た。まだ思いつめたような表情をしている。

「一旦、プリンツを私に預けてみない？」

「叢雲にか？」

「少し語弊があるわ。鈴谷に任せてみようと思う」

グラフは少し考え込んだ。

「どうするつもりだ？」

「プリンツは昔の鈴谷に責任感を足したような性格だわ。だからあの子に任せようと思う」

責任感。

正直いえば、今の鈴谷にそれがあっても危うい。

けど、責任は鈴谷も全うしている。

戦艦の護衛につけばしっかり守りきる。戦隊を率いれば敵に大きな打撃を与えている。

そんな鈴谷が初めて自分から力を欲したのは最近のことだ。

「……ねえ、グラフ」

私はポケットからタバコを取り出した。

スイッチを入れ、吸い込み口から大きく息を吸い込む。ニコチンが身体に走る。いくらか思考もまとまった様に思えた。吸った空気は吐かなくちゃいけない。私は大量の水蒸気を吐きながらまとまった思考をグラフに伝えた。

「秘書艦権限であなたに命令するわ。私に代わって鈴谷の面倒をみなさい。その代わり、私がプリンツのフォローをしてあげる。あなたが鈴谷に教えた事はそのままプリンツにつたわるでしょう。間違えないですよ」

私はもう一口、大きく吸い込んだ。

迷えることが羨ましい。

私は迷えなかった。いつも那珂ちゃんに限界まで追い込まれていた。



けど、それは私が駆逐艦の艦娘だからだ。

敵の攻撃が当たれば死ぬ。けど艦娘なのだから戦果はあげな  
きやいけない。

「那珂ちゃんの言いたいことがようやくわかった気がするわ……」

今は何も教えてあげない。

私は何をわかったのか、あなたたちで考えなさい。

## 第19話

いつもとは違う那珂ちゃんが私を訪ねて来たのは昨日の夜。

昨日は朝に急な出撃があつて、帰りが遅くなつたから入渠してそのまま自室へ戻つた。

だから昨日は執務室に顔を出していない。

「明日は那珂ちゃんと外出つてことになつてるからね！　朝七時に

正門で！　寝坊しないでね！」

あなたに誘われて寝坊なんかできるわけないじゃないの。

私はそう思ったけど口には出さなかつた。了承して、そのまま寝た。

そして次の日の朝。言われた時間の三十分前には正門に着いた。

ワンボックスの車の横に那珂ちゃんは既にいて、私を見るなり何とも言えない表情をした。

「……そっか！」

何か思いついたような顔を見ると、今度は申し訳なさそうな顔に変わった。

「ごめん！　これからお台場に行くの！」

お台場。私はこの言葉を聞いて背中に嫌なものが走つた。

普通、その地名を聞けば女子なら心踊るだろう。お洒落な街。楽しい所もいっぱい。

けど、私達、東京出身の艦娘は違う。

お台場には艦娘用の学校がある。再開発地区に建てられていて、一般人はまず入れない。それだけじゃない。物以外の出入りが出来ない場所だ。

「……着替えてくるけど、もしかしたらお腹痛くなつて戻つてこれないかも」

私は踵を返した。やけに鎮守府の建物が遠く感じる。

歩き出そうとした私の肩を何かが力強く掴んだ。

「待　っ　て　る　か　ら　ね　！」

「はいはいー」

私は駆け足で鎮守府に戻った。いや帰りたかった。帰ったらもう出たくない。

急いで制服に着替えたけど、出るのはため息ばかりだ。

――

よく、ハイエースで幼い子供を連れ去らう、なんて言うけど、私も那珂さんもいい歳だ。

それに今ハンドルを握っているのは那珂さん。

運転代わりましようかって言ったら、叢雲ちゃんはわざと事故おこしそうだから大丈夫って言われた。その手があったかと悔やんだ。

いつもはおしゃべりな那珂さんが珍しく黙っている。近くにつれ、那珂さんのため息も増えた気がした。

「それで……お台場に何しに行くの？　二人で観覧車に乗るってわけじゃ無さそうだけど……？」

「那珂ちゃんもそうしたかったよ。けど、先輩から呼び出されちゃってね……」

それにどうして私まで付き合う必要があるのか。

もしかしたら、私の大いなる戦果を評価されて特別講師で呼ばれたんじゃないか。なんて淡い期待もしている。でもだったら直接私に言われるはずだ。那珂ちゃんが絡んでいるあたりその希望は薄い。

いろいろな希望的推測を試みる。考えていることが現実になったらどれだけ楽なことか。

「いやね。ポロツと叢雲ちゃんの話をしたら連れてきなさいって……」

いろいろ考えているのを見透かされ、那珂さんが言う。

つまり、私のその大先輩が用がある。那珂さんの先輩。きつとろくでもない。

いえ、失礼ね。きつと素敵な方なんでしょう。

めいっばい空気を吸い込んで、全てため息で吐き出す。

「そんなに嫌がると先輩もおこ………悲しむよ」

苦笑いをもらす那珂さん。今怒るっていいかけたわよね。

――  
入学で一回、卒業で一回、そして今回で三回目の門を通る。守衛さんに身分を明かして、積み荷を見せて通してもらおう。最後の希望。守衛さんに止められる。もダメだった。

入学する時と違って色々な苦しみを知っているからこの門を通るのがとても苦痛に感じる。

嫌ね。本当に嫌。

那珂さんは車を訓練場の中に入れた。

訓練場に行くまで、少し中を走ったけど、昔と何も変わらない。けどおかしな点がある。

それはここにいる子が誰も外を出歩いていない。今日は日曜日で授業はお休みのはずだから庭を散歩したり、自主的に走ったり、訓練したりしている子がいるはずだ。

それが誰一人としていない。宿舎の方に目を向けると、カーテンは閉まっているが中に人がいるのがわかる。それが全ての窓で。カーテンの隙間からこちらを見ているような気もする。

すごく不気味ね。

私が車から降りると、横に一般道では滅多に見られない軍用の装甲車が停まっていた。

けど、何故かナンバーは普通車用のものが付いている。

「あらら……先に到着されてた……」

那珂さんはバツの悪そうな顔を見ると、私の方を見た。

「何か言われたら、私が道を間違えたって言ってるね」

那珂さんが自分のことを私って言った。

ちよつと待って。それほどの相手なの？

「ほら、用意して」

那珂さんがトランクを開ける。さつき守衛さんに中身を見せた時に知ったけど、中には私と那珂さんの艀装が積まれている。

私は艀装を背負い、薙刀を持つ。やけに重く感じる。

艀装をつけ終わると、那珂さんの後ろについて小走りの中に入る。

地下にある、水上戦闘用の訓練場の扉をあけると、天龍型の二人が

ベンチに座って待っていた。

「すみません。遅くなりました」

那珂さんが二人の前で直立不動で報告をする。私もその横に立って謝る。

「まだ待ち合わせの時間じゃないから大丈夫よ。天龍ちゃんが無駄に早起きして無駄に早く出たから随分前に着いちやったのよ」

ふわふわした雰囲気をしている方、天龍型軽巡洋艦二番艦の龍田さんがあくびを噛み殺しながらそう言う。その横でガラガラした右目で私を見る一番艦の天龍さん。天龍さんは視線を私から那珂さんに移した。

「よう！ 久しぶりだな！」

「天龍、久しぶり……まだその眼帯してるの？」

「別にいいだろ。両目で戦うことに慣れてないんだ」

あら？ 私はてつきりお二人が那珂さんの先輩だと思っていたわ。

じゃあ龍田さんだけが那珂さんの先輩ってことかしら？

「あなたが叢雲ちゃん？」

「はい！ 吹雪型駆逐艦五番艦の叢雲です！ よろしくお願いします！」

私は深々と頭を下げた。九十度の最敬礼。艦装を背負っているから腰が痛いけど、怒られるよりはマシ。

後頭部に手が置かれた。

ああ……やっぱり怒られるのね。何がいけなかったのかわからないけどそんな気はしてたわ。だって昔はよく那珂さんに難癖つけられて怒られてたもの。

「いいのよ。そんな畏まらなくても」

私の後頭部に置かれた手は優しく動いた。つまり、今私は頭を撫でられている。

「ほら、顔をあげなさい」

そう言われ、顔をあげる。すごく優しく微笑む龍田さんがいる。きつと、これが普通の人なら優しい人なんだと思うだろう。けど私

の受けた印象は違う。

ただ怖い。得体の知れない恐怖。目も口も笑っているのに怖い。「随分と那珂に指導されたのね……そんなに警戒しなくても大丈夫よ」。理不尽なことで怒ったりしないから」

この人はやけに語尾を伸ばす。なんとなく、それで気が緩みそうになるけど、きつと気が緩んだら怒られる。私は警戒を強めた。

「もお……そんな怒らないのに。私達は天龍型軽巡洋艦。私が二番艦の龍田で、こっちが天龍ちゃん。よろしくね」

「よろしくな！　ちなみに俺と那珂は同級生。龍田が一個上だ」

「よろしお願いします」

私は天龍さんにも頭を下げた。

天龍型軽巡は知っている。何度か写真で見ただこともあるし、これまで上げてきた戦果についても多少は知っている。

那珂さんの世代の人は基本的に腕っ節が強い。何故かと言えば、元自衛官が多いから。私や曙の時ぐらいから適正のある一般人も艦娘になれるようになったけど、それ以前は肉体的に強い女性から選ばれていた。

そして、今ほど艦娘の戦術や戦い方が確立されていたわけじゃない。砲撃も雷撃もそれほど高い技術があったわけじゃない。それでどうやって戦っていたかと言えば、殴る、斬るといった接近戦が多かったと聞いている。

もちろん、それだけじゃないけど、天龍型の二人は特に接近戦が強かったらしい。

「じゃあ叢雲ちゃん。いらっしやうい」

龍田さんは私の艦装とは違い、色々な機能が付いていそうな雑刀を手に取り訓練用のプールに浮いた。

「那珂。俺らは組手でもしようぜ」

「天龍が？　剣道じゃ勝てなかったけど、組手なら負けはないよ？」

「水の上ならどうよ。踏ん張れないだろ」

「それでも私の圧勝かな？　　叢雲ちゃん！　　怪我だけはしないでね！」

天龍さん、那珂さんに続いて私もプールに足を踏み入れる。

私のことをニコニコしながら見ている龍田さんと向かいあった。

「よろしくお願います」

懐かしいわ。昔はここに浮くだけでも大変だった。よくひっくり返ってびしょ濡れになったものね。

「しばらく好きにうち込んで来ていいわよ」

龍田さんはそう言って私と対峙した。けど構えてすらいない。本当に打ち込んでいいのか、躊躇していると、龍田さんは優しく微笑み私を見た。

「どうした〜?」

「じゃあ……いきまっすッ!」

とりあえず、正々堂々、正面から薙刀で切り掛かってみる。頭の上で回転させて遠心力を加えて上から斬る。やっぱり手を抜けばよかった。そう思った直後だった。

一瞬で捌かれる。それも片手に持った薙刀で。思わず龍田さんの顔を見てしまった。すごく不満そうな顔をしている。

「……本気で来ていいわよ〜?」

水面を蹴って距離を取る。

「……わかりました」

薙刀を握りなおして、主機の回転数をあげる。

それでも龍田さんは構えない。さっきのでわかっている。技量は圧倒的に向こうの方が上。だけど、そこまで露骨にナメられるとカチンとくるものもある。

回転数がギリギリまで上がった。私は何も言わず、飛び出した。

龍田さんに対して少し斜めに入る。そして通りすぎる直前、一気に龍田さんの方に切り返す。上半身がそれまで進んでいた方向に持っていかれそうになるけど下半身で踏ん張る。下半身と上半身が捻れて、そのまま左足で踏み込んで……一気に腰を回す。捻転を利用して、薙刀を加速させる。そこに私の体重も乗せた。

今の私が出せ得る力全てを使った一振り。

これなら両手で受けるしかないでしょう!

「……はあ」

小さなため息が聞こえた。

龍田さんは薙刀を持っていない手を出すと、そのまま私の薙刀の柄を掴んだ。

一瞬、何が起きたかわからなかったけど、私はそのまま水面に叩きつけられていた。痛むお腹をおさえる。そのまま投げられたのだと理解する。

「叢雲ちゃん。私は本気でうち込んできてって言ったのよ？」

だから打ち込んだじゃない！

そう言おうかと思ったら、龍田さんは薙刀で私の艀装を突つついた。

「砲も魚雷もあるのに、どうして使わないの？」

そういう意味だったの……撃ちこんでこいってこと。

それは申し訳なかったわ。お腹をおさえて立ち上がる。

「あら……やっという顔になったわね」

そんなことを言われても、私が今、どんな顔をしているのか自分でもわからない。

けど、はつきりとわかることがある。

私は自分ができることを馬鹿にされるのが嫌いだ。

「ここからが私の本番よ」

――

砲撃に雷撃。それに斬撃。この三つでようやく龍田さんを構えさせることが出来た。

けれど、隙が一切ない。

予想はしていたけど、龍田さんも当たり前のように砲弾を斬る。魚雷も簡単に避けられる。斬撃なんて簡単に捌かれる。

だから、私は考えた。龍田さんが唯一避けなきやいけないものを当てればいいのか。簡単なことだわ。

砲撃をしながら距離を詰める。その間、龍田さんは薙刀を振り回さなきやいけない。当然よ。私の砲撃ですもの。全て命中弾よ。

薙刀の間合いに入った。振り抜いてガラ空きになった脇腹めがけ



て薙刀を振るう。これも全身全霊の一振りよ。でも、見切っているのでしょうか？ 両手持ちした薙刀にあっさり捌かれたわ。

けど、これで体勢は崩したわ。薙刀の間合いは刀と違って長い。それが薙刀同士なら倍よ。安全な距離。

酸素魚雷をくらわせてあげるわ!!

五門同時斉射。この近場で放射状に撃ったから逃げ場はないわ。

「あらあ〜……」

これで私の勝ちね。一方的に私が攻撃していたから平等だったとわ言えないけど。

「そんな顔して……まさかコレで勝ったつもりでいるの〜？」

龍田さんの間の抜けた声が聞こえる。避けられるわけないじゃない。いい。

その時、龍田さんの足元に大きな水柱が立った。

おかしいわね。爆発音が遅れて聞こえてきたわ……それに全部が爆発した音……どれか一本に当たればいいと思ったのだけ。

私の顔に人影がかかる。思わず見上げてしまった。

飛んでる……薙刀を振りかぶった龍田さんがこちらに飛んでくる。

「ツー！」

「あら〜。声も出ませんか〜？」

龍田さんは更に振りかぶる。

捌いてやるわ。そんな大振りの太刀筋なんて読めるわよ。

私が薙刀を握りなおすと、龍田さんの両肩から先が消えた。

消えたんじゃない。見えないツ！

そう思うと同時に脳天にゴンつと響く鈍い音。少し遅れて激痛が走った。

「みゃうツ!!」

「あら〜！ みゃうつて……叢雲ちゃんやウサギさんじゃなくて猫さんだったのね〜」

龍田さんが面白そうに笑っているのがわかる。

もの凄く痛いけど、遠慮のしらない鈴谷や、那珂さんほどじゃない。多分当たる直前で力を抜いてくれたんだとわかる。

でも私は遠慮なく刃がついた方を振り回していたけど、龍田さんは柄の方で叩いてくれた。もしあれが刃がついた方なら、私は今頃縦に真っ二つにされていた。

「……悔しいわね」

思わず唇を噛み締めて俯いてしまう。

痛む頭を撫でられた。正直、触られると痛いんだけど。

「筋は悪くないわよ？　でもね出来ることを極めていても意味がないわよ？」

「どういうことよ……ですか？」

いけない。先輩だった。

龍田さんはそんなことを気にせず顎に手を当てて考え始めた。

「あっ♪　その耳で白刃取りしてみるなんてどお？」

無茶を言わないで欲しいわ。そんなことをしたら確実に艤装が壊れる。

「冗談よ……それに……」

龍田さんは覗き込むように私の顔を見た。さつきと変わらない笑顔で。

「確実に仕留める気でいったから、一撃目を受けようとした時点で叢雲ちゃんの負け♪」

悔しいけど龍田さんのいう通りね。太刀筋が全く見えなかったものの。

でも、どうやってあんなに飛んだのかしら。

最大戦速から勢いを使って飛ぶのは私も出来るけど、あの時龍田さんはそんなに速力は出ていなかった。水面は地面と違って足を押し返さない。

私は足で水面を踏んでみる。足の艤装の浮力で押し返されるけど、柔らかいベッドを踏んでいるような感じ。

「どうやって飛んだか気になるの？」

「ええ……はい。気になります」

頭を叩かれたせいでどうも気が回らない。

「これで水面を思いつき叩くの♪　そうすると反動で体が浮くわ。

棒高跳びの容量ね」

正直、龍田さんが何を言っているのか私には理解出来ないけど、言われた通り薙刀で水面を叩いてみる。確かに押し返されるけど、体が浮くほどじゃない。

「よくわからない？　じゃああの二人を見てごらんささい」

龍田さんはそう言うのと組み合っている那珂さんと天龍さんを目指した。

しばらく見ていると、那珂さんが天龍さんの一瞬の間をついて、一本背負いをした。天龍さんが那珂さんの背中の上で一回転したかと思うと、背中から水面に叩きつけられてバウンドした。

見ていて痛々しいわ。

「水面って急激な力を加えると固くなるって那珂から教わらなかった？」

そういえばそんなことを那珂さんが言っていた気がする。

それに、前に神通を投げた時も神通はバウンドしていた。

「はい。教わりました」

「その原理を使うのよ」

なるほど、原理はわかったわ。けど出来るとは言っていないわ。

「叢雲ちゃんと今日会ったのも私から何かを得られればいいと思ったからなの。叢雲ちゃんは駆逐艦としてかなりの練度だから今更私に何か教えることは出来なけど……」

龍田さんが言いかけた途中、背中に悪寒が走る。

「私の指導した那珂に指導されて、他の誰かに遅れを取るなんて……私、嫌だなあ……」

変わらない笑顔で、私にそう言うけど雰囲気は全然違う。

やっぱり、那珂さんの先輩よ。根っこの部分は一緒よ。

私は那珂さんに教わったけど、こうはなれないわ。

「戦艦の砲撃ぐらい、叢雲ちゃんならどうってことないでしょ？」

この前の演習のことを言っているのね。

けど、あれは那珂さんが投げたものであって……

駄目。怖くて口が動かないわ。

「あら〜？　怖くて声も出ませんか〜？」

その通りよ。

あまりのプレッシャーに思わず後ずさりをしてしまう。けど、手を掴まれた。

「続けましょ♪　絶対に逃がさないから〜♪」

その後は龍田さんの攻撃を凌ぐので精一杯だった。

那珂さんの訓練が懐かしいわ。那珂さんは理不尽だったけど、龍田さんは容赦がない。

辛いとか、キツイとか、そんなんじゃない。

痛くないように頑張るんじゃない、生きるために必死になる。

結局、龍田さんが疲れたと言ったのは日付が変わったところ。

龍田さんはキラキラで。私はボロボロ。那珂さんと天龍さんはやつと体があつたまってきたと言っていた。

もうこの人たちとは会いたくないわ。

けど収穫もあった。私も薙刀で飛べるようになったし、他のこともいくつか出来るようになった。

「仕方ねえ、帰るか。龍田も明日改装があるし」

「そうねえ……じゃあ叢雲ちゃん。また時間がある時に会いましょう。改二になって今度はぜえええったい、このプールに沈めてあげるからね♪」

龍田さんが出ていく。

もう二度とお会いしたくないわ。

「えっ？　随分と長いことやってると思ったら、叢雲ちゃん、一回も轟沈判定出てないの？」

「おいおい、マジか。てつきり二、三回沈められて、それでも龍田がシゴいているのかと思ったら……」

「どういうこと？」

「天龍ちゃん！　帰るわよ〜！」

「あッ……ああ！　じゃあな、那珂。叢雲、今度は俺の相手もしてくれ！」

天龍さんは足早に龍田さんの後を追っていった。

「帰ろっか……」

「ええ……帰りは運転するわよ?」

「いいよ。叢雲ちゃん、今度は素で事故りそうだから」

「――」

「本当に一回も轟沈判定だしてないの?」

「ええ。出してないわ。龍田さんも手加減をしてくれていたし。最初の一撃なんて、私、真つ二つにされていたわ」

「それは見てた。叢雲ちゃん、油断してたからね」

那珂ちゃんと話しているけど、眠気がすごい。

終わった安堵感と疲れと……けど那珂ちゃんに運転させて寝るわけにはいかない。

「天龍も那珂ちゃんも、すぐに自分たちの番だと思ってたからね。さつきも天龍が言ってたけど、叢雲ちゃんが龍田さんの機嫌を損ねてずっとシゴかれてるのかと思ってたよ」

「シゴかれてたのは変わらないわ……正直那珂ちゃんの訓練よりもキツかったわ。本当に殺されると思ったわ」

「多分、叢雲ちゃんが頑張るから龍田さんも機嫌が良かったんだと思うよ。那珂ちゃんも天龍も、昔訓練中に怒らせて沈められた挙句に踏まれて溺れたことあるからね」

那珂ちゃんはそう言うのと楽しそうに笑った。

何が面白いのか全くわからない。

「その後、起こされて、また沈められて溺れさせられたからね」

「私も沈んでたらそうだったのね……」

「それはないかな。龍田さんは飽き性だから張り合いのない相手とはやらないの。那珂ちゃんと天龍が相手をして、沈められて、また叢雲ちゃんが呼ばれてたと思う」

「大して変わらないわよ」

「全然違うよ。待ってる間に休めるし、叢雲ちゃんならどうやって龍田さんを沈めるか考えてると思うもん」

そういうことね。

「那珂ちゃんが優しかったのわかった?」

「それは龍田さんと比べたらの話よ。私から見ればどっちも怖いわ」  
「ええ。あの人に比べたらだいぶ後輩思いだと思っただけよ」

那珂ちゃんが不満そうに言う。

それにしてもお腹空いたわね。

「後輩思いの先輩。夜ご飯ご馳走なさいよ。お腹空いたわ」

「仕方ない。奢ってしんぜよう。こんな時間だしファミレスでいい？」

「ラーメンでもいいわよ？」

「こんな時間にそんなの食べたら太るよ？」

「その分のカロリーは消費してきたわ。今なら炒飯も食べられるわよ」

「はいはい。じゃあ餃子もつけてあげるよ」

## 第20話

別に神通を蔑ろにしていたわけじゃない。

けど、彼女はそう思っていたらしい。

司令官に「そう言えば……」とあからさまなご意見を頂いた時は驚いた。

どうやら、鈴谷ばかりに目をかけるのは秘書艦としてよくないそうだ。

私にそんなつもりは一切なかった。と言うより、どちらかと言えば私が鈴谷に振り回されている。そう言った方がいい。

「今度の大規模作戦が終わったらしばらく休暇を与える」

司令官はそう言った。

「ふう〜ん……私は別に構わないけど、休暇明けに溜め込んだ仕事を私に投げたら承知しないからね」

私はそう言った。

しかし、どこか彼は自信満々。不思議に思ったけど、その答えは作戦完了後にわかった。

私に与えられた休暇中、長門、妙高、川内の出撃予定は空白になっていた。長門はわからなくはない。けれど、妙高と川内に関して出撃予定がない、ということはおかしい。

出撃予定とは艦装使用許可と考えていい。妙高は教官役、川内には駆逐艦を率いての哨戒任務がある。

作戦完了後、私はこれを見てからの方が大変だった。作戦中よりもだ。

長門、妙高、川内を相手に適材適所の書類仕事の分担を割り振り、仕事が早い妙高には二人のサポートを頼んだ。そして、司令官のあしらい方もレクチャーした。彼は、定時には絶対家族の待つ家に帰る。それまではこき使っても構わないと。

私がそんなこんなでバタバタしてる間、彼はポロツとこう漏らした。

「神通さんがこんなことを言いださなきや……いや、これは彼女なりの配慮だろう」

神通。あなたは私に気を使ったかもしれないけど、そのおかげで私はドタバタする羽目になったのよ！

――

何はともあれ、無事に休暇初日を迎えられた。

私は数日分の着替えを詰めたボストンバッグを手に持ち、別に持ち歩く鞆を肩からかけて、神通に指定された時間の少し前に駐車場で待っていた。

私のニコチン供給機は灰を出さない。

ぼおくとしながら水蒸気を吐いていると、那珂ちゃんのご機嫌な声が聞こえてきた。

「叢雲ちゃん。煙草を吸うならちゃんと喫煙所に行きなよ」

面倒なのに見つかった。

私は電子タバコの電源を切り、一応那珂ちゃんに頭を下げた。

「申し訳ありません。休みということで気を抜いていました」

気を抜いていたという表現には語弊がある。

神通との待ち合わせが指定された時間よりも早く来なければならぬ。

なぜなら、神通が必要以上に早い時間から待っているからだ。

今回の場合、マルロクサンマル、六時半と言われたが、私は四時に起きて、五時過ぎにはこの場所にいた。つまり眠い。

「そうかしこまられると、那珂ちゃんは何も言えないんだな」

私が頭をあげると、川内型の制服では無く、可愛らしい洋服を身に纏った那珂ちゃんがお酒を片手に困った顔をしていた。

私の頭の中が？の文字で埋め尽くされる。

「就業時間中の飲酒は……と言ってもまだ五時半ですが……何朝から飲まれているのですか？」

私がそう尋ねると、那珂ちゃんは首を横に振った。

「朝からじゃないよ。昨日の夜からだよ？」



那珂ちゃんはさも当たり前だと言いたげな表情でそう言った。けれども、那珂ちゃんの顔は赤くなっているわけでも、酔っている様な素振りは一切ない。

「そう……」

「うん」

そんなやりとりをしていると、神通が走ってこちらにきた。

「遅れてしまい申し訳ありません！」

「気にしないで。私はゆっくり一服したかっただけだから」

「那珂ちゃんも外の風を浴びたかっただけだから」

那珂ちゃんも？

「那珂ちゃんもお休みなの？」

「そうだよ。偶には神通ちゃんと二人でゆっくりしてこいって言われてね」

なるほど。つまり那珂ちゃんも一緒か。

でも私には神通がいる、面倒な雑用は彼女に任せればいいよそう思っていた。

「神通……その荷物の多さは何かしら？」

神通は大きなバックパックにボストンバッグ、更に普段の休みに持ち歩いている鞆を持っていた。たかが二泊三日の小旅行なのに荷物が多すぎる。

「必要な物を全ての用意させていただきました！」

神通は嬉しそうな笑顔でそう言った。

必要なものってそんなにあるのかしら。もしかしたら昨日の私がいっつもしなかった様な忘れ物があるかもしれない。少し不安になった。

「行きましょう！ 乗ってくださいい！」

神通は嬉しそうにそう言うと、彼女の愛車の鍵を開けた。

彼女はトランクを開けると、自分の荷物を乗せず、私たちの荷物を先に乗せようとした。

「先に重たそうな神通ちゃんの荷物を乗せなよ。那珂ちゃんたちの荷物は自分で積むよ」

「そうですか……」

少し残念そうな神通は自分の荷物を積み込み、その後、那珂ちゃん、私が続いた。

「どうぞ乗ってください」

「那珂ちゃんは寝るから後ろの座席ね。叢雲ちゃんが助手席に乗ってあげて」

「わかったわ」

どうどうと寝ると宣言するのは鈴谷に似ている。

そんなことを考えながら、私は助手席に乗った。

「広いわ……」

「席、下げてもいいよ」

後部座席を見ると那珂ちゃんは既に靴を脱ぎ、足を座席にあげていた。

「那珂ちゃん……お酒をこぼさないでくださいね？」

「もうこれ飲みきったら寝ると思う」

宣言通り、車に乗ってすぐ、那珂ちゃんは後部座席に横になると寝息をたて始めた。

――

私は二泊三日の小旅行に行くことと、朝の集合時間しか伝えられていない。

行き先も知らされず本来なら怒るところさけど、忙しさに忙殺されていた私はあえて聞かなかった。お酒の匂いが充満した車内を換金するために開けた窓から流れ込む風が心地よい。

「叢雲さんはどこに行くのか聞かないのですか？」

ハンドルを握る神通が不思議そうに私に尋ねた。

「あなたが連れて行くところでしょう？　心配してないわ」

私がそう言うと、神通は少し嬉しそうな顔をした。

「そうですか……ちなみに行き先は箱根です。叢雲さんにも那珂ちゃんにも少しゆっくりして貰おうと思って温泉宿を取りました」

「いいわねえ……それで、あなたが持ってきた必要な荷物って何なの

よ?」

「お酒がほとんどですね。焼酎とワインと、後は叢雲さんが好きそうなお菓子類ですかね」

「宿のご飯は付いてないの……?」

「今日は付いてません。予約の関係で今日は夜チェックインして、部屋で寝るだけです」

今日一日であるの神通が持っていた巨大なバックパックの中身を空にしろというのかしら?」

それは無理よ。

「……どうして今日の夜のチェックインなのに、こんな早い時間から向こうに向かうのかしら?」

混まない時間を選んだと考えれば納得はいく。けど、それにしただって早すぎる。

「観光もしようかと思いましたが……」

箱根ってそんなに見るものあったかしらね?

芦ノ湖があつて……関所があつて……後は山があるわね。

「観光って……あなた、まさか、お正月みたいに山を走らせようなんて考えてないわよね?」

私がそう言うのと、神通は笑いながら答えた。

「二水戦の子達ならそれもアリかと思いましたが、叢雲さんにそんなことはさせませんよ。先ほども言った通り、お二人にはゆっくりして貰うつもりです」

「……駆逐艦として、私はあなたが怖いわ」

「叢雲さんが駆逐艦だと思ったことはありませんよ。いくら那珂ちやんの訓練を受けたとはいえ、単艦で長門さん達と戦える力を有しているのですからね……改二になられた今、もう私は太刀打ちできないなと思つてます」

「そんなことないわよ。本来の実力を考えれば、私なんかより、あなたの方が圧倒的に上だわ」

これはまた今度話そうかしらね。

私は演習で神通に負けた。彼女は自分の負けと言うけど、結果

は紛れもなく私の負け。

けど、不思議と悔しいという感情は湧かなかった。

「また今度機会があれば」

神通はそれ以上、この話題に触れようとはしなかった。私もそれを感じ取り、それ以上は続けなかった。

「それにしても……なかなか珍しい組み合わせね。私とあなたと、那珂ちゃんなんて」

「摩耶と鈴谷も誘ったのですが……二人は休みが取れずに駄目でした」

あの二人がこういう話に食いつかないはずがない。

けど、ある疑問が浮かんだ。

「鈴谷と那珂ちゃんが仲がいいのは知っているけど、摩耶と那珂ちゃんって仲いいの？」

「そこは何とも。あの摩耶が誰かに苦手意識を持つということは無さそうですけど……」

私はその言葉で何となく察した。

きつと、摩耶が事情を察して鈴谷を説得したのだろう。

「そうねえ……おばさん達の苦労を若人にも知ってもらいましょうか」

私は大きく伸びをした。

そう、今は休暇中なのだ。気兼ね無く、遊んだって許されるはずだ。

「私はまだおばさんという歳じゃ無いのですが……」

「あの二人からすれば、私たちはおばさんよ」

「そうですか……そう言えば、曙さんとは歳は違えど同期生ですよね？　曙さんとは遊びに行かれたりしないのですか？」

曙か。曙ねえ。

「言われてみれば、二人でどこかに遊びに行ったことはないわね」

まず趣味が違う。

曙には釣りという趣味がある。けど、私にそんな趣味はない。

どちらかと言えば、買い物に出かけた方がいい気分転換になる。

何もせず、じつと海を眺めているのは退屈だと思う。

「意外ですね。お二人は仲がいいのに」

「そうねえ……歳の離れた友達というより、歳が離れた生意気ないとかみたいな感覚ね」

実年齢が下の人間で私に気兼ねなく物事を言えるのは曙ぐらいしかない。

それも、後ろでびーすか寝てる鬼教官のシゴキに共に耐えた仲間からだろう。

「羨ましいです」

「あなたが同期生にいたら、きっと私なんて相手にされていなかったよ」

「そんなことはありません」

「立場が違えば見える景色も変わるわ。あなたと私の先輩後輩の関係はこれからも変わらないけれど、もしあなたが私の上に立てば、私の扱いづらさがわかるはずよ」

「叢雲さんは自分のことをお局さんとお思いですか？」

失礼ね。

そう思ったけれど、実際そうなのかもしれない。

私は何も答えなかった。

「叢雲さんの下の人はそんなこと思ってませんよ。少し言い方がキツイときがあるけれど、優しくて頼りになる女性だと思っているはずですよ。そうでなければ、あの鈴谷さんがあなたに懐くはずありませんよ」

神通は少し寂しそうな顔をした。

「だといいわねえ……」

そう言われて少し安心した。

そして、今回の旅行の目的も少しだけわかった。

彼女も悩んでいるのね。

時間はたっぷりある。ゆっくり温泉に浸かって、部屋でお菓子を食べながら神通の話も聞いてあげましょう。

後ろで寝ている艦隊のアイドルはきつと夜に備えているので

しょうじ。

## 第21話

神通が予定していたであろう時刻よりも早く着いてしまった。宿の当然ながら宿のチェックインにはまだ早い。

高速を降りてすぐのコンビニに車を停めて、軽食をとりながらこの後どうするかを話している。

「車を置かせて貰って、3人で駅伝でもする？」

ほろ酔い気分の那珂ちゃんが名案だと言わんばかりな顔をする。

「それもありかもしれませんが……」

神通。あなた、さつき私にゆつくりしろと言ったばかりじゃないの。

「けど、こんな大きい車をずっと置いておくのも申し訳ありませんし、そもそも車道を三人並んで走っていたら迷惑でしょう」

私の知っている駅伝はみんな決めてられた距離を走るものだけど、この二人は一人で完走することを駅伝と言うのね。

「それもそうだね……叢雲ちゃん。冗談だよ？」

「あらららひふあほひふほほはんひひほへはいほほ（あなた達が言う冗談に聞こえないのよ）」

私はあるまんを頬張りながらそう答えた。

やっぱりあんまはこしあんね。

「叢雲さんは私たちを何度と思っているのですか……」

「そうだよ。お休みで旅行に来てまで訓練しないよ」

あなた達よく聞き取れたわね。

「それで、どうしますか？」

「那珂ちゃんは関所跡地に行きたい！」

「叢雲さんは？」

「私、箱根ってあまり詳しくないのよね……四年に一度山の神が現れる程度の知識しかないわ」

「叢雲ちゃんはお正月は駅伝見ながらおせち食べてそうだもんね」

「そんなことないわ。戦場（初売り）に行かなくちやいけないもの」

「正月早々出撃とは穏やかじゃありませんねえ……」

神通が神妙な顔をする。きつと私の言っている意味はよくわかってないわね。

「まあ、今はそれもこれも忘れて、休みを満喫しましょう。じゃあ那珂ちゃんの言っていた関所跡地に行きましょう」

神通はそう言って車のエンジンをスタートさせた。

――

関所に向かう道中、私たちは湯本の駅で車を停めた。

「この光景は写真で見たことあるわ！」

少し興奮気味な私がいる。

ちなみに私はあれだ。何度か横を走る江ノ電にサンルーフから身を乗り出して手を振ったことがある。その時はまだ艦娘じゃなかったし、社会的な立場も曖昧だった時だ。

たしかその時は、仲の良かったドイツからの留学生の運転だった。彼女は元気にしているのだろうか。

「意外だねえ……叢雲ちゃんが鉄道女子だったなんて……」

「別に鉄道なんて興味ないわ。けど、この景色は好きね」

山の中に突如現れた鉄道のレール。そして温泉街らしい造りの駅。

神通がせっかくですし寄っていきましようかと気を使ってくれたことに感謝しかない。

駅の周辺をウロウロしていると、ちょうど電車がきた。しばらくすると、大荷物を持った学生や家族ずれがバス乗り場に列を成した。

「あんなに大荷物で……大変そうですね。車でくればいいのに」

「神通ちゃんは鍛えてるから平気かもしれないけど、ここまで運転してくるのも重労働だと思うよ」

神通のボヤキに、那珂ちゃんがそつと答える。

神通はよくわからないという顔をしていたので、別の話題に切り替える。



「せっかくですし、お土産でも買っていきましようよ。こちらへんの方がいっぱいあるでしょう?」

「そうだね。また偶然にもここに車が停められるとも限らないし、帰る日にバタバタしてて買い忘れた、なんて言ったら川内ちゃんが拗ねちゃうしね」

きつと鈴谷と摩耶もそうなるでしょうね。

お詫びで買っていったお菓子を頬張りながら「マジあり得ないし」とかぶーたれそうね。

――

近くにあったお土産やさんに入ると、那珂ちゃんのテンションが急に上がった。

「叢雲ちゃん、叢雲ちゃん」

「何かしら?」

那珂ちゃんに呼ばれて振り返ると、両肩を掴まれてガツクンガツクン前後に揺すられた。

「返してよ! 叢雲ちゃんを返してよ!」

揺すられている頭の中で微かな記憶が蘇る。

「……ナカアは私の母になってくれる存在だった」

そう言うと、那珂ちゃんの両腕がピタッと止まった。

「叢雲ちゃん。それ作品違うよ。というか、なんでそんなマイナーなセリフを……」

「たまたま深夜にやってたロボットのアニメの台詞を思い出したのよ。これじゃないの?」

「全ツ然、違うよ」

那珂ちゃんは今まで聞いたことがない盛大なため息をついた。

「なんか腹たつわね」

「叢雲ちゃんも少しは世の中に目を向けないと……社会現象になったんだよ、これ」

那珂ちゃんはその言うと、そこに陳列されていたお菓子を指差した。

そこには見たことがあるロボットが描かれている。確かに私が

見たやつとは違うわね。こんなにスマートじゃなかったわ。

「これなら見たことあるわ。あれでしょ。何億年も前から愛してる♪  
♪ ってやつでしょ?」

「それも違うよ!」

「じゃあ何なのよツ!」

私がそう言うと、那珂ちゃんが何かを思いついたようだ。

「じゃあ神通ちゃんに、この那珂ちゃんの七光り! あんたバカア?  
? って言ったら教えてあげる」

「なんでそんなこと言わなくちゃいけないの! ちよつとツ! 押  
さないですよ!」

那珂ちゃんはそう言うと、私の背中を押した。

神通はお菓子を真剣に選んでいたようだ。

「神通ちゃん! 神通ちゃん!」

那珂ちゃんがそう言うと、神通は横目で私たちを見た。

「ほら、叢雲ちゃん!」

「この那珂ちゃんの七光り! あんたバカア?」

神通、ごめんなさい。あなたのことをそんな風に思ったことなんて一度もないし、この自称艦隊のアイドルよりもよっぽどあなたのほうが賢いと思っっているわ。

けれど、私も那珂ちゃんの後輩であって、逆らえないのよ。

神通が珍しく、私を睨む。正直に言えば怖い。

「私が誰よりも二水戦をうまく扱えるんです」

「神通ちゃん、それ、違うよ」

「二人ともいい歳なんだからお店の中ではしゃがないでください」

神通はそう言うと、盛大なため息をついた。そしていつもの神通の顔に戻る。

「何をそんなに悩んでいるの?」

「二水戦の子たちにも何かを買っていつてあげようと思いましたがね。ついでに那珂ちゃんや川内ちゃんの子達の方も買っていいのかなと」

偉いわね。そうになると私は一応秘書艦という立場だから鎮守府のみんなに買っていくなくちゃいけない。それだけです。いい数にな

る。だから買っついていかない。不公平が生まれちゃうから。

「今気がついたのだけど、私、艦娘になつて初めて旅行に来たかもしれない」

そう言えばそうだ。遠出はしているけど、全部日帰りだし、外泊なんて出張ぐらいしかない。だからお土産をみんなに買っついていくなんて頭がなかった。

「叢雲さんも、那珂さんも、買い物为目的でついでにどっか見ていくつて感じで外出しているからでしょう?」

それは一理あるかもしれない。

「じゃあ那珂ちゃんも選ぶよ。どれがいいかな?」

「甘いものが駄目な子もいますからね……それで、これは好き嫌いが分かれそうだし……」

「じゃあ全種類買っついていけばいいじゃない」

「それは安直すぎます」

二人があーでもない、こーでもないと言いだめた。

そんな二人を他所に、店内を見回していると、面白いものが目についた。

「なになに……これを……こうして……ここを……こうね」

サンプルを手にとりながら説明書の指示に従っていく。

「それで?　最後はここね」

やったわ。開けることが出来たわ。

「これ、面白いわね。あの二人に買っついていってあげましょう」

そして中に別のお土産でも入れておきましょう。

近くに置いてあつたよく見かける猫と青いタヌキのストラップを買い物かごに放り込み、私は店員さんと呼んだ。

「すいませ〜ん」

「はい、なんででしょう?」

「これの一番難しいやつを二つください」

「かしこまりました」

店員さんはそう言うと、在庫をしまう下の引き戸から同じものを二つ。パッケージには最高難易度と書いてあるものを取り出してく

れた。

「ありがとうございます」

「何かありましたまたお声がけください」

店員さんは一礼すると、レジに戻っていった。

あとはお土産のお菓子類を買っていけば終わりね。

「……いつまで悩んでいるのよ」

お菓子売り場に戻ると、神通と那珂ちゃんはその場にしゃがみこみ、ジッとお菓子を眺めていた。二人とも目が真剣だ。

「いえ、川内型が持って来たお土産として、恥をかかないのはどれかと思ひましてね……」

神通は目を逸らさずにそう言った。

恥をかかないのお土産ねえ。私はもしあの那珂さんからお土産をもらった時を想像した。

「間違いなく。何でも、美味しいです！　　って言う気がするわ」

「いや、お土産を貰って美味しくないとは誰も言わないでしょ？」

那珂ちゃんも目を逸らさずに答えた。

「全種類買っていけばいいじゃないの」

多分一つずつ買っていても足りないであろう。それだけ川内型が指導してきた子は多い。

「それだと、人気不人気が出て不公平になるかなと思ひまして」

変なところで真面目になるんじゃないわよ。

「なら残ったやつは私に回せばいいわ。執務途中のお茶菓子として司令に処理させるから」

きつとあの人のことだ。

残ったお土産を家に持ち帰って奥さんと食べるに違いない。去年、私が一応義理であげたバレンタインチョココレートを家に持ち帰って二人で食べたと報告してきたぐらいだ。そして、ホワイトデー。司令のお家にお邪魔して夜ご飯をお返しに頂いた。

奥さんの「旦那は私のものよ！」アピールかと思っただけど、そんなこともなく、何かあれば司令に厳しくいつて欲しいと言われたくらいだ。

「……それもそうですね。ここでいくら悩んでいても仕方ありません」

神通は立ち上がると、端から一つずつ買い物かごに入れていった。

## 第22話

お土産を選び終え、せっかく箱根まで足を伸ばしたのだから何かやろう。そんな話をしながら車を走らせていると、ガラス細工の看板が目に入った。

「ガラス細工？ 風鈴でも作るのかしら？」

「いくら何でも時期はずれじゃない……？」

「時間もありませんし、少し覗いて行きましようか」

食堂も併設されているし、ついでに軽く何か食べようという話になった。さつきから食べてばかりだけど、大丈夫かしらね。

車を止めて、工房の中を覗くと、子供達が楽しそうにガラス細工を作っているのに対し、若いアベック達はてんやわんやしながら作業をしていた。

「おもしろそう！ やってみようよ！」

那珂ちゃんが見ながら目を輝かせていた。こういうところは無邪気で子供っぽい。けど、アルコールが入った息で膨らまして燃えたりしないのかしらね。

「そうですね……せっかくですしやってみましようか」

神通もやりたかったらしい。以外とこの二人は子供っぽいところがあるわね。

――

受付を済ませ、指導員の人からコップを作ると言われ、作業の大まかな流れを聞いた。

私たちはガラスを膨らませて形を整えるだけらしい。花形とでも言うのかしら。火を扱うことはやらせてくれないようだ。

「じゃあ叢雲さん。こちらにどうぞ」

指導員のお姉さんに言われるがまま、私は無骨な椅子に座らされた。お姉さんは、これが材料です、と棒の先についたガラスを見せてくれた。こんな小さい塊じゃお猪口ぐらいの大きさなのかしら。そんなことを考えていると、横で別の指導員が感嘆の声をあげていた。「君上手いねえ！」

私はそつちの方を見ると子供が器用に風船を膨らまている。なるほどゆつくり吹かすのね。

「今から、これを熱するので絶対に素手で触らないでください」

あの真つ赤に熱されたガラスを好き好んで素手で触りたがる人なんているのかしら？ 炉から出てきたガラスを見て、私は思わず息をのんだ。熱された鉄は普段から見ているけど、目の前にそれを持つてこられると少し怖い。

「じゃあゆつくり吹いてくださいね」

ゆつくり吹こうとした。けど、吹き込んだ空気が奥にいかない。おかしい。

ならもう少し強く……そう思ったとき、横でパキンツと嫌な音がした。横目で見ると、神通がイラツとした表情で割れたガラスを見ていた。

「大丈夫ですよ。皆さん最初はそんな感じですから。今新しいのを用意しますね」

「はい……すみません……お願いします」

私はそんなミスしないわよ。ゆつくり、ゆつくり息を吹き込んでいくの。吹き込んだ空気の内圧に耐えられなくなったガラスがプクツと膨らんだ。後は吹き込んだ分だけ膨らんでいく。なるほど、ものすごく固い風船ガムだと思えばいいのね。

「お姉さん、その感じでゆつくり……ゆつくり……」

コツさえ掴んでしまえばこちらのもんね。そういえば、那珂ちゃんはどうかしらね？ こういうの苦手そうだけど。

――

「お疲れ様でしたー」

年甲斐もなく熱中してしまった。綺麗な形を追い求めて、ついつい何度も手直しをしてしまった。

指導員のお姉さんも一緒になってしまったもんだから、時間を忘れてしまった。

木箱に入ったグラスを満足げに受け取ると、二人は何かを話し込んでいた。

「那珂ちゃん、そんな話聞いてないんだけど……」

「まだ正式な辞令は下りていませんからね……私も聞いたばかりです……」

そんな話が聞こえてきた。川内型の内輪の話でしょう。私が入っていいもんじゃなさそうね。

「お待ちせ」

「おかえり。神通、この話は宿で……」

「わかりました……お疲れ様でした。叢雲さん。他に行きたいところありますか？」

「特にないわね……それより煤まみれになってしまったわ。早く温泉に入りたいわね」

「そうですね……じゃあ宿に行きましょうか」

――

宿でチェックインだけ済ませると、時間が早かったのか、清掃が終わったばかりで浴槽にお湯は張っていないらしい。私は部屋でゆっくりするのもいいと思っただけ、それまで有料のカラオケルームを特別に無料で浸かっていたいいと言われた。妙にイライラしていた那珂ちゃんが、それでいいというので、私と神通は仕方なく、それに付き合うことにした。

部屋に入ると、那珂ちゃんは何も言わずに機械を捜査し、二本あるうちのマイクを私に渡してきた。

「ちよつと！ 歌ぐらい自分で決めさせなさいよ！」

「大丈夫。叢雲ちゃんなら歌えると思っただけだから。じゃあ那珂ちゃんはサングラスの方やるから叢雲ちゃんはアフロの方ね」

那珂ちゃんはそう言うと、どこからともなくティアドロップ型のサングラスを取り出す。サングラスとアフロ？ 私、そんなファンキーな歌手の歌なんて知らないのだけだ。

そんなことを考えていると、哀愁漂うイントロが流れてきた。まさか……何も準備していない私にこれをやれというの!?

「なかなか無茶させるわね……」

神通は首をかしげている。よくわからないという様子だ。私は何



度か咳払いをして喉の調子を整える。

ピアノが音が途切れ、ドラムだけ……ここね！

「あくあああああああああ……果つてしないい……」

思いつきり声がひっくり返った。けれど、ここまで来たら歌いきるしかない。ここで恥ずかしがってやめてしまえば叢雲の名が廃る。意味分かんないけど。なんとか最初の持ち場をやりきった。

那珂ちゃんはサングラスをあげ、マイクをとる。

「裏切りの言葉に……♪ 故郷を離れ僅かな望みを……♪」

ものすごく渋い声で歌いあげる。さすがは艦隊のアイドルを自称して歌っているだけのことはある。どんな状態でも歌えるってことね。そんな私たちをポカンと見ていた神通は納得したように頷いてみせた。

「なるほど……そういう感じですね」

神通もどこからともなく昔の刑事（デカ）がかけていそうなサングラスを取り出す。あなた達、どこかで打ち合わせしてたんじゃないの？

「叢雲さん。次は私とお願いします」

頑張つて歌っている私に神通はそう言ってぺこっと頭を下げた。もうこの一曲で私の喉は大破しそうなのだけ……

頑張つて歌い上げた。なのに那珂ちゃんはまだ歌い足りないらしい。神通が操作した後の機械を操作する。

「じゃあ次は神通ちゃんとデュエットね」

これを頑張れば、私はお休みなのね。いいわ。付き合っただけ。次は叢雲に何を歌わせようというわけ？

神通がくれた曲は……知ってるわ。そして、あなたのサングラスの意味も理解したわ。じゃあ私が遅れる方をやればいいのね。

イントロが始まる……このタイミングね。

「シブヤ……ゴジ……？ 渋谷に五時!? 嘘お……まいったわね」  
「なんで叢雲ちゃん、そこまで知ってるのよ……」

那珂ちゃんが茶々をいれる。けど、今の私はポケベル世代なのよ。本当はジェイフォン世代だけ。

「ざわめく交差点の〜♪」

神通がそれっぽく歌う。川内型は上手なのね。川内の歌声も聞いてみたいわね。しかし、これはいいわね。無理して歌うことを出来るわ。というか、神通、あなたは世代じゃないでしょうに……

「……………」

そんな私たちを、那珂ちゃんは値踏みするように見ていた。その目には見覚えがある。ジツと黙って小動物を観察するようなかわいらしい視線。だけど、その目の奥には鋭さがある。初めて那珂ちゃんとう会ったときの目そのものだ。理由はわかる。予想外に神通が上手いから。艦隊のアイドルを自称する那珂ちゃんにとって、負けられない相手なんだろう。

那珂ちゃんの鋭い視線に耐えながら、なんとか私と神通は歌いきった。

ああ、そうそう。点数は秘密よ。恥ずかしいから。

那珂ちゃんにマイクを渡すと、何故かモニターにどこかの阿波踊りの様子が映し出された。

「那珂ちゃんが合いの手入れる方ね」

しばらくして流れ始めたイントロ。ああ、これは最近違う歌手がカバーしてたわね。

「ほとんど私が歌うじゃないですか……」

「大丈夫！ ぼっちり会わせるから！」

「そうですか……」

—————

一時間きつちり歌い、晩ご飯がついていないことを思い出した私たちは近くのご飯屋さんで食事を済ませ、部屋にチェックインした。

「広いわね〜」

三人が大の字になって寝てもまだ余裕がありそうな部屋。それも大きい露天風呂付き。

「よくこんな部屋取れたわね。高かったんじゃないの？」

当然、旅費も交通費も出すつもりだったけど、よくこんな部屋が取れたわね。



「なに？ どうしたの？」

那珂ちゃんが訝しげに私を見た。

「確かに時の流れは残酷かもしれませんが、それ以上に新しい物を与えてくれた……いえ、押しつけてきたと思います。那珂さんにとつての私の様にね」

「ああ……そういう話。そうだね。那珂ちゃんもそう思うよ」

那珂ちゃんはそう言うと、女の子らしく湯船につかっていたけど、両腕をへりに回し、少しおじさんくさい格好になった。

「いろんなことがあったね。けど、私は鈴谷ちゃんみたいな子が来てくれて少しは嬉しく思ってるんだよ」

「と、いうと？」

「艦娘……いや、軍人も一人の人間なんだ。確かに対外的には神通ちゃんや長門ちゃんみたいな真面目でしっかりとした子がいいのかもしれない。けれど、私たちは軍人でもあり、艦娘でもある。良くも悪くも、強大な力を持った私たちが軍人氣質でいたら一般人はどう思うだろうって思うときがあつてね」

「平気であるということを確認る。それでいて人間であろうと思うことが大事なんだと？」

「それは違いますね」

いつの間にか、徳利とおちよこを乗せたお盆を持ち、脇に一升瓶を抱えた神通が脇に立っていた。

神通はお盆を湯船に浮かべると、一升瓶を温泉につけた。

「神通ちゃん、遅いよー！」

「用意には時間がかかるんです。体を洗ってきますね」

「ここでこの話は中断になった。」

「しかし……神通ちゃんはスタイルいいね」

「ほんとね。出るところは出て、締まるところは必要以上に締まってる」

那珂ちゃんと二人で、体を洗う神通を観察する。

「あの……そんなに見つめられると恥ずかしいのですが……」  
「いいじゃない。減るものじゃなし」

私はそう言いながら横目で那珂ちゃんを見る。

私の勝手な想像でものを言うけど、那珂ちゃんは必要最低限以外は持たない主義ね。筋力も、胸囲も。

「なに？ 叢雲ちゃん、目つきがイヤらしい……というより、失礼なことを考えてない？」

「何も言っていないじゃないの」

「ふうくん……叢雲ちゃんは余分なものが増えたね！」

「ちよつと！ やめなさいよ！」

那珂ちゃんが私のおなかをつまむ。

「いい歳した人たちが何やってるんだか……」

神通のため息が聞こえた。

私は那珂ちゃんと顔を見合わせ、次の標的は神通だと目標を定めた。

――

神通が用意してくれた日本酒は辛口だったけど、一度レンジで温めたのでしよう。程よくアルコールが抜けて飲みやすくなっていった。

「ぶひい〜」

那珂ちゃんが嬉しそうにおちよこを飲み干す。

「一献どうぞ」

「悪いねえ〜」

温泉、湯船に浮かぶ徳利、脇に浸けられた一升瓶。

雰囲気が私たちを酔わせる。こんなところ、鈴谷に見られたら何言われるかわかったもんじゃない。

「お邪魔します」

神通がゆつくり、波を立てないように湯船につかる。

こういうところは本当に行儀がいいとか、育ちがいいと思う。

「じゃあじゃあ……みんな揃ったということ、乾杯しよう」

「ほら、お猪口持ちなさいな」

私が徳利を傾けると、神通は「頂きます」と言い、両手でお猪口を持った。

「乾杯」

お猪口を目線より少しだけ上に掲げて、一口。

私と那珂ちゃんは既に何杯か飲んでしまったけど、一杯目の神通はクウーツと飲み干し、ふうくと大きく静かに息を吐いた。

「こんな風に飲むのは初めてですね」

「そうね。と、いうか、あなたから飲むなんて言われるとは思わなかったわ」

「神通ちゃん、そんなに強い方じゃないんだから無理しないでね？」

那珂ちゃん。私は知っているわよ。

あなたがとんでもなく強くて、アイドルらしくないお酒の飲み方をすることも。

「そうですね。またお二人とこういう風にゆっくりしたいと考えていますが、それもしばらくお預けになりそうですし」

神通はそう言うと、残念そうなため息をついた。

けど、妙ね。確かにこうして休暇を合わせるの難しいかもしれないけど、お酒を飲むぐらいできるはず。

「神通ちゃん、その話、ここでするっ！」

那珂ちゃんの目がすわった。

口元をお猪口を持った手で隠しながら、神通をまつすぐ見つめている。

「なに？　もしかして異動になったの？」

「うん。那珂ちゃんと叢雲ちゃんがね」

「へえっ!？」

那珂ちゃんに思いがけない言葉にとんでもなく間抜けな声が出てしまった。

那珂ちゃんと……私が異動？

そんな話、何も聞いてないわよ。

「ちよつと！　どういうことッ!?!　どこに飛ばされるのよッ!？」

「キールです」

神通が出した答えの意味がわからない。

「……きいるっ？　どこよ、それ」

聞いたこと無い地名ね。そんな場所にうちの艦隊なんていたかし

ら。

「ドイツのキールだよ。今、ドイツ海軍の艦娘の子がいるはず」

ドイツ……どいつ？

「わたしはえいっ」

はなせないけど

そんなわたしに

ドイツいけ？」

「叢雲ちゃん、センス無いねえ…

ことばのかべを

こえてみせます

わたしアイドル

なかちゃん」

「二人ともふざけている場合ですか……」

神通のため息が盛大に漏れた。

空港ラウンジ

温泉旅行からはあつという間だった気がする。

引き継ぎして、荷物をまとめて、送別会をして貰って。

アバルトをどうするか悩んでいると、鈴谷ちゃんと面倒を見てくれると言い出したので、不安ながらに預けた。若葉マークを付けられた私のアバルトを見たとき、どこかもの凄く寂しくなったわ。

まるで今生の別れみたいに鈴谷が泣いていたのを覚えている。一年間だけ指導艦として海外にいくだけなのに。

「鈴谷！ 今よりもずっと強くなつて待つてるから！」

なんて言われた時は私も思わず涙が出そうになった。

けれど、もう一度言うわよ。

一年間だけで、しかもその間に何度かこっちに帰ってくる。

そこまで盛大に送り出されると帰ってくるなど言われているようで少し悲しい気持ちになるわ。

「しかし……思いの外はやくついたわね……」

もう免税店も巡ってしまった。買おうと思っていた化粧水や、パック、クリームも買ってしまった。

フライトまであと三時間。どうしたものか。そう悩んでいると、航空券でラウンジに入れることを思い出した。

受付でチケットインを済ませ、大きなテレビでワイドショーを見ながらサービスのシャンパンを傾ける。

なんて優雅なひと時なのかしら。出来ることならずっとこうしていたいわね。

「何か食べ物をお持ちしましょうか？」

職員のお姉さんに急に声をかけられて、思わず姿勢を正してしまふ。

ピシッとした制服を着た女性に声をかけられる。下手したら艦娘よりもピシッとしてるんじゃないかしら。



「あつ……大丈夫です。自分で買いに行きます」

私がそう言うと、お姉さんはキョトンとした顔で私を見ている。

お姉さんと少し見つめ合っていると、私の後ろから聞き覚えのあるため息が聞こえた。

「叢雲ちゃん……ここはフードコートじゃないんだよ?」

振り返ると、トレーにカレーうどん、そしてグラスに注がれたビールを二つ乗せた那珂ちゃんが呆れたように見ている。

「お金いらないのかしら?」

「ご不要でございます」

お姉さんはそう言い、那珂ちゃんは黙って頷いた。

「そうなの……じゃあ、何かあるか見たいから自分でいくわ」

――

お寿司にサラダ、オードブルにスイーツ、いろいろと目移りしたけどお腹の空いていた私はカウンターで牛丼少なめうどん少なめのセットを頼み、出てくる間にドリンクサーバーからリングジュースを取る。後で食べるケーキを心に決めて、私は注文したものが出てくるのを待った。

「お待たせしました」

私、少なめって言ったわよね?

トレーに乗せられたのは、成人男性の並盛りといってもいい量の牛丼うどん。

「……あの」

「少なすぎましたか?」

カウンターの奥からひよこつと顔を出した青年が申し訳なさそうに私を見ている。

「……いや」

「申し訳ございません。艦娘様の量がいまいちわからなくて……」

さすがは至れり尽くせりのラウンジね。

私が艦娘だっていうことも知っていた訳ね。そして彼の真摯な対応。多すぎる、なんて言えないわ。

「……そうね……卵をトッピングして貰ってもいいかしら?」

「かしこまりました……どうぞ」

すぐにうどんに乗せてくれた煮卵。これでサラリーマン・豪華なランチセットのできあがりね。

多い分は那珂ちゃんにあげましょう。

「おお……随分と豪勢だねえ」

席に戻ると、私の隣に席を取っていた那珂ちゃんが感嘆の声をあげた。

既にからになっていた那珂ちゃんの器に牛丼とうどんを少しよそつてあげる。

「……那珂ちゃん。こう見えて考えて量を取ってきたんだけど」

既に食べ終え、ビールで一服している那珂ちゃんは不満そうに私を見た。

「足りないだろうと思つて取つてきてあげたんだから気を遣わなくていいわよ」

「……飛行機の中でラーメンも食べたいのに」

まだ食べるというのか、この軽巡は。

私は少し呆れながらもうどんをすする。あら。美味しいじゃない。すぐに出てきたから味には期待していなかったけど、それなりに美味しいわ。

「しかし、叢雲ちゃんも大変だね」

「何がよ？」

那珂ちゃんは文句を言いながらも私がよそつた牛丼を食べていた。

「本来なら叢雲ちゃんは今回の教育隊の教官には入っていなかったのに、鈴谷ちゃんの一件で抜擢されたんだから」

「……どういふこと？」

「向こうにも少し困つた重巡がいるんだって」

「つまりは……ドイツ人の鈴谷がいるつていうこと？」

想像がつかない。ドイツ人って真面目なんですよ？

鈴谷も実は真面目な子ではあるけど、それとドイツ人の真面目さとは違う気がする。

「そうみたいだね。仲良くなれるといいね」

それは厳しいわね。まず言葉がわからないわ。

訓練中は艀装が言葉を翻訳してくれるから問題ない。それは事前  
に説明を受けた。けれど、艀装がなければ言葉が解らない。プライ  
ベートで遊びに行くと言っても、お互い気を遣わせてしまうし、まし  
ては私は教官。鈴谷の時は直属の教官じゃなかったから親しくなれ  
たけど、もし私が昔の那珂さんとプライベートで遊びに行くとなつた  
らガツチガチに緊張してしまうわ。

鈴谷と神通みたいに。

「だといいわね……しかし、ドイツねえ」

「何か思い入れでもあるの?」

「短大の時に仲良くなった留学生がドイツ人でね。背が高くて、スタ  
イルもよくてとても同い年とは思えなかったのだけど……その子、見  
た目と言動はすごく真面目なんだけど、遊びになるとはっちゃける子  
でね。それも少し方面が違うのよ。どこか不良くさいというか……」  
「大学生の遊びなんて、飲んで踊って騒ぐんじゃないの?」

「いつの話よ……でもそういう方面じゃないのよ。どこから持ってき  
たかわからない車で夜な夜なドライブ行って、日の出を見て帰ってく  
るの。それで、適当に見つけた定食屋さんで早出のおじさん達に混じ  
りながらご飯食べて帰るのよ」

「……よくそんなことしてて叢雲ちゃんのご両親怒らなかつたね」

「二人暮らしだったからね。私の地元、海がないのよ。あるのは湖だ  
け」

彼女は元気にしているだろうか。確か卒業して、向こうで仕事に就  
いたとは聞いてはいるけど、いつの間にか連絡はとらなくなってい  
た。私も会社の仕事が忙しかったし、その後艦娘になったから。会え  
る機会があれば会おうかしらね。私も向こうに着いたら遊び相手は  
那珂ちゃんしかいないでしょうし。携帯を取り出して連絡先を探す。  
よかった。残ってたわ。あの時はSNSとかアプリなんて無かつた  
ものね。

「ふうん……那珂ちゃんは毎週末、一人寂しく宿舎でお留守番して  
ればいいんだね」

「何拗ねてるのよ……それに向こうもそんな暇じゃないでしょう。もしかししたら家庭を持つているかもしれないわ」

「叢雲ちゃんと違って?」

「そうね。私たちと違ってね」

思わずため息が漏れる。何故か二つ重なったけど。

しばらく談笑し、目当てのケーキを取りに行くついでに那珂ちゃんのおかわりも持つてくる。飛行機に乗る前にそんなに飲んでも大丈夫なのかしらね。どうせ飛行機の中でも飲むのでしようし、「日本の艦隊のアイドルは酒臭い」なんて悪い噂たてられなければいいけど。「那珂ちゃんが那珂ちゃんにいるのは叢雲ちゃんの前だけから気にしなくていいよ?」

「どういう意味よ……まさか……那珂さん?」

「まだ那珂ちゃんだから。そろそろ時間になるから行こう」

そう言い、残りのビールを飲み干した那珂ちゃんは那珂さんの顔になっていた。嫌な予感しかしないわ。本当に。

ドイツ・ハンブルク空港

私の英語力も相当なものになったわ。スチュワーデスさんに迷惑をかけること無く、自分の要求を伝える事が出来たもの。本当に快適な空の旅だったわ。横の那珂さんはずっと飲みながら映画を見ていたけど。ちよつと気まずかったけど。

けど、そんな私の前に入国審査という難関が待ち受けている。観光客に混じって列に並んでいる。何を言えがいいのかしら。自分の名前とビジネスつていえばいいのよね。たぶん。

「Next」

初老の女性審査官に呼ばれて、彼女の前に立つ。パスポートを渡すと、彼女は両手で私にサムズアップをしてみせた。こっちは、こんな挨拶があるのかしら?」

「Put your thumb」

サムって親指よね。彼女が指さした機械に親指を乗せてみる。待ちがってなければいいけど。指紋を取られ、彼女は私の顔とパスポートとモニターを交互に見比べると、ニコツと笑って私を見た。

「アリガトウ。ガンバッテ」

彼女はそう言い、私にパスポートを返してくれた。よく解らずに立っているとゲートが開いた。どうやら通っていいらしい。

「だんけしえん」

私なりに流暢な発音で言ってみたけど、彼女は姪っ子を見送るような目で私を見ていた。

さて、あんまりのんびりはしてられない。荷物をピックアップして、着替えて、所定の時間までに待ち合わせ場所に向かわなくてはならない。それに一服もしたい。時間を逆算しながら早足で受け取り場所に向かう。掲示板で乗ってきた飛行機を探す。あった。まだ荷物は降ろされてないみたいね。

「叢雲ちゃん。こつちこつち」

那珂ちゃんの声が聞こえ、那珂ちゃんの姿を探すとカートに那珂ちゃんのトランクと私のトランクが既に乗せられていた。どうしてもう降ろされてるのかしら？

「悪いわね。取りに行ってくれてたの？」

「那珂ちゃん達は艦隊のアイドルだから、関係者のところから出られたのに。荷物も職員さんが用意してくれてたよ」

「早く言いなさいよ……」

「言っただけど、真剣な顔でぶつぶつ何か言ってたからそれ以上は声かけなかったよ。まあ、入国審査の練習してたんだろうけど」

凶星だわ。それしか考えてなかったわ。

「とりあえず急ごう。着替えて、叢雲ちゃん一服したいでしょ？」

「そうね。急ぎましょう」

ハンブルグ空港・駐車場

さすがはドイツ人。時間には正確ね。鈴谷とは大違いだわ。

「お待ちしておりました。ナカサン。ムラクモサン」

とてもスタイルのよろしい制服姿の金髪女性がビシッと敬礼する。対する私たちはちんちくりん二人。

そして日本語もご達者で。勝者、ドイツ美女。艦隊のアイドルも形無しね。チラッと那珂ちゃんを見る。滅多に見れない那珂ちゃん

礼装姿のせいかしら。どうして冷や汗がでるのかしら。

「出迎えご苦労。エルナ・グロツク中佐」

ああ、昔の那珂さんですね。あの口調じゃない、昔の口調ね。あら、えるな、えるな、ぐろつくく？

那珂さんとエルナさんが握手している。エルナさんの横顔をじっくり見てみる。あら。間違いないわ。

「よろしく頼む」

エルナさんが私に手を差し出す。このちよつと見下ろされる感じ。間違いないわ。

「久しぶりね。エルちゃん」

「……やっぱりスズちゃんか。久しぶいな」

エルナさん、エルちゃんの手を握り返すとそのまま抱きしめられた。身長差でつま先立ちになつてるけど。

「ウサギ。知り合いか？」

那珂さんの少し苛立つ声に反応してしまった。エルちゃんの両肩をグイッと押してはね除けて、那珂さんに正対する。

「先ほど話した大学時代の友人です」

「すまない。仕事中だった。今は航空母艦、Graf Zeppelinだ。よろしく頼む」

「なるほどねえ……」

那珂さんが大きいため息を吐いた。まさかいま、ここで腕立てをしろなんて言わないわよね。

「叢雲ちゃんのお友達なら那珂ちゃんともお友達だね。那珂ちゃんのこととは那珂ちゃんってよんでね！」

「いえ、お二人は日本からの迎賓なわけで……」

「いいから、大人しく従いなさい。面倒だから」

「スズちゃんがそう言うのなら構わないが……」

「あと、プライベートは構わないけど、仕事中は叢雲って呼んで頂戴。私が私じゃなくなりそうで怖いわ」

「……そういうことか。わかった。積もる話は後にしよう。乗ってくれ」

さすがはドイツ。日本では超高級車もこつちでは国産車ですものね。

「すごい。ふっかふかね」

後部座席に座り、足が伸ばせる足下の広さとふかふかのシートに思わず感動してしまう。横に座った那珂ちゃんは足を組んで座り、いつの間にか取り出したサングラスをかけていた。

「プロデューサー。次の仕事は何？」

「後輩の指導になります。大物女優の那珂ちゃんさんのレッスンが受けたいと皆楽しみにしています」

那珂ちゃんの寸劇にグラーフが乗っかる。そういえばこの子、日本のお笑いが好きだったわね。

「後輩の指導……その子達、ステージに立ったことはあるの？」

寸劇をやりながら真面目なことを聞いている。こちらへのニュアンス、グラーフはわかるのかしら。

「いえ、まだです。皆、ステージに立つことを夢見て稽古に明け暮れています」

運転席に座るグラーフがミラー越しに那珂ちゃんを見る。グラーフもいつの間にかサングラスをかけていた。こちら辺の用意の良さはドイツ軍人の周到性なのか、本人の正確なのか、それとも運転するときはいつもサングラスなのかわからない。

「売れそうな子はいるの？」

那珂ちゃんは足を組み替えてミラー越しにグラーフを見る。すごいわ。映画のワンシーンみたい。

「若干名ですが、ステージに立つには早すぎる。今回お二方に来て頂いたのは彼女たちを一刻も早くステージに立たせるためです。今の欧州はいつ日本の様に深海棲艦の危機に晒されてもおかしくない」

「うくん……そこはもつと別の言い回しをして欲しかったな」

那珂ちゃんは残念そうに呟いた。グラーフもハツとしたような顔で「すまない」と謝ったけど、日本語が話せる外人さんにそこまで求めるのは無理じゃないかしらね。よくやったほうだと思っわ。

「ちよつと気まずいからCDかけてもいいか？」

那珂ちゃんがいじめるからグラーフがしよげた。「ごめん！ 気にしないで！」と謝る那珂ちゃんだけど、こうなったらグラーフはしばらく引きずる。反省する。仕方ない。ここは私が助け船をだしてあげましょう。

「なんで気まずいのか解らないけど、聞きたければ聞けばいいんじゃない？」

「ごめんね！」

「泣かせの効いたラブソングじゃないから安心してくれ」

那珂ちゃんの謝りを軽くいなして、グラーフはオーディオを操作する。どうせエルちゃん……もとい、グラーフのことよ。かかる曲は知っている。爽快なギターから入るこのイントロは何度も聞かされた。

「……那珂ちゃん、タオル持ってないんだけど」

「止まらなければ大丈夫でしょ？」

ここはドイツ。窓から流れる景色もヨーロッパそのもの。

なのに車内に流れる白いスーツの渋い日本語。おばさん二人の合唱。

不安なんて絡みつく鎖なんてどこかに捨ててきてしまった気がするわ。

「ナカチャンサン。気が合いそうだな」

「那珂ちゃん！ そうだね。グラーフちゃん！」

「ちゃんはさんと同じ敬称だから、那珂ちゃんで大丈夫よ。グラーフ」

「よくわからないけど、そういうものなのか。那珂ちゃん」

「そう。それでよろしい」